
公道最速少女

oroto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

公道最速少女

【Nコード】

N7362K

【作者名】

o r o t o

【あらすじ】

12歳から免許が取れ、峠などでのレース行為が合法になった時代。

美少女と言っても過言ではない横谷瞳は愛車、トヨタ スプリンタ ートレノ AE86 通称ハチロクを操り最速を目指す。

そんな彼女にはとあるコンプレックス。

さらに瞳の周囲の人物は。

神に選ばれし（自称）子。

普段は夢げだがハンドルを握ると性格が変わる女子。

瞳が好きな幼馴染。

色々歪んだ姉。

などなど愉快な(?)仲間(身内)。

学園コメディと走り屋物語を混ぜたおそらく新感覚の物語。

※執筆が気ままなので全然更新されないこともありますので、そこはご了承ください。

プロローグ（前書き）

作中での公道でのレース等の公道での暴走行為は違法です。また、未成年の免許もこの小説の設定なので、実際には違法です。絶対に真似しないでください。

プロローグ

20XX年。日本でなにをもち狂ったのか満12歳から免許が取れる時代。いったい……なにがあったんだろうな。

理由としては「若者の車離れ」の防止だそうで、今まで産業を支えていたともいえる車業界からの若者離れを防ぐらしい。

さらに、国は首都高速道路。全国の峠を封鎖してサーキットのようにした。特別な免許（とはいっても簡単に取れるのだが）で走れるようになっていく。

それによって『合法的な走り屋』が増えてきた。というか、峠とかを一晩100円程度、定期券のようなものを買えば50円程度で走れるのにわざわざ非合法に走ることもないのだが。

そんな時代、俺は古い型式の車、トヨタ スプリンタートレノ AE86型に乗っている。

どっかのマンガの主人公と同じだなというツツコミが飛んできそうだが、実際にそうなので仕方がない。第一気に入っているんだし。チューンは親の形見のエンジン、レース用の4A-G。本格的に頭○字Dの主人公と同じじゃねーか、と言われるのは目に見えているが、その辺は作者にツツコンで。

それをボンネットなどの軽量化、パワステ化などで乗ってきている。

あ、自己紹介が遅れた。

俺の名前は横谷 よこたに ひとみ 瞳だ。なんか違和感があると思うがそれは後。

俺は朝早く、ベットから這い出る。苦手な人もいるだろうが、慣れればそんな苦ではない。

で、櫛で髪をとかしてご飯を作るときに邪魔にならないようにポニーテールにして冷蔵庫の中身を思い出す。

確か、昨日安売りしていた卵があったな。

俺はたくさんある卵を6個とベーコンを取り出して卵は転がらないように使わない鍋の中に入れておく。

ベーコンエッグでも作ろうとフライパンを温めていると。

「タコ、流石早いね」

と若干眠たそうに起きてきた同年代の女子。

親の仕事のため居候している藤原ふじわら沙織さおりだ。こいつはかなり癖のある奴なのだが、まあ……放っておこう。

こいつは黄色いマツダ RX-7 FD3Sに乗っている走り屋仲間だ。

同じFDでも速く、この前もかなりの腕と言われていたFD乗りを倒した。

「今日はベーコンエッグ？」

「うん、そうだけど」

「：ッ!？」

と藤原は眠たそうにしていた目をカッと開いて。

「いつもよりベーコンが多いっ!」

と朝っぱらから大声で行ってきた。

「それよりも、姉貴を起こしてきてくれ」

「はいはい」

と二回に行った藤原。

姉貴と言うのは俺の姉、横谷よこたに香織かおりだ。

今年から大学生でこちらもかなりの凄腕ドライバー。

マシンはインプレッサに乗っていて今はホンダ インテグラ タイプR DC5型に乗り換えた。

一応、腐女子ではないが、別の意味で腐っている。

気がついた人もいると思うが、俺達——姉貴と俺——には親が居ない。というより、死んだのだ。昔あった電車事故で。

当時、五歳だった俺と一緒に電車で出かけているとき、その電車が脱線横転、俺は助けられたが両親は——

それ以来、叔父叔母の家に居候していたが、叔母も病気で亡くなってしまつて、姉貴が中2の時、俺が小6の時に元々親達と暮らしていた家に戻ってきた。

それ以来姉貴と二人暮らしだった。

それで虐められたりもして、友達幼稚園からの友達の工藤海^{くどうみ}人^{ひと}だけという状態で中学に入って孤立していたときに中学校最速を目指していた藤原にスカウトされ、部活もどきをつくり、親友と言える者も増えて、楽しいなと思っていた時。ある事件が起きた。

俺がある朝起きたら性転換していのだ。

どういうことか、いまだに不明、しかも美少女。これで人気者になつてしまひ。ラノベにできるような人生を送ってきた。

だから名前のわりには男口調なのだ。納得してくれた？

今、俺が頭をかかえる問題は、中学の時は周りの人達は俺の事情を知っていて男口調でも大丈夫だった。だが、高校ではそうはいかない。ということで、高校では基本、女口調をしなければいけないということ。それが俺最大の懸案事項だ。

で、今日入学式なんだよなあ……。

＊

俺は懸案事項を抱えたまま、高校に向かう。

藤原と一緒に行って、途中で親友の工藤海人と合流、さらにまた親友の涼宮^{すずみや}詩織^{しおり}とも合流。

涼宮は白い マツダ RX-7 FC3Sに乗るドライバーで、
こちらもかなりの腕。

その後、一つ先の駅から中学の時の部活もどきのメンバー、斉藤^{さいとう}祐樹^{ゆうき}が合流した。

こいつは スバル インプレッサ WRX STI GDBF型
に乗るドライバー、腕はそこそだが、欠かせない存在だった。

ついでなので斉藤とその周りについても書いてしまおう。

斉藤は『組織』と呼ばれる（正式名称は一応あるらしいが、こっ
ちのほうが通じやすいらしい）組織に所属している。

で、どんなことをやっているかと言うと「藤原沙織の監視」だ。

なんで藤原が監視されるのかと言うと、藤原は「神に選ばれた子」
らしい。

なんでそんなことがわかるのかは斉藤には不明。なのになんで『
組織』に所属しているかと言うと、斉藤は孤児で孤児院にいたらし
く何故か藤原の周りでは不思議な現象が起きたらしい。

さらに、そこに孤児院にある伝説が書かれた俺達には読めないよ
うな書物には噛み砕いて言うところ書いてあったらしい。

『孤児の中に神に選ばれた子が現れる』無茶苦茶にもほどがある。
しかし、孤児院の院長——日本でも指折りの財閥の一つの偉い人だ
が——が信じて藤原の監視を始めた。

確かに、偶然にしては出来すぎなところもあった。

そして、起きては欲しくないことが起きてしまった。

藤原の引き取り手が出てきたのだ。

もちろん孤児院は不本意ながら拒否をしたが、気が付いたときに
はもう引き取り手のところに行っていた。

これはおかしいと上層部は思い、本格的に『組織』が作られ『組
織』を構成するのは孤児院にいる孤児達で、斉藤もその一人だった
で、たまたま藤原と親しくなり『組織』の中でも地位が上がった
そうだ。

と、ここまででは斉藤に聞いた話だ。どこまで本当なのやら……

ちなみに『組織』には横谷家の経済事情を助けてもらっている（
藤原監視任務に必要な家なので）。

本編が始める前に、ドライビングテクニックのうまさの順で並べる。

下り《ダウンヒル》では。

俺＞藤原Ⅱ涼宮Ⅱ工藤＞斉藤

上り《ヒルクライム》では。

藤原Ⅱ工藤＞涼宮＞俺＞斉藤

と言ったところで俺は中学の時はエースとしてよくバトルさせられた。

谷^{たに} 直登^{なおと}は俺よりもドラテクは上かもしれない。
これはあくまで仲間の中で、姉貴やまだ出てきていないが兄の横^{よこ}

以前、兄貴ともバトルしたことはあるが中途半端に終わってしまった。それに俺の中では「上かもしれない」なのだ。

と俺は電車の窓の外にある山を見つめる。

榛名山、俺達のホームコース。俺も姉貴に連れられて小4くらいから行ってたかな。

高校には、どんな人やマシンがいるんだろ。もしかして、兄貴をも超える様な実力者が……。

とか考えていたら電車は高校の最寄り駅に着いた。

ま、どんな奴らが挑んでこようと、俺は全力を尽くすまでだ。

プロローグ（後書き）

まだギャグ成分は薄いですが、次回から入れて行きます。作者自身は車を知らなくても楽しめるような作品を書いていきたいと思ひます。

大元がパクリなので名残がありますがそこはスルーしてください（題名も……）

尚、これより前の主人公達が中学生のころの物語はブログに記載されています。ですが多少こちらと設定に誤差がありますのでそこは承知で読んでください。

ブログURL…<http://orotot.blog47.fc2.com/>

1話「俺の人権を考慮して……」

で、俺達が通う高校、春真高校はごく普通の県立高校なのだが、少しだけ別の高校と違うところがある。

それはというと、開校当時、車、特に「走り《バトル》」が流行っており、それに乗じた高校が大手自動車メーカーへの就職、有名工業系大学への進学を考えている生徒を呼び押せるために敷地の中にコースがあるのだ。

そして、姉貴が卒業する前まで、「自動車研究部」があったらしいが、時代の煽りを受け、廃部。

それを元生徒会書記だった姉貴が「自動車研究部」の部室などを土台にして俺達が走りをするための部活を作れるように計らってくれたのだ（なんで生徒会書記がそこまでできるか不明だが）。

ということで、俺達はちよつと面倒なこともあるが、ここに「新自動車研究部」、藤原は勝手に「メカニカル研究部」通称メカケンと名前を変えている。

まあ、俺はそんなことはどうでもいい。ちよいと面倒なのは部員だ。

春真高校では原則として6人以上で部活なのだ、それ以下は同好会。

で、今のところのメンバーは。俺、藤原、涼宮、工藤、斉藤。計5人。

これでは同好会になってしまう。いうことでもう1人、どっから引っ張ってこなければいけないのだ。

ちなみに、顧問に関しては姉貴が話を付けてくれた。ちよつと変わった技術の先生だそうだ。……大丈夫だろうか。

そんなことはお構いなしに入学式兼始業式。これは割愛。

さて、俺の難関はクラスだ。

斉藤の所属している『組織』の計らいか、いつもの5人は同じクラスだった。

で、それ以外の同じ中学出身はいない。

あんまり同じ中学出身はいないからな。

で、俺は高校では女子らしく振舞わらなければいけないのだ。

何故なら周りのみんな曰く「見た目は清楚な黒長髪の美少女が男口調だったら色々大変。それに、こっちでもフォローできない」とのことだ。

ということで、俺は高校では女口調でなければいけない。

……心の口調も変えたほうがいいかな。

と、自己紹介。元々好きではないのだが、今回は精神的にはつらいものが重なっている。内容は「出身中学校、名前、あと趣味とか」うん、いいんだ、頭の中で考えていることを言えばっ！

と順番が回ってきた。

「上森中学校しゅっひん……あ」

いきなり噛んでしまった。くそっ、目立たないようにしたかったのにつ。

「ええと……上森中学校出身、横谷瞳です。趣味は……なんだっけ？」

やべえ、ついにボケが始まったのかな……。

「趣味は……車です。よろしくお願いしますっ！」

チーンという音が俺の頭の中を駆け巡る。

何故か少しの間間をおいて担任は次の話題に移った。

なんだろう、なんか俺の時だけ皆さんの視線が多かった気がするのだが……

HRも終わり、お手洗いに向かっていると何故かみんなに注目されている気がする……。気のせいかな？ そうだ、単に俺が自意識過剰なだけだっ！

と思いつつ用を足して教室に戻ろうとすると掲示板にこんな文字が――

『注目、あの横谷香織の妹。横谷瞳が入学』

と見出しが書かれた新聞が貼っており、内容は

「前生徒会書記ながら、会長以上の働きをして権限を得て、さらにはその美貌により男女問わず人気を得ていた卒業生、横谷香織氏の妹、横谷瞳氏がめでたく入学する運びになった。

香織氏同様。かなりの美貌と噂されている横谷瞳氏の写真を我々は手に入れることに成功した」

と言った感じの記事に俺の写真がデカデカと掲載されている。そして周りからは。

『ねえ、本物じゃない？』

『やべえ、超可愛い』

『香織さんとは違った魅力っ！』

と先輩同級生関係なく言っている。

これのせいで俺はやけに注目されているのか？

いや、それしかない。

俺は一刻も学校から離れたくて早足で教室に戻った。

と、教室に戻るといつもの4人が雁首をそろえて待っていた。

「タコ、あの新聞を見た？」

と藤原。ちなみに、タコというのは俺のよくわからんあだ名で、確か「最初見たときに見えた瞳のドリフトの残像がタコの足みたいに見えたから」だそうだ。

と、そんな場合ではない。

「ああ、なんであんなもんが……」

どこで撮ったんだ？ という疑問がやっと浮いてきたとき。

「おい、帰るなら早く帰ったほうがいいぞ」

と斉藤。

「どうにも、新聞部に動きがあるらしい。まだ三年生が動けなくて来ていないが、新聞部が取材に来るらしい」

「なにっ!？」

それは一大事、なんにしろ、俺は目立たないように過ごしたいからだ。

「わかった。即時下校だ」

「待って!」

と藤原。なんだ、もたもたしてられんのだが。

「新自動車研究部は？」

「それは後だ」

「なんで!」

「もう少し落ち着いてからだ。それでないと落ち着いてできやしない」

「わかったよ……」

と藤原は落ち込んでいるが、第一始業式は明日だから活動開始は明日以降だろうに。

「じゃあ、行くぞ!」

と斉藤が指示した直後。

「待ってください!」

と言われ、俺達はギョツとしてドアの方に振り返ると。

「新聞部です」

といかにも取材に来ましたよ的な先輩方が数人いた。

「ど……どうする?」

と俺は斉藤に訊く。こういう時に一番役に立つからな。

「横谷瞳さん。貴女に取材を申し込みたいのですが?」

と部長らしき人物。

「む……無理です」

と断る。当然だ。

「私、新聞部部长。」

阪下 さかした

春美 はるみ

取材を——」

「い……嫌です！」

と断るも。

「ここは引けません。なんとしてでも受けてもらいたのですが……嫌とおっしゃるのなら。こちらも少々強引な手を——」

「工藤っ！」

と俺は工藤を呼び出す。俺の護衛では最強。

「わかったぜ」

と意気揚々と前線に飛び出していく。

「やめてあげてください。横谷だって嫌がっています」

とまずは説得から開始。だが。

「取材させていただくのなら、瞳さんの写真をいくらでも差し上げますよ」

と新聞部部长、阪下先輩は言った。

「わかりました」

「「「ちょいまってこら」」」

と4人でツッコむ。

「では、取材を」

という阪下先輩の横で工藤が。

「さあ、横谷、カモン」

と手を動かしている。裏切り者め……！

「新聞部、やめなさい」

と唐突に新聞部の集団の後ろから声がした。現れた人物は。

「姉貴……？」

「香織先輩……？」

何故か卒業したのに先代の春真高校の制服。

今更だが、春真高校の制服は俺達の代から変わったのだ。前まで

はセーラー服に学ラン。今は男女ともブレザー。とはいっても2、3年生は前の制服を着ている。俺達だけが新デザインの制服を着ている。

「あれほど私の妹に手を出すなど言ったのに…… 瞳が迷惑そうな顔をしているわ」

「前の生徒会書記にいわれましてもねえ。大体、妹さんの畳一畳分程度まで引き伸ばしても大丈夫なくらい高画質な写真はいらんのですか？」

「必要ないわ」

とさっぱりと言いきった姉貴、流石俺の姉だ。

「家で寝起きから入浴、寝顔まで撮り放題だからね。ムフフ」

「タコ、攻撃対象を間違えないでね」

危うく、新聞部をスルーして姉貴に突撃するところだった……ちくしょう、まともな人間はいないのかっ!？

「では、その写真をください。そうしたら直接的な取材は保留にします」

と阪下先輩。姉貴、言うことはわかってるよな……?

「わかったわ」

そうそう、その判断を待っ――

「どの写真がいい？」

とデジカメの操作を始める姉貴を見た俺は全力で反対側の窓に向かう。

「逃がすな。捕獲しろ!」

と言っている阪下先輩を無視して窓から外に出る。

そのまま校門へダッシュ! と行きたかったのだが……

「チッ……」

舌打ちをしてしまったのは校門にいる。さっきまで阪下先輩と一緒にいた先輩方が校門にいるからだ。

「あのお」

と後ろから声をかけられ、俺は冷や水を浴びた気分になった。

俺は隠れていた植え込みから飛び跳ねるように逃げながら後ろを見ると若干おとなしそうな少女、――セーラー服だから先輩か――がいた。

「なんですか」

焦っているんですが。

「えっと……」

とっとしてくれないかなあ……

「横谷瞳さんですよね？」

「はい、そうです」

新聞部だったらどうするか、俺の脳内戦術コンピューターがもしもの戦術を練っていく。

「やっぱり、私は生徒会会長の にのみや 二宮 さやか 彩加です」

まさかの生徒会も新聞部に協力しているのか!?

「新聞部から逃げているのでしょ？」

とさっきのおとなしげな雰囲気から変わって、活発そうな感じになった。なんだ、この人？

「横谷先輩にもお世話になったし。助けてあげます」

「本当ですかっ!？」

「こっちに來てください」

と俺は信じてついて行った先には。

「なんですか、これ？」

俺の前には若干サビている門。説明会などに來た時には気づかなかったぞ。

「今はあまり使われていない門です。ここを出てまっすぐ行けば普通に校門を出たとこの国道にでるから。少し獣道っぽいけど、逃げられると思うよ」

「ありがとうございます」

「どういたしまして、新聞部にはきつく言っておくから」

「重ね重ねありがとうございます」

と頭を下げていたら。

「もういいから、早く行つて。新聞部がきちやうよ」
「では」

と俺は不可知の門をくぐった。

まさか、入学式早々にこんなことになるとは……

で、『少し獣道っぽい』と言われたが。

「これが少しだと……？」

道は、草むらにうつすらと人間の歩いた道があるだけだ。

と、脚に違和感が……

「い い い い い い い い い い い い い い い い！」

カマキリかよ！
俺虫苦手なんだから。

「ああ！
こんちくしょう！」

といいながらカマキリを振り払ってさらに進む。

と、虫とくつついてくる草などと格闘しながら歩くこと数分。国道らしい道が見えてきた。

で、出てみえたのは

「駅前かよっ！」

見事に通学に普段利用している駅があった。

俺が出てきた場所は、通学に利用している駅の近くにある森、とか放置されっぱなしの空き地を突っ切ってきたみたいだ。普段は意識していないからよくわかんかった。

*

俺は駅に止まっていた家の最寄り駅方面の電車に乗り込んで読みかけの文庫本を取り出す。

『ただいま特急の通過待ちです。しばらくお待ちください』
というアナウンス。少ししたら。

「あれ、なんでここに？」

と藤原達が来た。

「姉貴は？」

「なんか、新聞部の部長と口喧嘩を始めたから逃げてきた」

と斉藤が呆れ気味に言う。

涼宮が首をかしげないがら。

「でもタコ、どこから出てきたの？ 校門は新聞部がいたでしょ？」

「ちなみに裏門にもいたな」

と工藤。

「なんか、生徒会長に助けられてな。秘密の門から出してもらったんだ」

「そんなバカなことがあるの？」

と藤原。信じてないな。

「あつたもんはあつたもん」

「わかったわわよ……」

と納得された。うー、なんなんだよお……

＊

翌日、俺はやっと平穏な日常に戻れると思っていたのだが……

まだ学校の中の施設などを覚えるなどで、本格的な授業はまだなのだが、俺がふと掲示板を見ると……。

『スクープ写真。横谷瞳の日常スナップを入手』

とでかでかと書かれた新聞。そしてその下には――

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

俺の睡眠中の写真（毛布をギュッと抱きしめている写真とハチロクのぬいぐるみを抱いて寝ている写真）が印刷されていた。

「俺の人権があああああああああああああああああああ！！」

俺の高校生活、
どうなんだろう……？

1話「俺の人権を考慮して……」(後書き)

サブタイトルは適当なのでキャラのセリフ風かと思えばそうでないときもありますのでご了承ください。

さて、今回は少しギャグに振ってみましたかどうでしたか？ まあ弊害は車の話をあまりでないところですが。

これからはギャグや車のマジ話を行ったり来たりするのでご了承ください。では次回。

2話「俺の周りにまともな人は…？」

俺の寝顔の写真が掲載された新聞は教師&生徒会が回収したそう
だ。当たり前な気がするが……

とはいえ、教師からも新聞部に対して忠告をしたそうだ。「次同
じようなことをしたら当面休部」みたいなことらしい。

さて、今俺の横を歩いている女子。藤原沙織は俺を連れてとある
部屋に向かっていた。

「ここが、新自動車研究部の部室予定の部屋よ」

と今いる第二校舎の一角——普段の授業などは第一校舎などで行
われて音楽室などの特別教室や部室は第二校舎にある——の薄暗い
部屋に来ていた。

「なんで俺だけ連れてきたんだ？」

しかも昼休みを使って。

「下見よ。今鍵を開けるから待ってて」

と恐らく借りたのだろう、大きめのプラスチックに「未使用部室」
と書いてあり、鍵が複数ついている。

藤原がある鍵を掴んで鍵穴に挿し込む、回らない。

「あれ？」

「おい……」

間違えたようだった。

「これかな」

と次のは正解だったらしく、ガチャという解錠の音がした。

「ではでは、部室のご拝見」

と部屋に入っても特に目を付けるものはなく。強いて言うならば
自動車関連の工具があることだけだ。

しかも、置いてある机などはホコリにまみれており、何年も掃除

されていないのは明らかだった。
だが。

「スゲー……FDが発売されたころの雑誌があるぞ……」
他にも今なら中古でゴロゴロして俺達のようなマニアが喜ぶような車が新車として扱われていた雑誌があった。

「ここで活動できそう？」

と雑誌を見ていた俺に藤原が問いかけてきた。

「まあ、掃除をすればな」と部屋を見渡す。

「で、顧問はいるのか？」

「香織さんが用意してくれた。なんか技術の先生らしいよ。パソコンとかが基本だけど車の専門技術も豊富で、新型のGT-Rに乗っているって」

新型ってことは、R35GT-Rか。

ま、顧問がいれば人数も揃っているし、正式に自動車研究部は復活か。

帰りに藤原が。

「明日は好きなだけ寝ていいよ」

と言ってきた、いつもは俺が早く起きて朝ごはんなどを作っているが……？

「なんにも考えてないよ。たまにはゆっくりしてほしいなって」

「ならいいけど」

＊

どうも、新自動車研究部部長（予定）の藤原沙織です。

で、一旦話はそれで、進学した高校も休みの日、あたしはタコこ
と瞳ちゃんに「今日は遅くまで寝ていいよ」と言って休ませてあげました。

！　そういうセリフ。しかもそこで泣くの！？

そろそろ起こさないとまずいかなと思っていたら。

「もう……だめ、入らないよ……うう」

なんか本当にエロそうな夢を見てそうなんですけど！

「俺…男なのに……」

なんか可哀そう…そろそろ起こそ——

「なんで俺が『女性限定、スイーツ食べ放題』に来ちゃったの！？」
知るかあああああああああああああああああああああ
あ！

とついつい心でツツコムあたし。そもそも童貞を捨てられなかったってところはどうやってつながっているの。そこを知りたい。

と思いつつ起こす。なんか精神上悪そうだったので。

＊

俺は若干ご機嫌斜めな藤原に起こされて言われた番組を観ようとしたら。

終わっていた。

まあ仕方ないと録画されたのを観る。

なんであんなにムスツとしてたんだろ？

＊

翌週の月曜日。

遂に。

「新自動車研究部発足よっ！」

と言った藤原だったが。

「で、顧問は？」

と斉藤。

「それ呼びに行ってるのよっ！」

と今にも大気圏外に飛び出しそうな勢いで歩いて行く藤原。いや、競歩か。

「失礼しまーす！」

と職員室に入って行った藤原。

俺達が外で待つこと数分。

「先に部室に行っててだって」

と鍵を持って出てきた藤原。

「どんな先生だった？」

と涼宮。やっぱり女子、気になるのだろう。あ、俺も女子か。

「若い感じの先生だったよ」

いや、若い先生はたくさんいるが……

「好青年、って年代じゃないけど。とにかく若すぎず、年取りすぎずってかんじかな。なんか刑事ドラマのそこそこ出番のある30代くらいの人って感じ？」

わかるようなわからないような説明を受けながら、俺達は部室に向かった。

部室って……まさか！？

と思った時には、涼宮が藤原から鍵をもらって開けていた。

「シオたんまあ————！！！」

という藤原の制止の声も間に合わず、ホコリだらけの部室が開いた。

ちなみに「シオ」というのは涼宮の下の名前「詩織」から来ているらしい、女はミステリー。お前も女だろうというツツコミは無しで。

部室は未だにホコリ臭く、いや、カビ臭いと言った方がいいのかな。そんな匂いの中に入っていく俺達。

「これは…放置されて何年なんだ？」

と斉藤。

「さあな。多分、2年程度じゃないか。香織さんが在校してたとき

にはあつたらしいから」

と工藤。もっともな意見だ。

「2年でこんなに……？」

と驚く涼宮。

「まあ、とりあえず窓とか開けて換気しよう。じゃないとヤバそう
だ」

と俺はいいながら窓の鍵に手をかける。

流石に何年も放置されていたこともあってかなり硬かった。

で、硬いドアに苦戦しながら開け放つ。

「あー、新鮮な空気がうまい」

と藤原。

俺達も外の空気を味わっていたら。

「どうも、遅くなってしまったね」

と後ろから大人の声。ということは――

「顧問の先生ですか？」

と俺が訊くと。

「ああ、そうだよ」

と笑いながら答えた。

顧問の先生の名前は奥川祐治おくかわ ゆうじというらしく。藤原の表現もわかる

ような気がした。なんだか刑事ドラマのモブで出てきそうな感じだ。

「じゃあ、今日は部室の掃除で終わらそう。明日から部長とかを決
めて行くから。考えておいて」

「「「「わかりました」」」」」

と見事にハモる。

で、十数分後。

「終わりました……た？」

と藤原が疑問符になったのも無理はない。

「先生は？」

と工藤がなにかを拾ってきた。紙きれのようだった。
そこには。

『掃除お疲れさまでした。特にやることもないので掃除が終わったら帰ってください。奥川』

「「「「アバウトだなおい！」「」「」」

総ツツコミなのもわかるだろう。普通はなにか言って（どこかわからないが）戻らと思うのだが……。しかも、「掃除お疲れさまでした」って書いておいて「掃除が終わったら帰ってください」は日本語としておかしいと思うのだが。

という、とんでもない新自動車研究部のスタートだった。

＊

そんな新自動車研究部を影から半ば睨むような目で見る人物がいた。

「また……チャンスを逃してしまった……」

と言って、ガックリとうな垂れる少女。

「なんて報告すればいいのやら……」

と言いながら学校を後にする少女の名前は横川^{よこかわ}春奈^{はるな}だ。

一応、斉藤が所属している『組織』の新人で、斉藤と同じ部署で藤原の監視のはずなのだが……

「なんで乱暴そうな女子の監視なんて……藤原沙織の血縁者でもないし」

斉藤の計らいで横谷瞳の監視をしているのだが、コソコソ見ていることに飽きてしまった独断で横川は横谷とバトルをする気でいた。

横川春奈は『組織』の施設——斉藤もだが、横川も孤児——に戻る前に寄り道をしていた。

とあるアパートの部屋のインターフォンを押す。

『はい、どちら様ですか？』

と当然の答えが返ってくる。

「横川です」

『ああ、今開けるから』

と少ししたら玄関の鍵が開けられた。

「久しぶりです。直登さん」

と横川が出てきた人物に挨拶をする。

「確かに久しぶりだな。今日はなんの用？」

と答えたのは横谷瞳と香織の実の兄、横谷直登だ。よこたに なおと

「車の調子を見せに来ました。入学式とかで忙しくて見てもらってませんでしたから」

車の調子とは、別に壊れたから云々とかではなく、走りの調子を運転も含めて見てもらおうということだ。

「わかった。夜の10時に赤城に」

「わかりました」

とペコリと頭を下げた横川。

その後について直登が出てきた。

アパート前にあるパツと見、くたびれた小さな工場に見えるガレージに入って行った。

それを見ていた横川。別に見たってなにがあるということでないのだが、あるものを見ておきたいのだ。

ガレージから出てきたのはスカイライン GT-RのR32型だ。見た目はニスモのバンパーダクト付きのフロントバンパーとカーボンネット、最近換えたボディと同色のカーボン製のトランク。そして小型のGTウイング。さらには大口径マフラーと車好きが見れば一瞬立ち止まって見てしまうような車。

一回は横谷瞳を倒しかけたが、ギリギリで敗退。

「じゃあな。10時に赤城な」

と自分のマシンの排気音に負けないように声を張り上げて言って、出て行った。

「さてと」

と横川春奈は『組織』の施設に戻る。

＊

そんなことが行われているとはいざ知らず、俺、横谷瞳は家にて。
「わーい！ 大容量HDDハードディスク&ブルーレイも付いてるDVDデッキだ
」

と姉貴が飛び跳ねている。なんとか浮かせた生活費で買ったのだ。せめていい画質でアニメを保存できるように。

で、問題は――

「さて、元のDVDレコーダーのHDDに入っているアニメを誰がDVDにコピーするか。しかもCMカット付き。

「俺は晩御飯作らないと」

「タコ！ 逃げるのっ！」

と藤原。

「居候か姉がやってください」

「卑怯者！」

と姉貴。

「じゃあ、今日の煮込みハンバーグは姉貴がやってくれるのか？」

「そのくら――」

と言いかけた姉貴を遮るように藤原が。

「あああ、あたし達がやっておくから、タコは晩御飯よろしく」
と変な汗をかきながら言った。

姉貴って、ハンバーグを炭化させるスキルを持ってるからな……

2話「俺の周りにまともな人は…？」（後書き）

とりあえず、管理人的に気に入っているキャラかつ裏主人公的な横谷直登（作者的に）を出しました。まあ、強いて裏ヒロインは横川春奈でしょうかねえ。

本編は主人公とヒロインが同じという状態ですからね。一応、どのようなライバルを出すかは決まっていますが、名前などがまだ未定という状態。

では、次回は直登達のターンから。では

3話「前哨戦」

3話

赤城山の頂上に二台のマシンが置いてある。

一台はR32型GT-R もうひとつはホンダ シビック タイプRのFD2型。

R32のドライバーはもちろん横谷直登。

そして、シビックのドライバーは――

「どうでしたか？」

と直登に訊いている少女、横川春奈の愛車だ。

チューンは軽量化など、基本的には直登がやっている。

「いい感じだ。走りのリズムも乱れていない」

「これなら……」

「瞳も超えられる。高性能車殺しと呼ばれたハチロクをな」
ハイスベックキラ

「必ず――」

勝って見せます。という前に直登が。

「腕があればな。正直、お前は並みの走り屋よりはセンスもテクもある。だが、瞳ハイスベックキラハチロクハイスベックキラ高性能車殺しとなる。言うだけなら簡

単だが、あのコンビが出来た時、やはりなにかが違う。理論や数値を超えたスペックが出てくる」

「だから、高性能車殺しと呼ばれる。ですが、そのために走りこんでマシンも仕上げじゃないですか」
ハイスベックキラ

「そうだ。だが、その『理論や数値を超えたスペック』が底知れないんだ。そこが恐ろしい」

「わかりました。明日、宣戦布告してきます」

「わかった。頑張れよ」

と言って帰って行った直登。

「ああ、どうしよう……」

と文字通り目にも止まらぬスピードで追いかけて行った工藤。

「タコ……まさか、可愛いから……？」

と若干見当違いなことを言う涼宮。

そんな風にみんなが慌てている中、斉藤は別の意味で慌てている。
またはイラついていた。

（横川、やりすぎだ……というか、監視ってレベルじゃねえぞ……）
と思っていた。

『組織』の中では活動歴と功績が多い斉藤が横川に『横谷を平穏に監視をしている』と指示をしたのだが、横川なら少しは行動を起こすと思っていたら、ここまで派手にやるとは考えもしていなかったのだ。

＊

俺はただいま屋上手前の踊り場に連れてこられていた。

相手は確か前の席に座っている横川春奈って女子だ。短髪でざっくり言うならどこかの超電磁砲レールガンを撃つ人みたいな感じだ。適当ですまないが。

前の席に座ってても藤原達と話していたし、あちらからも話しかけてこなかったので会話はゼロだ。というか、シャイなのか、自己紹介の時はボソボソ言っていてあまり聞こえなかった。

で、今顔を真っ赤にしながら、しかも時々噛みそうになりながら言ってきた。

ハイスベックキラ

「あ、貴女が高性能車殺しの横谷瞳？」

もし違ったらどうする気だったんだ？

「ああ、そうだけど」

こちらも男子っぽくならないように口調を気を付ける。

「では、話は簡単」

「話？」

大体想像できるが。

「ええと……やっぱこれを見てくださいっ！」

と鼻息荒く、手紙、ピンク色の封筒に可愛いシールで封を閉じたのだった。

まさか、バトルではなく……告白か！？

「うううううううう……ひゃあ ああああああああああ
あああああああ！」

と叫んでどこかに行ってしまった。

この封筒、まさかの告白、同性愛、百合か!?

*

横川は走りながら先程、横谷瞳にしたことを回想して顔を真っ赤にしていた。

初対面の相手にはなかなか言葉を交わせないので手紙で行こうと思つた横川は、手紙とそれを入れる封筒を探した。だが、以前に使つていた可愛らしい便箋一式しかなかった。なのであなつた。

普通に渡せば問題なかっただろうがあのよう**に強引かつ誤解を誘**
いそんな渡し方をしてしまった自分を恥じる。

(明日から……どどどどどどどうしよう……ッ!?)

もはや脳内口調も狂っていた。もし明日から「横川春奈は美少女が好き」という情報が流れると思うと。

「なんであんなことしたの——」

自業自得であつた。

*

俺は手紙を確認する度胸がなかった、もし中身が本当に告白だったと思うとゾツとする。やはり創作上の話だからいいんだな。

と思っっていたら人の気配が。

「くんくん。横谷の匂いが近い。もうすぐだ」

と踊り場の床の匂いを嗅ぎながら上がってきた工藤。おい、どこからやっていたんだ、それ。

と俺の足元まで近づいてきて。

「横谷のオーラ、顔を上げれば天国が――」

その前に生き地獄を味あわせてやろう。

俺は工藤の頭をふんづける。そして

「さあ、顔を上げたら芳○文乃の『二回死ね!』を実際に体験できるけど。どうかなあ?」

「わかりました。レッドゾーンから退避して顔を上げます」

よかった、工藤がドMじゃなくて。

と、レッドゾーン（俺のスカートの中身が見えない距離）まで下がっている工藤がぼそっと。

「でも、横谷のならいいかもな……惜しいことをした」と呟いていた。やはり殺すべきだったか?

「あ、タコだ!」

と藤原、その後に続いて涼宮、斉藤も姿を現した。

「たまには変態も役に立つことはあるのね」

と藤原がホコリを落としている工藤を見ながら言った。

「で、なんかされたの?」

と涼宮。今はされてないが……。

俺は、手に持っている手紙を見る。なにが書いてあるんだ……?

「そ……それは?」

「なんか、鼻息を荒くして、顔を真っ赤にしながら……」
今想像すると恐ろしい。

「これを渡してきた」

と手が震えるのを感じながら手紙をみんなに見せる。

「「「!?!?」」」」

と、俺以外の全員も凍りつく。

「た、タコ、それって……?」

「ま、まだ開けてないから知らん」

「あ……開けないとわからないよ……」

と涼宮の声を受けて、意を決して開けた。

「よ……読むぞっ!」

「こ、こい!」

と工藤が身構える。

「『背景……』って、背景じゃなくて拝啓だろ……。えと、『拝啓、横谷瞳。貴様と榛名山でバトルをしたい。二週間後の夜11時。榛名山頂上で待つ。尚、それまでの期間こちらでも走りこませていただく』だと」

と、読み終えたら全員で。

「「「……告白じゃないのかよっ!」」」」

って、全員じゃない。斉藤は溜息をついている。まさか、知っているのか?

「って、バトルよっ!」

と言われてもなあ……、どんだけ速いかもわからないし……

「最近、首都高速環状線、妙義山、赤城山で速いと言われているシビックタイプRを知っているか?」

と斉藤。

「ああ、確か環状線^{C1}でGT-Rに勝って、峠でも俺や兄貴とタメを張れるんじゃないかって噂のシビックだろ?」

「そうだ。俺の情報によると、あいつがそうらしい」

「なんですと!?!?」

と藤原。

「タコ、これは新自動車研究部の最初の表立った活動よ! そのバトル、受けるわよね?」

YES以外は受け付けそうになかったし、俺のその気だったので。
「受けるよ」
と言った。

＊

横川春奈は直登に。

「直登さん。とりあえず宣戦布告をしてきましたっ！」
と敬礼をしながら言う横川を見た直登は。

「よく出来たなあ。ま、それはさておき、もう戻れないぞ。いいのか？」

「いいの。絶対に勝って見せますから！」

「わかった。あっちから連絡が来るのを待とう」

「あ」

「どうした？」

「連絡先書くの忘れた」

「おいおい……」

とため息をつく直登だった。

でも、横川の後ろに相手の瞳はいるのだが……そこまで頭が回っていなかった横川だった。

＊

家に帰って本格的な走りこみを始めた俺達。

とは言っても俺が走って他のみんなはサポートだが。

「いい感じだ」

と、今までの甘めセッティングから詰めたセッティングに変えていく。

今回の相手、シビックタイプRは厄介な相手だと思っている。

正直言って、どこをとっても俺のハチロクは相手のシビックよりいいところはほとんどない。

唯一あるとすればスタート時の0km/hからの加速だけだ。

俺のハチロクは後輪駆動のため、スタートダッシュの時に慣性の法則で後輪に車体の重量がかかってロスが少ないのだ。

逆に相手のシビックは前輪駆動。そのため駆動する前輪が浮いてしまうのだ。

それ以外は、ホンダが本気で作った『メーカー純正のチューニングカー』をさらにチューンしたようなものだ。それはかなり恐ろしい。

俺の記憶が正しければ某有名ホンダ系チューニングショップのデモカーのシビックが筑波サーキットで1分フラットで走ったと聞いた。しかもノンターボ。

つまり、そのくらいシビックタイプR FD2型はポテンシャルがあるということだ。

でも、バトルするのは榛名山。俺の地元だ。負けるわけにはいかない。

というわけで走りこみで榛名山。

だったのだが……

「なんで兄貴がいんだよ――――――！」

それが俺の榛名山頂上で走りこむ前の第一声だった。

「なんでって、横川の面倒を見ているのは俺だからな。いるのは当然だろう」

とあっけらかんという兄貴。

「直登さん。走ってきます」

「わかった。5本ほど走ってこい！」

「わかりましたっ！」

と排気音で声をかき消されないように大きな声で会話する兄貴と横川。

「俺もいく。準備をしていてくれ」

「わかった」

と工藤が頷いて指示を出し始めた。

走りこめばわかるが、こちらはコースを知っている分コーナーに深く突っ込めるがあちらが慣れてしまえばこちらのアドバンテージは無くなる。でも――――

＊

最近建てられた鉄塔では榛名山が一望できた。

そこにいるのは横谷直登。

「遂に……始めるのか……」

とヘッドライトを見る直登。

ハイスベックキラ

「瞳の高性能車殺しは、榛名山で走ればさらに強化される。『道の形を覚えている』その先にある『こういうときはどのくらい滑る』や『どこどこが荒れている』とかは走りこんだ瞳が有利だ。それを覚悟で走るのは、俺でもkを愛」

と一人で言う直登。

「横川、お前では無理だろうな。今の瞳なら、レーサーにも勝てる……そんな怪物を相手に戦ったと思うと、俺は恐ろしいよ」

と振り返る直登。

――二台はまるでバトルのように榛名山を走りこんでいく。

3話「前哨戦」(後書き)

瞳の高性能車殺し(ハイスペックキラー)の大元はどこかの幻想殺しです。あまり気にしないように。どのようなことかと言うと。「自分より格上の相手にも勝てる」という当たり前な感じですが、ハチロクでGTRに勝ったりすると考えると、まあ、こんなものいいかなと思いました。

次回からVS横川です。

4話「日常&バトル」(前書き)

今回から真面目なバトルシーンが入ってきます。
基本的に作者はバトルシーンを三人称で書くのでご了承ください。

4話「日常&バトル」

4話

で、俺は走りこみの後、バトル前に微妙にセッティングを変えた。細かくいうと一発のキレた走りのためのタイムアタック用と長時間のバトル用の真ん中くらいに変更。

まあ、これで勝てるかどうか……

＊

一方、横川達も榛名山用にセッティングを変えていく。

「OK、これでヘアピンでも踏めるはずだ。逆に高速域でヘタにアクセルを踏むと姿勢が崩れるかもしれん、そこは注意してくれ」

「わかりました」

と出て行く横川のシビック。

それを見送った直登に。

「結構兄貴は面倒を見ているんだな」

と妹の瞳に声をかけられる。

「まあ、磨いたら光りそうな感じだからな。でも、瞳とのバトルでそっちのグループに入るのかな」

「わかんねえ、あいつも破天荒だからな。自己中というか――」

「昔のお前もクールすぎたよ。もっとも、本当にガキの頃かしらないけど」

「そうどうか。――それはさておき、なんで自分で再挑戦してこない？」

「いいや、まずは横川からかなと思って」

「ふん、俺はどんな相手でも勝つき。シビックだろうと」

「昔は1・6？クラスのマシン同士でライバル車だったんだけどな。」

そう思えば因縁のマシン対決か……」

「さて、こちらがレース用エンジンたつてあつちは2?のエンジン。あつちのエンジンや足回りが何段も上なはず」

基本的にエンジンは馬力パワーはエンジンを回せば出るが、強さトルクは排気量で決まる。もちろん多いほうがいい。

それに横川のシビックは最新鋭車。サスペンションの基本性能の差もある。

つまり、ベースノーマル車の違いが大きいのだ。

もちろん、発売された年代が違うからだ。

瞳のハチロクは83年から発売。横川のシビックは2007年発売。その差でも十分わかるだろう。

「それを打ち破るのが高性能車殺しだろ」
ハイスベックキラー

「そうだよ。俺が勝つ」

と言って走りに行った瞳。それを見た直登は。

「それは、わかりきってるんだよ。瞳」

と二台が走り去った道を見る直登。

＊

で、連日の走りこみによってようやく足回りが仕上がってきた。

「これで、バトルの準備は完璧だね」
と藤原。

「まあ、後は俺がどこまでハチロクコイツの性能を発揮できるかだ」

「そこはほら、高性能車殺しハイスベックキラーの本領発揮で」
簡単に言ってくれるよ……

「それに、明日の夜だよ。バトル」

「わかってるよ」

と言って俺は学校に行くため、最寄駅まで歩き始めた。

いくら夜中に走っていても俺達は普通(?)の高校生。普通に授

業を受けたりするのだが――

「横谷さん、髪きれーい♪」

「脚も綺麗〜」

などなど、友好的な別の中学から来た女子達、もちろん俺が元男とは知らない。

なので間違えても家とかでの口調はできない。
したがって。

「そ……そう？」

などでごまかす。それしかない。
前では。

「ねえ、この前横谷さんとなにがあったの？」

と横川がこの前俺を拉致したことについて追及されていた。
それに対して横川は。

「特になにも」

と答えている。そっけないなあ……

「えー、でも顔を真っ赤にして帰ってたらしいじゃん」

「そ……それは？」

「それは？」

「貴女達には関係ないでしょ」

やっぱ素っ気ねえ…… キャラ的に某ハ○ヒ（初期）かどっかの
深○零だな。

で、そのように素っ気なく返事をする――

「ねえ、横川さんとなにがあったの？」

俺にお鉢が回ってくる。

「い……いや、趣味が似た感じだったから……」

「趣味って？」

こういうのもなんだが、いい加減、ウザいです。

「ああ、BL？」

と言われて俺と横川で「ぶっ！」と吹き出した。

なんでそうなるんだ？ 俺はどちらかというと百合……じゃなく

て!

「「なんでそうなるの!?!」」

同時に訊いていた。

「まさかの……?」

おい、訊いてきたまだ名前を覚えていない女子よ。自分で訊いてきてなんで引くんだ!?!?

「「いやいやいや、あたしはノーマルだから!」」

とまともや2人で否定。

「だよね」

と言って笑う女子。つ、疲れる……

と、俺は先程は大丈夫だったがたまに「俺」と言ってしまうことがあるので注意している。特にツツコミ。

帰りの電車の中で。

「横谷。そういえば本番バトルで使うハイグリップのタイヤはあるのか?」

と工藤。そういえばここ2日3日の走りこみで減ってた気がするな……

「今日でも買いに行くか……」

「手伝ってやろうか。重いだろ?」

「ありがとう」

俺が女子になってからはこのようなことに気を使ってくれる工藤。まあ、女子になって最初の時に1人で買いに行つて次の日腕が筋肉中になって大変だったからな。

「じゃあ、今日の夜にいつものとこに」

いつものことはいつも俺と工藤や新自動車研究部のメンバーが集合している場所のことだ。

「で、タイヤ屋に行つて、ホテル行つ——ぐふっ!」

危険な芽は摘んでおこう。

「うう……横谷の肘打ち、相変わらず強いな……」

とうずくまって言う工藤。だがすぐに復活した。

「じゃあ、俺のランエボででいくか」
と言ってきた。

工藤の愛車のランサーエボリューション？は2？でもターボが付いててパワーとトルクがあるからな。重い荷物を積んでの時にはいい。

「わかった。でも入るかなあ……？」

「いざとなったら後部座席にでも積みばいい」

「そうだね」

で、タイヤの買いに出かけた俺達。

特になんにも起きず、ただたわいのない会話をしていただけだ。

で、タイヤはメーカーや銘柄、サイズは覚えているので簡単に買える。

2人で分担して2本ずつ持って工藤のランサーエボリューション、通称ランエボの元に向かう。

やはりトランクでは中途半端だったので後部座席に入れる。

「さて、帰るか」

と工藤が言って運転席に座る。

俺も助手席に乗って出発するのを待つ。

と、突然。

「横谷」

と言われて工藤のほうを見ようとすると。

「いいか？」

と言われて顔を両手で掴まれた。

こ、これは！？

俺が混乱中にも工藤はキスの体勢を作って顔を近づけてくる。

「いくぞ」

と言って、顔が急速接近。そして――――
ボコッ。

工藤の顔にパンチをお見舞いする。

「調子に乗りすぎました。申し訳ありません」
と謝罪する工藤。ならすんな。

俺の家に帰ってきてきてタイヤをガレージに入れて工藤を別れる。

「さて、明日の夜か……」

明日はちょうど祝日で休みだ。

ゆっくり寝ることにしよう。

＊

バトル当日、朝はいつもより遅めの9時まで寝て体力を補っておく。

「瞳、今日はバトルに勝つことを願ってカツ丼をつくってみたの」

「おお、縁起担ぎか、いただきまー……」
って。

「朝から食えるかあ――――――！！」

朝からカツ丼を食うとかどこの運動系の男子だよ。というか重すぎる。

「せっかくの縁起担ぎが……沙織ちゃんも食べてくれないし……」

「昼にしてくれっ！」

「ガーン」

口で言う姉貴。アホだ。

その日、前日に買ってきたタイヤで少し走って適度に減らしておいた。

一番グリップする域のちょっと前くらい。これがバトルでいいんだ。

「タコ。怪我はしないようにね」と涼宮。

「わかってるよ」

＊

その後、昼ごはんの冷めたカツ丼を食べた俺達が頂上に戻ってきたとき、横川と兄貴もいた。

「じゃあ、練習走行をするから、よろしくね」

と言って走り去っていく横川。少しは愛想を良くしろ。

「瞳」

と兄貴は声をかけてきた。

「今夜のバトル、楽しみにしてるよ」

と言われた。なんなんだ……？

とりあえず、またタイヤを古いのに換えて最終チェック。

そして、バトル本番。

＊

2台のマシンがスタートラインに並ぶ。

片方はレース用エンジンを積むハチロクに乗る横谷瞳。

そして、もう片方は天才調律師チューナーとも呼ばれる走り屋、横谷直登が

チューンしたFD2型 シビックタイプR。

ともに、NAノンターボの軽量、コンパクトなマシン。どちらが勝つかは、

誰にもわからない—————

「じゃあ、始めるぞ！」

とスターターの斉藤が手を上げる。

2台のマシンが空ぶかし^{レーシング}を開始する。

「5、4、3、2、1、GO!」

2台のマシンが榛名山の峠に飛び出していく。

「……2人とも、無事に帰ってこい」

直登が呟く。

＊

横谷瞳の姉、横谷香織はとある場所にいた。

序盤にある2連続ヘアピンを抜けた先のストレート、通称スケートリンク前ストレート。

そこからは高速セクションがあり、そこを抜けるとヘアピンがある。

横川のシビックは駆動方式上、低速からの立ち上がりが苦手だ。

さらに、あのコーナーの出口は広がっている。

瞳が仕掛けるならあそこしかない。

そう、確信していた、香織だった。

＊

いくら駆動方式がFFとはいえ、何世代も離れている上にエンジン自体のパワーや車体構造の違いで前に出た横川春奈。

一方、スタートで後ろになってしまった横谷瞳。

（後ろとはいえ、こちらは道を知り尽くしている。——負けるわけにはいかない）

後ろにピッタリ付いてくる瞳をみて横川は。

（さすが高性能車殺し、まだあたしのシビックに付いてくる。今まで首都高環状線^{C1}で何台もGTRをちぎってきたあたしに——）

と感嘆と相手への称賛を頭の中で考えながらも。

（抑えているだけで、勝てるわけではない。直登さんに教えてもらったポイントをしつかりクリアしていく、それだけ、あとはこのシマッピンを信じていくだけ）

横谷は前の横川の動きに驚いていた。

（すげえな……あの短期間でここまで走れるとは……）

正直、横谷は一瞬勝てない気がした。だが――

（だが、まだ中速セクション。この後の2連続ヘアピンでガッチリ食いついて『あそこ』で仕掛けるんだ）

ステアリングをしつかりと握る。

（ここからは、高性能車殺しのターンだ。高性能車は後ろを走っていればいいんだ。――――なあ、ハチロク？）

――――その通り、だから、俺は走るんだ。

そう、ハチロクが言った気がした。

＊

横谷直登は妹の横谷香織――横谷瞳の姉でもある――に電話をした。

「香織……こんな時に訊くのもなんだが、瞳のハチロクのことを知りたい」

『兄さん、それはバトル相手への助言じゃなくて――』

「個人的な興味だ」

「わかったわ」

と瞳のハチロクの詳細を話し始めた香織。

4話「日常&バトル」(後書き)

今回はVS横川の前編です。ブログで出してほしい車のアンケートをしているので、よかったらご参加してください。

5話「声」

5話

香織は瞳のハチロクのことを一つ一つ思い出しながら言っていく。
『エンジンは知っての通り、レース用エンジン。でも、1・6?を11000回転まで回している高回転エンジンだから低回転がトルクを感じるね。ボディはかなり凝っててスポット増しにエンジンルームやトランクルームとかの四隅につける三角形のやつ……なんでっけ?』

「ガゼットか?」

『そう、それ。だけどまだロールゲージは巻いてないみたい。足回りは瞳オリジナルで私にもどうなってるかわからない』

「それだけで十分だ。ありがとな」

『兄さん……』

「なんだ?」

『もし、ロリコンだったら私と瞳は泣くわよ……』

「ロリコンじゃねえよ!!」

やっぱり、どこかネジが抜けた奴だ……と溜息をつきながら思う直登だった。

と、唐突に香織が。

『で、瞳とハチロクが相手より勝っているのは、やっぱり「あれ」?』

「だろうな……」

*

2台のマシンは2連続ヘアピンに突入。

瞳は前を走る横川の走りを見て感嘆する。

（流石兄貴が認めただけはある。FFでもヘアピンをいとも簡単に抜けていく）

基本的にFFは走りには必要不可欠な路面にタイヤの駆動力を伝えるトラクションが不足しがちでコーナーの立ち上がりで必要なトラクションが不足するのだ。

だが、横川のシビックからはそんなものを感じさせない。

（まあ、付いていけているだけマシだろう……でも、いけるのかなあ……？）

と不安に駆られる瞳。

一方前を走る横川春奈もヘアピンで仕掛けてくるのではないかと不安になっていた。

（ここで仕掛けてこない。ということは次のとこか）

と冷静に判断しながらも、先程の自分の走りはよくできたと思う。

普段、姉の香織のインテグラにちよつと乗せてもらえる程度なのでFFの特性は体ではよく理解できていなかった。

FFという車体構造は前部にエンジン^{フロント}を積んで前輪が駆動する構造だ。

ただでさえフロントにエンジンがあって重いというのと、ブレーキングでフロントに車体の重心——すなわち荷重——がかかってしまうのにプラスして加速時に負荷がかかるタイヤはフロントタイヤだ。

つまり、FF車はフロントタイヤを傷めやすい。

これは、FF車の不治の病と言っても過言ではない。

もちろん、横川はそれを承知している。

2台は2連続ヘアピンを抜けてスケートリンク前ストレートを突っ切っていく。

＊

直登と香織が電話で話をしているのを見たのか、頂上で待っていた藤原達が近づいてきた。

「直登さん。誰と話しているんですか？」

「ん、あ、ちょっと待て」

と直登が少し待つように香織に伝えた後。

「香織とちよつとな」

「なにをですか？」

「今回のバトルを……な」

『兄さん。やっぱ瞳が仕掛けるのは』

「香織、お前の推測は当たっている。少なくとも俺ならそこでいく。

一応、横川にも教えたんだが——」

「なんで教えたんですか——————ッ！」

とキレる藤原を手で制して。

「——いくつかの候補のうちの一つがそこなんだ」

「「へ？」」

と藤原と涼宮。

『つまり、「自分でどこで仕掛けてくるか考えろ」って？』

「そうだ。瞳が普通の問題を答えているとしたら、横川は選択問題を解いている感じた。俺は『最初のコーナー』か『2連続ヘアピン』

、『5連続ヘアピン』と教えた。特にヘアピンは注意しろ、と言ったからおそらくあいつは、2連続ヘアピンでマシンの容量キャパを使い切って曲がっただろう……」

とそこで一旦話を切る。

香織が引き継ぐ。

『……ということはタイヤ、特にフロントが摩耗してるの？』

「そうかもしれん————」

その場の全員——新自動車研究部——が息を呑んだ。

「——だが、今回はあんまり関係ない」

「「へ？」」

その場にいた直登以外、香織も間抜けな声を出した。

「瞳が勝っているのはそういう戦術面じゃない。一体感だよ」と言いきった。

「直登さん、一体感って……？」

と涼宮。

直登は香織にも言い聞かせるように。

「瞳とハチロクは、まるで相棒のように息が合ってるんだ。これが、横川に勝てる要素だ」

「ちよっと待ってください。一体感って、誰でもうまく乗れば感じるではないですか！」

と藤原。

「その一体感ではない、瞳が信頼できるのは当たり前だが、さらにはあのハチロクも瞳を信頼している。つまり、両方ともが信頼しているんだ」

『……まさか、そんなどこかの戦術戦闘偵察機の中核コンピュータやE○Aじゃないんだから……』

と香織。

「気持ちわかる。だが、俺はそうのように感じる。ただの妄想かもな……あと、EV○は人造人間もどきじゃなかったか？」

『でも、誰だって自分の愛車を信じて、愛車も自分を——』

「確かに、そう思っているやつはいるだろう。まあ悪くはないが、それは単なる妄想だろ」

『そんなことを言ったら兄さんの考えだって！』

「妄想かもな。けど、機械、俺はあくまで物言わぬすぐれた道具として信頼している。まあたまには洗車とかで機嫌を取ったり、みたいなこともあるが、バトル中は単なる道具にすぎない』

『それは……』

「横川は違う、意思疎通ができない道具と話そうとしているだけだ。やるんなら、ステアリングやシートなどから伝わる振動や反応から推測するだけだろう。けど、瞳はそんなのも越してしまったから車という道具から『声』というような感じのものの感じ取っているように感じているのだろう」

とそこまで言われて全員黙りこむ。

『まさか、瞳はステア、シート、その他もろもろから伝わる振動とかから車の「意思」を感じとれるというの?』

「そんな感じだ。ざっくりいえば、『車から伝わる振動などを「声」に変換できる』と言った感じか、もちろんあいつがずっとハチロクに乗ってるからできるのだろう」

「タコがたまに言う……ハチロクの声ってこのことなの……」

と涼宮がポツリと言う。

「これが高性能車殺しの正体とも言える。まあ、車からたくさんの情報を手に入れられるといった感じかな」

「相手はどうなんですか……?」

と斉藤。

「横川は、その辺は素人レベルだ。そこが大きな違いだろう」

と直登が言いきって、シーンと静まりかっってから少しして香織が。

『……ッ! 今、スケートリンク前ストレートの後のヘアピンにいるんだけど、近づいてきたみたい。音が大きくなってきた』

「わかった、じゃあな」

と電話を切る。

＊

スケートリンク前のストレート、やはり、瞳のハチロクは離される。

だが、それも予想の範囲。

横谷瞳は、全身の感覚を限界まで研ぎ澄ます。
最小限のステアリングで曲がる。

それを見ていたギャラリーは。

「おい、見たかよっ!」

「ああ、あのハチロク、ほとんどステアを切ってなかったぞ……!」
「とんでもねえ……80km/h以上は出てるはずだぜ」

ステアはほとんど切っていないでアクセルワークに集中する瞳。
ハンドルは、あくまできつかけ、後はアクセルでコントロールしていく。

一方、横川は少し舌打ちをしていた。

(しまった、2連続ヘアピンで頑張りすぎた……! フロントタイヤが怪しい――――!)

前の車の動きがほんのわずかに変わる。
ステアで強引に曲げようとしているのだ。

(きた!)

と瞳は待望のヘアピンに差し掛かる。

横川はこの先の5連続ヘアピンのことも頭に入れて90%程度の力でヘアピンに突っ込む。

だが、タイヤが摩耗しているため、本人は90%でも、実際は――

「突っ込みが甘いんだよ!」
と瞳が仕留めにかかる。

インに飛び込むハチロク、それをバックミラーで見た横川は。

「そうはさせるかつ！」

と強引にインにマシンを貼りつかせる。

「なに！？」

横川はバックミラー越しでも瞳が慌てたのがわかった。

瞳は焦る。ここで抜かせなければほぼ負け、もしくはまた戦術を練り直さなければいけない。

横川はその一瞬で、勝利を確信した。

だが――――

インにいた横川は背中を氷で撫でられた感触を感じた。

さきほどまで同じイン側にいた横谷のハチロクがいつのまにかアウトにいたのだ。

（なんで！？）

と驚愕する横川。

さきほどまでインにいた、というのは1秒も間は開いていない。なのに、アウト側にいた。それは横谷が瞬間的にアウト側に進路変更したのだ。

だが、フルに突っ込んだマシンにそんな猶予はないはず。

―――なのに、そこにいた。

>i12609—1772<

＊

横谷瞳は前でインを塞がれた時はかなりの動揺をした。

――横川春奈、失速。

それを見た瞳は。

「また、『声』を聞いちゃった。みんなに言ったら笑われそう」と自分でもクスクス笑いながら次のヘアピンに侵入する。

＊

それを見ていた香織は。

（なに、あれ……？）

ほとんど一瞬だった。瞳が横川を抜き去るのは――

（流石瞳ね……あれが、ハイスベックキラ高性能車殺し）

と思った次の瞬間、クスクス笑い始めた。

頂上の直登達も瞳が抜き去って、横川が失速したと香織から聞いた。

「ふっ、さすがに瞳相手じゃ無理だな」

と言いながら2台が走り去って行った方向を見る。

5話「声」(後書き)

VS横川完結。

皆様が楽しんでいただければ幸いです。

一応、次のライバルは考えてありますが、その前にまたコメディ風の日常でも書こうと思っています。

感想お待ちしております！

6話「戻ってきた日常」(前書き)

久しぶりのギャグパートが主です。

6話「戻ってきた日常」

横川が失速したのを見た横谷瞳はいつもより深い角度でドリフトしていく。

——勝った。

それだけが、瞳の頭の中で鳴り響いていた。

瞳はアクセルを抜いてエンジンのクーリング走行に入る。

その後ろからは横川のシビックが近づいてくるのが見えた。だが、その時にはゴール地点を抜けていた。

ゴール地点でクルンと回った瞳はそのまま頂上に戻っていく。

＊

ゴール地点では藤原達や兄貴も迎えてくれた。

「さっすがタコ！ いやぁー、勝てるとは思わなかったよー」

「藤原、お前、バトルが始まってから『勝てる勝てる！』と騒いでいたじゃないか」

と工藤。

「いいのよ。勝てたんだから！」

と反撃をする藤原。

俺がエンジンを切って外に出ると。

ハイスベックキラ

「流石、高性能車殺しだ。横川が勝てなくて誰が勝てるんだかと斉藤。」

俺としては、いつ負けてもおかしくないバトルだったけどな。その後ワイワイ騒いでいると、横川が戻ってきた。

「……………負け、か」

とたっぷりと時間をかけながらいう横川。

「まったく、直登さんが敵わなかったわけだ」

と独り言のように呟く横川。

そして、帰って行った。

「なにか言えばいいのにね……」

という涼宮。

＊

俺も全身の筋肉の緊張が解けてきたとき、兄貴が突然。

「なあ、お前のハチロク、走らせていいか？」

「なんで？」

「乗りたいだけさ」

「兄貴なら……大丈夫か……」

「ありがたいな。制限回転数とパワーバンドを教えてください」

「わかった」

今兄貴に訊かれていることはエンジンを回していい限界値のレブリミットと最大トルク発生回転数から最大出力発生回転数の間のパワーバンドについてだ。

どちらも重要なことなのだ。

「最大出力は10000回転ちよい、最大トルクは8000回転くらいだから、レブリミットは11000回転」

「とんでもない高回転型エンジンだな……」

「まあ、けど6000回転くらい回れば思うように動くと思うよ」

「わかった。足回りとかはどうなってる？」

「アンダーステア気味。とにかく根性がないと踏めないよ？」

「わかった。多分、2，3往復はすると思うから」

「事故らないでね」

と俺がキーを渡すとニコリと笑ってハチロクの元に向かう兄貴。

エンジンに火が入って加速していくハチロクを見つめる。

「やっぱ、いい音だな……」

とポツリと言ってしまった。

「へ？」

と藤原。

「いや、普段は乗ることだけだから。こうやって外からエキゾーストノート排気音を聴くことがないから新鮮だなんて思っちゃって」

「ああ、確かにそうだね」

＊

横谷直登は回転の伸びをみながら考える。

（やっぱり、1速ではそんなではないが、2速では6000回転くらいまで回らないとのろく感じる）

ドリフトの体勢に入る。

いっきにアクセルをかけてリアの荷重を抜く。

——だが。

（スライドしない！？）

思ったよりアンダーステア方向にセッティングされている瞳のハチロク。

（こんなのをドリフトさせてんのかよ……）

正直、呆れかえる直登。

2回目の挑戦。

今回はスライドした。

だが、角度が出てなく戻ってしまう。

(とんでもない……じゃじゃ馬だ)

と思ってから、ドリフトさせるのはやめてボディや足回りの完成度を見ることにした。

(ボディはロールゲージを巻かずによくできている。スポット増しやガゼット補強が完璧なんだろう——足回りもいい)

さらには意外と気持ちよく走ってくれるハチロク。

(不思議だ。乗ると乗りにくくて苦戦すると思っていた。だが、6割程度なら思ったように動いてくれる。俺もここまで仕上げられたハチロクには乗ったことがない……)と感嘆する直登。

＊

兄貴は3往復程度で戻ってきた。

「どうだった？」

「思ったより乗りやすいな。けど、全開には出来なかった……」

「全開にしたいという気持ちがあればできるよ」

と助言をするも。

「そんなもんじゃない。とんでもないマシンだ」

「そうかねえ……」

「今日はありがとうな」

と言って帰ろうとした兄貴を——

「兄さああああああああん!!」

——呼び止めようとして姉貴に先を越された。

「香織……?」

と言って振り返った兄貴を姉貴は。

「今日は、瞳の勝利祝いでもしようと思っているんだけど。一緒にどう？」

と訊かれて黙る兄貴。

おそらく、こう思っているんだろう——自分は妹と弟（当時）をほっというて、勝手に家出した身勝手な兄なのに、いいのか？——と。

もちろん。

「わかった。行こうか」

と言った。

「じゃあ、みんな、ウチに来なさい！」

「「はい！」」

と6人、それぞれに言い方で揃う。

その後、俺の家でワイワイ祝った（という名目で遊んでいた）のだ。

で、次の日は休み。

俺は昨日のバトルでマシンがおかしくなっていないかチェックをしていた。

特に問題無し。

＊

一方、同時刻にとあるマンションの一室（『組織』の寮）でベツトで天井を見つめている少女が居た。

横川春奈だ。

勝負というのは、勝った方は気持ちがいいが、負けた方は良くないことが多い。

勝負の負の面だ。

だが、横川は決して悲しんでいるわけではない。
ただ、悔しいだけだ。

横谷直登に頼りすぎた自分の心が敗因。

それだけ――

それだけのはず――

なのに、なんでこんなに退屈なの――？

いつも、行こうと思えばシビックで峠や首都高環状線^{C1}に行って気を紛らわせられる。

なのに、行く気にもなれない。

「どうして……？」

もう、走る気力をなくしてしまったのか、横谷瞳に抜かされて、アクセルを戻してしまったあの時から――

そんなことを考えていても、時間は平等にすぎる、重い心のまま登校か、と心がさらに重くなる横川。

＊

俺が翌日、登校すると横川はすでに着ていた。

「横川、おはよう」

普通はバトルをすれば仲良くなるもの、だから少しはフレンドリ―になれる――

返事がこない。

「横川？」

声をかけても黙りこくっている。

「……なに？」

「い……いや、一昨日のバトルでなんか根に持たれたのかなあって……」

「いや、特に」

「なら、いいが……」

と、一瞬横川の顔が変なものを見る目になった。

なんか変なことを言ったか？

「で、あんたはなんで話をかけたの？」

こいつ、不慣れな相手だといきなりぶっくらぼうになるのか？

「なんとなく……」

「なんだし……」

と呆れたように窓の外を見る。

なんというか、自分が信頼できる人じゃないと心を開かないというか、社交性がないなあ……

その後、なにもなく授業も受けて放課後、教室の外から。

「タコー！ お客さん！」

と藤原の声。そっちのほうに行ってみると。

「あ、中河さん」

「横谷さん、久しぶり」

いたのは以前バトルをした中河^{なかがわ} 里美^{さとみ}だ。

こいつはG T-Rのエンジン、R B 2 6を載せたS 3 0 Zに乗ってるやつで、速かったな。

「今日はどうしたの？」

「この間さ、また勝ったんだって？」

「ああ、バトル？」

「そうそう、結構派手に抜いたって話だけど？」

「まあ、派手と言ったら派手かなあ……」

むしろ早業と言った方がいい気がするが。

「勝ったのは最近速いって言われているシビックでしょ？ 凄いよ

何故だ！？　なんであんな集団とは関係のなさそうな横川が入ると言ったんだ！？　何故だ！？　何故なんだあああああああああ！！！

と俺が頭を抱えていると。

「横谷」

と斉藤が声をかけてきた。

「なんだよ……？」

こちらは無愛想な新入部員で大変なんだ。

「前にも言ったはずだが、あいつも『組織』の一員だ。藤原の近くによれるなら、新自動車研究部にも入るだろう」

「あんな無愛想なのが？」

「そこは否定しない……まあ俺も似たようなもんだ。それに、俺達の近くにいればなにか変わるかもしれないし」

「……？」

と俺はなんかの違和感に悩む。あつ。

「斉藤、横川となんか関係があるの？」

「ああ、同じ施設で育った中だから、一般的には幼馴染ってところかな。って、なんで横を向いてクスクス笑っているのかな？」

「ふふふ……いやいやいや、気にしないで……ふふふ」

俺はある程度理解して(?) 笑いがこらえられなかった。

そんな俺のニヤニヤタイムを破壊したのは。

「斉藤おおおおおおお！　なに俺の横谷に手を出してんだ！」

工藤だった。

「なんにもしてねーよ！　というか横谷から話しかけてきたんだ！」

「横谷にどんな淫らなことをした！」

「『何故『淫ら』が前提なんだよ、お前は！』」

ここは斉藤と全力でツッコマさせていただく。

「横谷の身体を見ていて年中ムラムラしてて、とか！」

「それはお前だけだ!」

てか、自分で言うのもなんだが「可愛い」と思うなら構わないが、
「ムラムラ」は勘弁して欲しい。

「……横谷、お前変わっちゃったな……」

「なにがだよ!」

「昨日は、あんなにベッドで俺を求めていたのにっ!」

「クラスの皆さんが誤解するからやめろ!」

「事実では————」

「無い」

キッパリ言っておく。

「くそ……」

「少しは黙っておけ!」

「くそったれ」
シット!

「英語の赤点候補が言うな!」

「ヤック……デカルチャー」

「もう無茶苦茶だよ!」

もうだめか……ツツコミの処理速度が追いつかなくなってきた。ク
ラスに変な噂が流れないうちに息の根を止めるしかない!

「ウォラァ!」

ドンッ!

「グハッ……波動か!?!」

「まだか……ツツツツツ!」

「アッ——————————!」

工藤の息の根が止まった。

で、見事に放物線を描いて飛んで行った工藤は————

「「あ」」

見事に涼宮の足元に墜落。

そして、顔を上げれば————

「……横谷ではないが、天国だ……」

天国と地獄は隣り合わせだった。

「って、すみませんでした！ 事故です！ 事故ですから！ そんな『ひぐらしの○く頃に』のような笑い方はやめてください！！」
工藤の弁解もままならず。怖い顔をした涼宮に部屋に連れていかれて制裁（涼宮の足元に転がった時点からの記憶の消去）をされた模様。

二人を追いかけて部屋の中を呆然と見守る俺、斉藤、藤原、横川だった。

横川以外にも、問題児はいた……

—————ちなみに、作者のorototにも制裁が加えられたのは言うまでもない。

6話「戻ってきた日常」(後書き)

最後のほうは若干エロくなってしまったのは見過ごしてください。
R15指定は避けたいのでそのような描写は無し(当たり前だが)
工藤がなにを見たかは皆さんのご想像にお任せします。

当分このようなギャグパートが続くと思いますが、楽しんでくださ
れば光栄です。

感想お待ちしてます！

作者への制裁……痛かった……

7話「説得」

で、涼宮の制裁が終わった後に部室におそろおそろ入ると。

「ふふふふつふふふふつふふふふつふふふふつふふふふつ」

とニコニコ笑っている涼宮。……なんか、キャラが崩壊してますが……？

ともわれ、俺がいつも座っている席に座ると工藤が真剣そうな顔で。

「何故だ……頭が痛い……その上に何故かお前に波動を放たれてからの記憶がないんだ……」

と独り言のようにブツブツいう工藤。

……それを聞いた涼宮、工藤以外は鳥肌と寒気を感じずにはいられなかった。

と、俺が近くの自動販売機で買ってきた炭酸飲料を飲もうとしていると。

「ねえ」

と突然声をかけられた。

「あたしはどこでどうすればいいの？」

横川だった。

ビビるじゃないかよ……

「好きにくつろげばいいんじゃないの？」

と言ったら。

「あー、そうですか……」

と言いながら適当にパイプイスを持ってきて座った。

なにか忘れていたと思っていたのだが、この部室の構造にまった

く触れていないではないか。

この部室はちょうどL字になっている校舎のLの下の方の部分のようなどこの、主に音楽室や美術室などの特別教室がある棟の一番下の階。ぶっちゃけ、なんもない。

立地は1回なので帰るときに楽なのと自動販売機が近くにあることだけなのだ。

中は教室の半分ほどの広さにせめて会議机が欲しいところだが、使い古しの勉強机が長方形に並べてあって、イスはこれまた使い古したパイプイスを使っているという状態である。

まあ、机に穴とかが開いていないだけ、マシか。

部屋は1、2年使われておらず掃除をしたのだが、いまだにホコリが残っている状態である。

だが、無駄に車の雑誌や資料があって、R32GT-Rが新車として出てきた当時の雑誌やカタログもある。

そんな古臭い部屋だが、なにかと活躍をすれば部費をくれるのでそれを使って備品などは新しくしていこう、と斉藤は言っている。

と、部室を観察していたら横川がいつもの間にか居なくなっていた。

「横川は？」

と俺が訊いたら。

「誰だっけ？」

と藤原。こいつの脳内は大丈夫か？ 自分で誘ったんだろ……

「あのなあ……自分で誘ったのを忘れるか？」

「ああ、横川さんなら……タコ、どこに行ったの？」

「知るかつ！」

それを訊こうとしているんだが。

「しまったわ……この部のくだらなさに逃げてしまったのよ」

と深刻そうに言ったが、今更この部のくだらなさに気付いたのか

よ……

「こうなったら、あれで……」

「『あれ』？」

「ふふふ」

と藤原が涼宮の真似をしたような笑い方をしたが、全然怖くなかった。

ガラガラとドアが開いた。そこにいたのは。

「あ、先生、どうもー」

一応顧問の奥川先生だった。

と、その後ろから。

「……」

と無言で体を屈めて部室に入ってきた横川。

全員、横川のことを訊かれると思っていたら。

「ところで、部費なんだけど————」

「「「スルーかよ!!」「」「」」

「なにが？」

「いやいや、貴方の横を通って部室に入ってきた女子生徒についてのツツコミは!？」

「ああ、確かみんなと一緒にクラスの横川————」

「「「「いやいやいやいや!!」「」「」」」

色々軸がずれすぎている!

「どうしたんだい？」

「先生には言われたくありません!」

「なんか変なこと言った？」

「まともなところがありましたか!？」

状況とあっていることを言っていない気がするのだが。

「貴方達、変……」

と白い目で言ってくる横川。

いやいや、おかしいのは顧問だから。

「ああ、新しい部員を誘ってきたんだね」

ようやく、話が戻った……

「入部するなら、早めに入部届けを提出してね。じゃ」

と爽やかに帰ろうとする先生を————

「って、部費がなんたらいつてでしょ！」

————全力で引き留める。

「ああ、そうだったね」

となにかの資料を見ながら。

「本当は、部員が6人になれば部費が増えるよ、と言いに来たんだけど。増えそうだから大丈夫そうだね」

「ああ、そういうことですか……」

色々と不安だが、まあ大丈夫だと信じたい。

「じゃあ」

と言って帰って行った。

色々と疲れる先生だ……

「ふん」

と言って、買ってきた飲み物を飲み始める横川。

「というか、なにか言ってから買いに行つてよ……」

「なんで？ 別に貴方達には関係ないんだからいいじゃない」

うわ、きつい言い方。

「だって、帰ったのかと思って……」

「いいじゃない」

「そう……」

ようやく藤原もこいつの面倒臭さに気付いたのか、げんなりしている。

「（なあ、藤原）」

と小声で話しかける。

「(なに?)」

「(あんなの入れて大丈夫なのか?)」

「(ここまで来たんだし。ここは)」

なにをするんだ? と訊く前に藤原が横川に向かって。

「ねえ、タコの秘密知りたくない?」

「いい。わたしには関係ない」

ちなみに、なんで横川が俺のあだ名を知っているかというところ、単に藤原が俺のことをこのあだ名で呼んでいるのを知っているからだ。女子の大半は使っている。

と言われて。

「(うわーん……どっかの零さんみたいに断られたあー)」

と藤原。

「(仕方ないだろ。作者曰く、『横川は○井零の性格が入ってる』って言ってたから)」

と返してやる。

「(うう……こうなったら)」

と藤原は横川の横に強引に近づいてゴシヨゴシヨなにかを言っている。

「っ!?!」

なにか驚いている。そして。

「こっちに来ないでっ!」

藤原はなにを言った?

「あたしはノーマルです! 同性愛者ではありません!」

「嘘を刷り込まれたあ—————!!」

藤原め、どうせ『タコはね、男子じゃなくて美少女が好きなのよ』と言ったんだろう……!!

「横川さん。それは違う」

と工藤。ここで変態行動の挽回————

「これを餌になあ……」
「タコ、怖いよ」

＊

横川春奈は一旦部屋に戻ってきた。

理由は簡単、カバンを置きっぱなしにできてしまったのだ。

「大丈夫？」

と独り言をいいつつ中の様子を見ると誰もいなかった。

今がチャンスッ。

そう飛び込んで行った横川。

「ふう……」

なんとかとれた、と言おうとした瞬間。

「つーかまえたー♪」

「ひゃあああああああああああああああああああああ！

？」

横谷瞳に抱きつかれた。

（ここここ、このまま……変態の域へ！？）

＊

俺は掃除用具入れの中で待っていた。

案の定入ってきた横川に飛びついた。

「ひゃあああああああああああああああああああああ！

？」

と叫ぶ。

このままおとなしくさせれば俺の勝ちだ！

だが、どう抑えればいいんだ？　なんか釣れたばかりの魚みたい
に暴れているぞ……

俺はなんとなくそのまま押し倒して床に押さえつけることに。な
んか、これも変な感じに見えるなあ……

と、横川が抵抗しなくなった。

人の気配がしたので見上げると。

「横谷いいいいいいいいい！　本当に百合だったのかあああ
あああああああああ！？」

とさぞ悲しそうに工藤が言ってくる。

「いやいや、違うから」

「嘘つけ！　今から危ないことをしようとしていたんだろお！」

「なんでそうなるの！？」

「そういう体勢ではないか！」

「違うから！」

「じゃあなんで俺にはやってくれない！」

「やる必要性がないから！」

「なに！？」

こいつにやったらなにが起こるか……想像したくないからな。

「タコ！？」

と藤原が入ってきた。これで誤解が――――

「三人でなにをやっているの！？」

「またややこしいことになったあああああああああああああ
あああああ！！」

どうすればいいんだ！？

あ、俺が横川からどけばいいんだ。

俺は横川の上から逃げるように移動する。

「タコ……いつかはあたし達を？」

「いやいや、単に取り押さえていただけだから」

「ああ、なるほど」

簡単に納得してくれてよかった……

「さて、今度こそじっくりと話を聞かせるわよ」

ふふふーと笑う藤原。

「ほら、起きて」

と横川の肩をゆする藤原。

てか、いつのまに寝ていたんだ？

「ん……ふえ……？」

と目を開けた横川。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あ！！」

また叫んだか……

で、結局30分かけての説明。

「どこが元男子なの！」

「そんな形跡はもうありません……」

信じてくれなかった。当たり前だが。

「うううう……写真しか残ってないからなあ……」

「大体ね、どこが性転換女子ですか。聞いたことも無いよ！」

ちなみに、残りのメンバーも帰ってきている。

「変態なんですか？ だからですね————」

「いちいちうっせんだよ！」

「へ？」

横谷瞳がキレました。

「大体なあ、俺だっけなりたくなっただけじゃねえよ！ こうなっ
ちまったんだよ！ それを我慢して生きてきたらそれをあんたみた
いなやつに全否定されてなあ、俺はイライラすんだよ！」

「タコ……落ち着いて」

「藤原はちっと黙ってる!」

「ひえ……」

「大体なあ、少しは場合をわきまえろ! どこでも自分に関係ないやあいいのかあ!？」

「あーあ、タコのスイッチが入っちゃったよ……」

「少しはなあ、人の役に立ちたいと思わないのかよ!」

「どうでもいいじゃない」

「お前、一人で生きていると思っているのかあ!？」

「そっちだって一方的にキレて!」

「大体横川はなんでもそうなんだ、信じていた人に裏切られたのか、それとも自分からなにもかも嫌なのか!」

「誰も信じていないよ! あたしは裏切られるのが嫌なの!」

「ならなんで俺の兄貴がチューンしたシビックに乗る。それは兄貴を信じているんだろ?」

「そ、そんなことは!」

「じゃなきゃ命を乗せて走らせらんねーだろ! これでも一人で生きてると思っているのか!」

「うっ……」

「大体、裏切られる原因はお前がその人のためになっていないんだよ! 少しは世のため人のため動け」

「うう……」

ああ、すっかりした……あれ? ぶつける怒りが変わった気がする……?

そんなこんなで納得(?)した横川は、入部届けを提出したそう
だ。

7話「説得」(後書き)

なんか、最後が瞳の説教になっていきますね……
？ とうか、逆ギレ

まあ細かいことは気にしないでくださいw
次回から車の話が戻ってきます。

8話「加入」(前書き)

一時スランプにより放置をしてしまいました……お待たせしたわりにはいいのが書けなかったのは勘弁してください……

8話「加入」

なにはともあれ、横川を説得でき、自動車研究部への入部もほぼ決まり、今日は榛名山に集まっている。

「で、そのS2000はなんなの？」
と横川。

横川が言っているS2000とは、俺達が中学時代に製作したS2000だ。

というか、主に俺がチューンしたんだが……

具体的に書くなら、初期型のAP1型をベースに280馬力までチューン、無限のエアロ、2.2?化、軽量化、ドライサップ化。などなどである。

ちなみに、筑波サーキットで1分を切ったこともある。

「これで榛名山を走れと？」

「そう。FR車は初めてでしょ？」

「まあ、けどいいの？」

「いいの、せっかく俺達の仲間になったんだから」

「それにしても……」

「ん？」

「横谷が『俺』っていうと、すごい違和感がある」

「それはツツコマないで……」

「まあ、いいわ。いつてくる」

と言ってマシンに乗り込んで言ってしまった。

走っていくマシンを見ていたら藤原が。

「ちゃんと乗れるかね」

「FFから乗り換えてだと、ちょっとやさっとじゃないだろうな。かなりシビアなマシンだから」

「タコの魂が入ってるって感じ？」
「かもな」

＊

横川春奈は慎重に第1コーナーへ。
グリップ走行で抜ける。
（思ったよりも走りやすい……これは、グリップで走るの？）
と思いながら第2コーナーへ侵入。
（いや、限界域が狭い……FRってこんなに限界域が近いの？）
徐々に疑問を膨らませて行きながら榛名山を攻める。

＊

「タコ、あのS2000って」
「ああ、8割方は乗りやすい。だが、最速のタイムを出すには残りの2割を出さなければいけない」
「その2割は……」
「シビアな動きだ。ドリフトをしたほうが速い時もある」
「そんな車をFF乗りに？」
「辛いだろうな」
「可哀そうに……」

＊

乗り方がわかって攻めてみようと思った横川は思いっきりコーナーに突っ込む。

(っ!?)

車が、思ってみない動きをした。

(なにこれ、まるっきり違う動き……!)

突然の動きの変化に驚く横川。

(こいつの最高性能はこんなもんじゃないはず……!?!? なのに、
なんで)

バランスを崩して失速したS2000。

結局、一回下っただけで頂上に戻ってきた横川だった。

＊

横川が戻ってきた。

「どうだった？」

「……相当変な車ね」

と言いながら降りてくる。

「限界域だとすごいシビアで怖い」

「それは、単にお前が操れていないだけじゃないの？」

「ッ、だったら、どのくらい攻められるか見せてよ！」

「わかった。隣で見るといいよ」

と言って俺はS2000のシートに収まる。

「早く乗って」

俺は最初は8割で攻めたが、中盤からは本気を出す。

本当に、良い動きをする……

横川は目を点にしている。

頂上に戻ってきたところ。

「よくここまで操れる……信じられない」

「まあ、俺は普段からF Rに乗ってるからな、慣れだよ」
「ふん」

と言う横川。少しは尊敬したりしろよ……
それから少ししたら完全に黙ってしまった。

で、頂上に戻ってきて。

「なあ、横川……？」

「ん？」

「いつまで固まってるんだ？」

「へ？ 戻ってきたの？」

「おい、気絶してたのか？」

「ん……？ へ！？」

おい……マジでか……？

「き、気絶なんかしてないもんっ！」

見事なツンデレ、乙としか言えない。

で、その日藤原が。

「はい、横川さんのステッカー」

「なに、これ……？」

と、落書きにしか見えないステッカーを眺めている。

……あれは、なんだ？

まるでカラフルな古代文字のような絵を出して満足げな藤原。

「そ、それを張るの……？」

「そうよ」

あっけらかんといいやがった……

「でも、他のみんなには……」

「みんな、これ張って♪」

「「「断るッッッ！」「」「」」

「なんで横川さんまで！？」

ズーンと落ち込む藤原。あんなのは俺のハチロクの右のドアに「

藤原とうふ店」と書く以上に痛いぞ。

「仕方がない、あたしも大人なんだからそこは妥協して」

「妥協して？」

こいつが妥協しても俺達からみれば妥協に感じないことがあるのだが――

「横川さんのあだ名でも決めよ」

「話題変更じゃねえかよ」

と冷静に工藤。

「女性陣のあだ名をベースに考えると……」

と涼宮が考えて。

「サオ（藤原）、シオ（涼宮）、タコ（俺）」

「って、なんか俺のあだ名、男子時代から共通なのに今更気が付いたんだが――」

「今更？ フッ」

「鼻で笑うな！」

「一時は『タコポン』という案もあったのよ」と藤原。

「おい！ それって俺がポン酢みたいになってんだろっ！」

「タコといい、ポンといい、おいしそうね……」

と藤原が俺を見てじゅるりとよだれをたらす。

気持ち悪いぞ。

で、藤原がよだれを拭いて横川のほうを見て。

「横川さんは、イカでどう？」

「なんで魚介類なの！？」

確かに疑問だ。

「いいじゃん、タコと名字の横が同じなんだから、タコときたらイカでしょ」

「いやいや、あたしが納得できない」

「文句ばかり……」

「そうだっけ!？」

ということで、再考中。

「……ハルでいこうか」

と元氣なく藤原。センスねえ……

「はっちゃん」

と工藤。ダメだろ。

「もう春奈でよくね？」

と俺。

「「「「ですよねー」「」「」」」

満場一致で可決しました。

で、俺の家で歓迎会。というか、口実が出来れば遊んでしまうのが俺達なのだ。

食材を買って帰ってみて最初にみたのは。

「瞳いっ」

と青い顔で俺に抱きつく姉貴。

「今度はどうした……?」

「身体がおかしいの……グス」

「どこが?」

「瞳を見てもムラムラしないのおっ」

「じゃ、みんな、リビングで待ってて」

「「「「はーい」「」「」」」

「なんでみんなスルーするの!？」

「さあ、姉貴。説教だ」

15分間、俺は姉妹でムラムラするのが病気で、しないのが普通かつ健全なのだと姉貴に刷り込む。

「うう……姉妹愛を否定するなんて……」
と姉貴。色々と危ないぞ、この姉貴。

変態を片付けたとこで、俺は歓迎会に出す料理の準備の手伝い
でた。

すでに藤原と涼宮が準備を始めていた。
というか、いつから俺の家は集会場みたいになったの？
そんな俺のわずかな疑問を忘れさせるためのように、もてなしの
料理完成。

あんまり読者には関係ないだろうが、男性陣働け（主に工藤）

その後、普通に食事中。姉貴が死にそうな顔で『瞳を食べたい……』
と言っていたのはスルー。

もし姉貴のことが好きな読者がいたら警告。姉貴のキャラは統一
性がないからそれも許せる奴だけファンになってね。

「タコ、なに説明してるような顔してるの……？」
と藤原。脳内で説明してるからなあ……

「それにしても……モグ」
とサラダを食べながら横川。

「よくそんな口調をクラスで誤魔化せてるよね」

「仕方がないだろ。そうでもないとクラスで変な噂が流れそうだし」

「変な噂？」
と涼宮。

「いや、『実は横谷瞳は男だった』みたいなやつ」

「こんな可愛い男子は秀吉だけでいい」
と工藤。

「だから、精神すり減らして口調を直してるの」

「だったら普段も女口調でいいじゃん」

「いや、俺のアイデンティティが壊れそうだ」

「あれ？ でも瞳のアイデンティティってこの可愛さだよね？」
と姉貴。

「まあ、そう言われれば……って、男子時代の俺は！？」

男子時代はなにがアイデンティティだったんだよ！？

というバカ話で夜が更けて行く。

次の活動日、横川は顧問に入部届けを提出した。

「じゃあ、よろしくお願いします」

とどこちなく言う横川。まあ、それが横川らしさなんだが。

「タコ、よろしくね」

と横川……ええ！？

「春奈……今なんて？」

と藤原。

「タコって言ったの」

まったく……フラフラ性格が変わる奴だな。ま、楽しくなりそう
だ。

＊

走り屋の中では一番有名な峠道、箱根。

そこを走っているのは初心者、中級者、上級者まで、果てにはプ
ロのレーサーまでいる。

初心者もとい雰囲気組の車が箱根を上っている。
その後ろからヘッドライトが見えてくる。

「なあ、後ろから誰か来てるぞ」
と助手席の男。

「なあに、ぶっちぎるさ」
とスピードを上げるがまだ付いてくる。
いや、追いついてくる。

「なんだなんだ！？ あんな余裕綽々で」
と驚くドライバーの男。

少なくとも真っ黒いのはわかる。あとはライトくらいだ。

その後、一瞬インを開けたと思ったらそこに一瞬で車を入れてくる真っ黒い車。

その車種は――――――

箱根でも速い部類に入る横谷直登はR32GT-Rで走りこんでいた。

とはいっても、軽めに流すセッティングでバトルやタイムアタックをするための詰めたセッティングではない。

そんな直登の後ろから一台のマシン。

（ライトがでかいな……なんなんだ、あれは？）
やはり、車体は黒い。

（V6の音がする。なんなんだ？ クラウンか？）

相手が加速する。夜間の視認性を上げるために黒いトランクからボディと同色の白に換えて、前より目立つのだろう。

（しかしなんだか……これは――――）

と心で一拍置いてから。

「嫌な予感しかしねーな！」
と口で言う。

直登の久々の本気での箱根アタックが始まる。

8話「加入」(後書き)

最後の車ですが、ブログを見てくださっている人はわかるかもしれません。「やつ」です。

かなりぶっ飛んだ車なのでほどほどな期待を！ W W

9話「アルファード」(前書き)

テスト期間でしたので投稿できませんでした。待っていてくれた皆さんすみません……

9話「アルファード」

久々の全開走行に入る直登。

それでも全開走行用セッティングのときとは違うので8割程度なのだが、普通から見れば本気で走っているとは思えない。

直登はバックミラーとサイドミラーを交互に見て後ろを確認する。

（くそ……デカイ車体しかわからん）

と視線を前に戻す。

（しかし、デカそうな割にはやけに軽そうに動く車だな。1. 2ト
ン台か？）

そして、街灯が多い区間に入る。そして――――

「ミニバン!？」

そうにししか見えなかった。

（少なくともミニバンかもっとデカイ……アルファードあたりか？）
と推測を立てる。

（負けるわけにはいかない）

さらにペースを上げる直登。

最低限のアクセルで加速していくGTR。

直登がNSXに乗っていたとき身に付けたアクセルワークの延長線である。

（にしても、みればみるほどアルファードに見えるな……）

相手の車両がわかってからみると、ライトの形などはアルファードそのものである。

右ヘアピンの侵入。

最大限のブレーキングで引き離そうとする。

——だが。

（ッ！？ 突っ込みで追い付かれた）

久しぶりに驚愕する直登。

だが、立ち上がりで離れる。

（トラクション？ パワーか？ それとも車重か）

と相手の車を解析していく直登。

間もなく峠も終わる。

（さて、どんな奴が乗っているのかな）

と愛車を減速させながら。

（まあ、俺に絡んでくるのでこんなことをするのはアイツしかないか——それとも、新参戦か？）

とりあえず、降りてみなければ始まらない。

直登がGT-Rを降りるとアルファードのドライバーも降りてきた。
た。

「やっぱり、お前だったか——」

二人とも、ニヤリと笑う。

「荒畑 あらはた 勝二 しょうじ」

「久しぶりだな。横谷直登」

「なんの用だ。そんなバカでかい車に乗りやがって——」

直登は一瞬溜めながら思い返す。

荒畑と直登は2、3年前に首都高などでライバルだった二人だ。

荒畑は80スープラ。直登はNSX。

湾岸では荒畑が勝ち、C1では直登。横羽では同等。

そして回想をしながら。

「——結婚して降りたんじゃないか？」

と直登はこのリア充め、と思いながら荒畑を見る。

「フツ」

荒畑は親が医者で日本で有名な財閥の一つで、実家の財力を頼って車をチューン。湾岸仕様に80スープレを仕上げたら1000馬力にも届いたと言われている。

「……離婚したんだよ」

「何故？」

「……スープレを売るか売らないかで、な」

と泣いているように見える荒畑。

「で、愛想尽かされたの？　車好きが理解を得られないままやった典型的なオチだな」

「それを言うなああああああああああああああああああああ！」

「キレた！ 現代の若者怖え！」

「人をイジってそれかつ！」

「いや、俺は冷静に――」

「俺だってな、アルファード買ってなだめようとしたんだよ!!
でも『あなたの車好きに付いていけない』って!」

「そうか」

「三文字で片付けるなあ　あああああああああああああああ
ああああ！」

「落ち着け、まさか俺に八つ当たりするために煽ったのか？」

と、荒畑は一気に冷静さを取り戻して。

「違う。お前は相手ではない」

「じゃあ誰だ？」

「お前の妹だ」

やはりな、
と思う直登。

「だが、あのスープラで勝てるのか……」

お世辞にも軽い車とは言えなかった。どちらかと言うとパワーをものに言わせていた。

「違う。このアルファードでだ」

——
そんな箱根での変な小競り合いを知らない美少女、横谷瞳は——

＊

俺、横谷瞳はベランダに干してある黒くて長細い布を居候の藤原と眺めていた。

「最近の雨でタコのニーソのストックが底を尽きてきたね……」

「ああ、脚の露出を減らしたい俺には辛いものだ……」

「というか、2本くらい穴が空いてるよ」

「あれは俺が性転換したときから履いてたやつだからな。工藤には3万ほどで売れる。売る気はないが……」

あんなのを売ったら毎日背筋が凍りそうだ。

「で、それが最後の——」

「最後のだ。明日でストックは無くなり。穴が空いてるのは捨てるか」

「それによって、かなりの数がなくなるね……」

「ああ、俺の絶対領域が……」

「いや、いい加減見飽きたと思うよっ!」

と藤原にツッコまれる。

「だといってもねえ……夏以外は履かないと決めていたのだが……」

「もう十分暑いでしょ……」

確かに、梅雨も抜ければ夏だ。

「タコの生脚……綺麗なのにい」

「そんなことを言っても……なんかねえ……」

「脚だけ取り換えてほしい……」

「そんな便利なものじゃないから」

「タコはね。無駄に車の運転で脚を使ってるから引き締まって綺麗なの! それを見せないなんてクラスの女子が見たがるのっ!」

「むしろ男子かと……」

「大体、見てる方も暑苦しくなるの!」

「理不尽だ」

「今思ったんだけど……干してある靴下を見ながらあたし達はなにやってんだろ……」

「知らん」

「ということでタコはニーソ禁止」

「おい、意味不明急展開すぎるぞ——って、最後のをどこに持っ
てうううううううううう!」

最後のニーソ、行方不明。

ちなみに、干してあったのは姉貴に没収されました。

ということで、ハイソックスで登校。涼しいー。

特に問題も無く過ぎると思っていたら……

最後の最後で体育。

で、終わった後の女子更衣室での着替え。

「タコ、無駄に体力にあるねえ」

と藤原に抱き付けれる。暑いぞ。

「藤原、暑いんだけど……」

「うりゃー」

「スカートを上げるなああああああああああああ!」
ただいま、男性には見せられないとんでもない格好に。

俺のほうを見た横川が。

「ッ!?! タコ、遂にストライ○ウィッチーズに出るの?」

「出ない! それに『遂に』ってなんだよ!」

「え? そのキャラならいろんなアニメに出てそうじゃん。主に『
電○文庫』系の」

「出てたまるかあああああああああああああああああ!」
もちろん、出てません。

「タコ、口調がっ!」

危ねえ……もうちょいで男口調になるとこだった。
って。

「お前らのせいだろおおおおおおお!」

「落ち着いてええええええ!」

「ぜえ……はあ……体育の後で……はあ……疲れてるのに……」
体力の無駄遣いにもほどがある。

『横谷の悲鳴。これは助けにいかねば!』

と外から本気で突っ込もうとする工藤の声。
まあ、周りの奴が止めるだろ。

『工藤待て! 落ち着くんだ——』

そうそう、常識人で助かる。

『——まずは踏みとどまれ! このまま一人で飛び込んだら生
きては帰れぬぞ』

だいたいあつて。

『大人数でいけば安全だ』

「へ?」

と藤原。

『突撃前の作戦会議だ! やる奴は集まれ!』

ええええええええええええええええ!?

『工藤隊長、教師はいません』

『了解だ。ふふっ』

ここは……『アレ』を使うか……

「うりゃあっ!」

ドンドンドンッ! ズドドドドドッ!

『』『ぎゃあああああああああああああああ!』

』

変態どもが倒れる音がするぞ。

「うん、今のうちに脱出」

と俺が指示を出した直後。

『横谷……俺がその程度で……やられると思ったかっつっ!!』

と工藤。おかしいなあ、さっきの喰らえばただでは済まないのに

……ゴキブリか？

「タコ……ゴキブリがいるよ……」

と涼宮。これは確実に仕留めないとな。

ということで、

「そりゃあああああああああああ!!」

女子っばい(?) 叫び声で特攻する。

まずはドアの前に立っていた工藤の顔をキャッチ、そして握力全開。

「こ、この程度で!」

と工藤は言うが、メリメリ食いこんでいく。

「ぬごごごごご! ほほはにっ! (横谷!) ふふひへふ! (許してくれ!)」

「なんていつてるのかなあ?」

メキメキメキメキ、ズズズズズズ。

「ぬがああああああ!! (ガクッ)」

「あれ、抵抗しなくなった」

「ゴキブリでもタコの握力に耐えきれなかったか」と横川。

工藤は倒れていた男子に投げつけておいた。

また、親友をボコしてしまったか……

ちなみに工藤は部活が終わるまで抜け殻でした。

俺と藤原が家に帰ると。

「ありゃ、兄貴のGT-R」

「直登さんきてるの？」

「みたいだな」

とりあえず合いカギを渡したから家のなかにいるのかな？

そして中には――

「何故俺の顔〓瞳がブスなんだ……おのれ荒畑め……荒畑クロス……」

などとぶつぶつ言っている兄貴が居た。

「兄貴……？」

「瞳、勝手に上がってすまないな」

「別にいいよ、カギも渡してあったし」

「ところで瞳……」

なんだか言いずらそうだ。

「………さっき、靴下が落ちてきたから戻そうとしたけど、なんかたくさんぶら下がって近づきづらかったからあそこにおいてあるぞ」

と椅子の上を指差す。そこに俺が干していたニーソが……

それで話づらそうなのか？

「それで瞳……」

「ん？」

「クソッ、こんな可愛いやつをあの変態とバトルさせるなんて色々腐る！」

「どうしたの？」

「瞳、お前に挑戦状だ」

そんなことすか……

「誰から？」

「俺の昔の走りの仲間の荒畑勝二と言うやつだ」

「車はなんなんですか？」

それが一番気になるな。

「アルファードだ……」

……………

「「アルファード!？」」

「そうだ」

「ちょっと待ってください! どう考えても相手になんないですよ!」

と藤原。アルファードだと俺が弱い者いじめになるぞ?

「ところが、あいつは財閥の息子だから、レーシングカーをつくる勢いでチューンしてある。全身カーボン、MR化、ターボ化——」

「待ってください、MRになんてできるんですか!？」

と藤原。兄貴は疲れているようなので俺が解説をする。

「案外と、FF車のエンジンと駆動系パーツ、エンジン、ミッション、デフなどを後ろに持っていけばMRになるんだ。そもそも、MRの元祖だってそれと同じような感じなんだから」

実はNSXもそうだったりする。元々はレジェンドかなにかから小型なMRを作ろうとしてMR2に先を越されてあんなになったかな。

そうでなきゃスポーツカーで横置きエンジンはない。

「それって、色々とおかしくありませんか？」

という藤原に兄貴は。

「ああ、だがあいつはバカだからな。そんなくらいはやるだろうな」
そんなバカなのか……

「ともかく、明後日くらいにはこっちにくる。瞳、勝てるよな?」

「もちろん、榛名山では俺に勝てるのは兄貴くらいだよ」

「わかった。了解したと相手に連絡しよう」

こうして、新たなライバルとのバトルが決定した——

9話「アルファード」(後書き)

別に脚フェチとかじゃないですよ。なんとなくです。

ちなみに瞳はシャナの見た目が高校生verだと思っていただけ
ば。

そのうちブログにも書いてみようかなと思っています。

10話「焦らし作戦」

で、相手はアルファードというので俺なりのシュミレーションを考えてみた。

もし、その辺のスポーツカーと変わりない機動力としたら、なにが障害となるか……

やはり、車体の大きさだろうか。それだな。

しかし、MRとあの車体の大きさだ、セッティングとかがしつかりしてないとエラいことになりそうだな……

「俺も一緒に走ったが」と兄貴。

「100%ではないが、ついてきたくらいだからな」

「直登さんについてくるなんて……」

と藤原。ということは、速いか……

「弱点も特に見つけられなかった……」

と兄貴、俺に土産が作れなくて悔しいのだろう。

「今回は、瞳には負けて欲しくない。だから、全力で協力する」

「ありがとう、でも、そんなに速いの？」

「まあ、アイツは金があるバカだから厄介なんだ……」

「とうとう？」

と藤原。

「バカだから気に入った車はなんでもチューンする。確か初期型RX-7（SA22）に20Bエンジンを載っけたり、ハチロクにRB26載せたり……」

「まともな組み合わせがないな……」

「……で、ハチロクにRB26はボディに亀裂が入って終わり」そのハチロクのボディにRB26可哀そう……

「しかも最終的には600馬力はオーバーしていたという」

うん、バカだ。

「で、最後は80スープラに落ち着いて俺と湾岸でやりあったんだ」
「やっとまともな車が……」

「で、一時は1000馬力も出たという噂で——」

「バカ連発ですね……」

「——で、結局エンジンを4機潰して」

「エンジンが……」

「で、さらには——」

「もういいから（です）」

藤原とこれ以上の相手の武勇伝を語らせるのを止める。バカバカしくなる……

「まあ、バカだということだ」

「いや、わかるから」

「で、いつ——」

と藤原が言いかけた時に。

「……V6の音。まさか!？」

と兄貴は家を飛び出した。

で、外から。

『なに人んちにきてんだよおおおおおおおおおおお！』
『！』

『威力偵察だ』

『ゴチャゴチャうっせえんだよお！』

『横谷、落ち着け』

『テメエはどっかで転がってろ！』

『なんだと！　しっかりと近くのスイートルームを予約してあるから平気だ。路上で寝るなど！』

『だったらホテルでグースカ寝てろ！……！』

『テメエこそ妹と寝てろ！』

『うるせえー！』

『うらあああああ！！』

などどコミカルな音が聞こえてくる。バカばっかからか？

ぜえはあ言いながら兄貴が戻ってきた。

「さて、バカを帰らしたところで、作戦会議だ」

「お疲れさまでした」

と藤原が水を差しだす。

それを飲み干してから。

「冗談抜きで車はハチロクより上だ」

「『車は』でしょ？」

「そうだ。ドライバーも腕はいいが頭がバカなんだ」

「で、どこに突破口が？」

「あいつは必ず勝つ。の前に気持ち良く勝つ。というのがある」

「...」

「ようは後ろからプレッシャーを掛けまくったりしてミスするのを楽しんだりぶちぎって満足したり。そこに隙が生まれるんだ」

「ようは、自分の思うようにいかないといライラしてくると？」

「そうだ。例えば後ろからプレッシャーをかけてミスさせようと思ったのに全然ミスしない。ぶつちぎるつもりなのにぶつちぎれない。そうなるあいっは慌ててタイヤなどを酷使用する」

「相当なアホだな」

「おそらくあいつはマシンに頼り切ってまともに練習もしないで
前とバトルをするだろう。それならすぐに始めたほうが楽だ」

「だね。始めたいと言ってきたことができるならすぐにやるよ」

と、話していたら。

ガタガタ、ガチャ、ドーン！！

「よしわかった、今週の土曜日にやろう！」

と、青年といふか今どきの若者が入ってきた。

俺と藤原が状況の整理をしていると。

[illegible]

ええ!!」

「なんだと！ 大体テメエの妹はどこだ！ こんな可愛いやつらが
お前の妹のわかない!!!」

「その長髪美少女だっ!!」

「養子か!？」

「血のつながった妹だああああああああああああああああああ
あああああああああああああ!!」

「なるほど」

「なにがだ!？」

「お前は妹に見た目の良さを吸い取られてそんなブサイクに――
―ってそんな怖い顔をしないでくださいよ。ハハハハハハ」

「うるせえ――――！！！」

ドンッ、ガチャガチャッ、ズドドドドド、バッターン!!!!

あれ、なにがあったの？

「ふう……バカを退治できたぜ」

なにか、壮絶なことがあったようだ（俺達の脳内処理力では追いつけませんでした）。

ということとで土曜日。

「なんか無駄にギャラリーが多くね？」

とげんなりしながら訊くと。

「まあ、財閥の息子VS高性能車殺しだもん」
ハイスベックキラ

と涼宮。

俺は工藤のほうを向いて。

「じゃあ、タイヤの空気圧を見ておいて」

「了解」

と工藤が機材を持ってタイヤに駆け寄る。

そして、バトル相手の元に行く――――

「ん？ 緑のRX-8?」
エイト

珍しいな、あの緑は純正ではないはずだが……

「タコオ――！！！！！！！！」

とエイトからドライバーと思われる少女が降りてきた。

降りてきた少女は俺達と同じ中学だった渋川^{しぶかわ} 美希だった。

確かこいつも財閥の娘で某ファンタジーゲームの好きなキャラのイメージカラーと合わせるために愛車のエイトを緑にオールペイントして、満足しているやつだ。少なくとも今回の相手よりは車を愛していると信じている。

「久しぶり、どうしたの？」

俺達の顔でも見たくなっただろうか、確か俺達の高校に比較的近い高校に行ったんじゃないかなったけ？

「いやいや、今回バトル相手の荒畑勝二は我が渋川家のライバルの財閥、荒畑財閥の息子だからね。どうしてもタコに勝ってほしくて」「俺には荷が重そうなんだが……」

「いやいや、そこまで気にしなくていいよ。勝手に巻き込んでるだけだし」

とケロっという渋川。

「とはいってもねえ……」

「大丈夫大丈夫」

と手を振りながら言う渋川。

「じゃあ、頑張ってるね。サオ達にあってくる」
と藤原達がいるほうに行ってしまった。

さて、次こそ相手のところに。

「貴方が相手の荒畑さんですか？」

「ああ、そうだ」

「今日はよろしくお願いします」

「こちら」

と握手する。

「では、開始はあと10分くらいで？」

「いいですよ。では——」
と別れた。

「さてタコ、今回はどんな作戦？」

と藤原、周りにはいつものメンバー＋渋谷がいる。

「らしくはないが、出たところ作戦だ」

「なんで？」

「まだ相手の実力が測り知れていない。なら、走ってみて確かめる
しかないだろ」

「ある意味怖い相手だね……」

涼宮が言った通り、今までは相手は練習走行で相手の走行データを
集めて作戦を立てていたが今回はほとんどそのようなデータがな
い。

「じゃあ、あと少しだから」

あと3分ほどで約束の時間。

＊

開始一分前に二台はスタートラインに並んだ。

スターターの斉藤がカウントを始める。

「5，4，3，2，1，GO！」

二台のマシンがスタートする。

だが。

（後ろにつく？）

瞳のハチロクの後ろに荒畑のアルファードがついてくる。

（ちぎるか？ いや）

瞳は即座に作戦を立てる。

（焦らし作戦でいくか……）

二台は最初のコーナーに侵入していく。

瞳はドリフトしてるかしてないかのギリギリの領域で走らせる。
二台の差は全く変わらない。

（その程度か？ それともわざとなのか？）
と考える荒畑。

（まだ奥の手があるのか？）

二台は第一ヘアピンに侵入。そこでも両者の差は変わらない。
（この程度なのか？ 横谷の妹とはいえ）

一向に離れない二台。

＊

頂上ではいつものメンバーが話していた。

「結局、瞳は『焦らし作戦』だろうな」
と直登。

「『焦らし作戦』ってなんですか？」
と藤原。

「今回のように意図的に後ろにつかれたとき、あえて相手に抜かされないスピードで走って相手を焦らすんだ。で、ミスった時に逃げる」

その後に工藤が引き継ぐ。

「もちろん、相手の速さを見極められきれなかったら、無駄に終わるか抜かれるかで終わる」

「仕掛けるとしたら？」

「五連続ヘアピンだろうな。あれ以上引っ張ると最後のストレートで抜かれる」

「そこで引き離せば勝ち、ダメだったら、絶望的だ」

と工藤が引き継ぐ。

「まあ、瞳のことだから、なにをするかわからんよ」
と締めくくる直登。

＊

ヘアピンの侵入。やはり差は詰まらない。

だが、ここからスケートリンク前のストレート。

荒畑はアクセルを踏み込む。

3倍近くあるパワー差は峠の短いストレートでも十分に追い抜き
ができる。

だが、横に並ぶだけで抜かない直登。

（動じない……こいつ、まるで感情の無いコンピューターみたいだ
な……）

と荒畑は思う。

だが、瞳はそんなことはない。しつかり、感情を持っている。だ
が――

（やっぱり、ここで煽ってくるか……）

瞳は最初から予想していた。

（まだセーブ。ここからが勝負だからね）

中速コーナー。

おそらく、榛名山で1，2を争うコーナーリングスピードだろう。

（予定通り―――を超えて予想以上のタイヤのグリップ。これはチ
ヤンスッ！）

瞳は通常の侵入スピードよりわずかに速いスピードで侵入！？――
―――と思っている荒畑の推測は違う。

本来はリスクが高いため瞳でもためらうが、今回は相手を動揺さ

せるために、あえて侵入速度を上げた。

それも、ハチロクへの高い信頼があるからできるのだ。

(曲がってくれ、ハチロク——————ッ！)

百戦錬磨の瞳ですら汗がにじむ。

(いけるか……？ いけるよなあ？)

と祈る瞳。

荒畑は。

(バカ野郎！ 行けるものか！)

と思うが、瞳のハチロクはまるで空力パーツを付けたようにビシッ
と安定している。

(何故、そこまでいけるんだ！？)

瞳は————

(いける、ハチロク？)

ハチロクの声を訊く。

(ダメか……？)

人間、最大限の集中力になるとスローに見えるときがあるのかな
いとか。

それを、瞳と荒畑は観てる。

(くそ！ ダブルクラッシュ覚悟で突っ込むぜえ！)

腹をくくった荒畑。

(曲がれるか？ いや、侵入速度が2 km/h速すぎた————
——)

ガードレールが近づく。

慣性の法則に従ってアウト側——つまりガードレール側に流れる
ハチロク。

「曲がつてくれ————ッ！」
このバトル初、口を開く瞳。

もう、ガードレールと数メートルもない。

10話「焦らし作戦」(後書き)

とりあえずテンションが上がってきたところで切って、次回でVS
荒畑は完結です。

あと、文字化けがあったそうです、指摘してくれた方、ありがとうございます。

11話「決着、最速の才能」

荒畑の全身から冷や汗が出てくる。

（無理だ……！）

瞳のハチロクはそのままガードレールにぶつかる。そう思われるラインだった。

あのまま、ハチロクのボディがペシャンコになるのがまざまざと脳に浮かんでくる。

瞳は必死にアウトに逃げるハチロクを最小限のロスで抑えようとする。

（ハチロク……どうすればいいの！？）

そう伝えてるつもりの瞳。

タイヤも少しトラクションを失っている。

もう、ガードレールと接触する。

その時。

——慌てるな。リアバンパーを軽くガードレールに接触させろ。

そんな『声』が聞こえた。

瞳はその『声』を理解する前にそうした。

荒畑は後ろから見えてどうなったかが理解できない。

唯一できるのは。

——ワザとバンパーをぶつけようとしてる？

瞳はハチロクのリアバンパーをほんの少しぶつけるようにした。ほんの少し、接触の衝撃があった。

そして、トラクションが復活すると同時に脱出のラインが見える。

トラクションの復活で安定性を取り戻した瞳はアクセルを踏む。

荒畑は本能的にアクセルを抜いてしまった。

だが、次の瞬間。瞳のハチロクは加速した。

荒畑は舌打ちをしながらアクセルを踏む。

だが、一度アクセルを抜いてしまったため、ブースト圧が落ちてしまいそこから立ち直るのにほんの少し。ロスしてしまった。

ほんの少しアルファードが離れたのをミラーで確認した瞳。

「よし、計画通り。ここから先は高性能車殺しだ」
ハイスベックキラ

瞳のハチロクはその後のヘアピンを早めのブレーキングから立ち上がり重視のコーナリングで立ち上がる。

＊

頂上では、直登達が話し合っていた。

「そもそも、タコが五連続ヘアピンで仕掛けると言うなら、相手もそう思うんじゃないですか？ 榛名山では有名なセクションだし」

と藤原。

「まあ、瞳が裏をかくなら、スケートリンク前のストレートから二つ目までだ。二つ目のヘアピンは、ある特徴があるしな」

「ある特徴？」

「地元なのにわからんか……」

と直登が呆れる。

「ヘアピンの出口か……」

と工藤がつぶやくように言う。

「そうだ。あそこは出口が一車線多い。だから、今までのヘアピンより深く突っ込める」

「走り慣れていないと……わかりませんよね」
と涼宮。

「そうだ。荒畑のバカは自分とマシンを過信してほとんど走ってないからわからないだろう」

「そのまま五連続ヘアピンで引き離す……」
と斉藤。

「そうすれば、瞳の勝ちは近くなる。それプラス荒畑が焦ってタイヤを消耗すれば、確実ともいえる。というか荒畑ならやるな……」

＊

その瞳はやはりパワーの差でへばりついてくる荒畑には動じない。
パワーに頼るようでは高性能車殺しには勝てない。
ハイスベックキラ

瞳は車線が多いことを知っている。
だから、深く突っ込む。

だが、荒畑は知らない。

なので、また無謀な突っ込みをしたように見えた。

（あの野郎。またさっきみたいなのをするのか！？）
今度こそ早めの減速をする。

だが、瞳の突っ込みはセオリー通りなのだ。

アウト側ギリギリで抜けた瞳。しっかり操作できる範囲で――

荒畑は焦る。

（車線が増えてる、これが狙いだったのか！？）
完全に、瞳の罠にはまった荒畑。

瞳は技術を出し切って逃げの体勢に入っている。

五連続ヘアピンの前の連続90度コーナーは最小限の減速で逃げる。

荒畑は無理に車を曲げようとステアリングをこじり始める。

（曲がれ……ッ）

そんなことをしている間にも、ハチロクとの差は広がっていく。

（ここを立ち上がれば、いるはずだ——————ッ）

と願いながら立ち上がる荒畑。

だが、荒畑が五連続ヘアピン前の連続コーナーを抜けた時には、瞳は五連続ヘアピンへのアプローチに入っていた。

これ以上離されると追いつけない可能性が出てくる。

だが、瞳は最大限の攻めで五連続ヘアピンを抜ける。

荒畑がその姿を見ていたのは二つ目のヘアピンまでだ。

瞳の本気のドライブについていけない。

この理由は簡単だった。

スケートリンク前のストレートで肝を冷やするような走り方を見せられ、後半からの瞳のキレた走りがさきほどのような無謀な走りに見えてしまっているのだ。

それでも食らいつこうとする荒畑。だが、コースも知らずにむやみに走りタイヤからグリップが減っていく。

（だが、こっちには3倍近くのパワーがある。負けるはずがない――

――）

そう思う時点で、瞳の作戦に引っかかっている。

直登が五連続ヘアピンとその後のヘアピン二つを抜けて、最後のストレートの前のヘアピンを見ると、一瞬だけ、瞳が見えた。

そのコーナーを荒畑が立ち上がると、瞳がストレートの五分の二ほどのところにいた。

（追いつく）

と思いアクセルを踏み込む。

荒畑の思った通り、ギリギリノーズが入るくらいまで追いついた。だが、そこまでの速度差ということは――――

（チッ……）

ブレーキを早く踏まなければいけない。

瞳はもつと奥で踏む。

よって、抜けない。

瞳はこれもある程度は予想していた。

アルファードの巨大な車体で抜き去るにはコーナーの前から横にならなければいけないことを。

そして、軽いドリフトで荒畑を牽制する。

いくら小型なハチロクとはいえ峠道、アルファードのでかい車体では抜けない。

そのまま、ゴール。

この瞬間。横谷瞳の勝利が確定した。

＊

俺はスタート地点に戻りながらぶつけた部分の心配をしていた。まあ、ヘコんではないと思うが……

頂上に戻って、藤原達と話す前に確認する。

ううむ……ガードレールの擦った後のような……

「タコオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

静寂を壊すように藤原達。

「ドライバーは無事でよかったあ」

と俺に飛びついてくる藤原。百合ですか？

その後渋川もへばりついてきた。暑い……

俺は藤原と渋川を剥がしていると。

「ぶつけたみたいだな」

と兄貴。

「擦ったようにも見えますが……」

と涼宮。

「こっちから見れば、少しだけヘコन्दる」

「そう言われてみれば……」

と別の方向から涼宮と兄貴が見ている。

「まあ、ボディは無事なようだし。走行には問題はないだろうな」

と兄貴は言った。

なら大丈夫か……

「横谷……」

と声が聞こえ、そちらを見ると――

「そっちのバカ兄のほうだ。こっちにこい」

と荒畑が呼んでいた。

「ちよつと言ってくる」

*

直登と荒畑は隅のほうに移動した。

「なんだ？ 瞳と付き合いたいのか、あいつは無理——」

と言っている直登の言葉を遮って。

「違う。お前の妹、なんて運転なんだ……」

「なんだ、ぶつけられたか？」

確かに瞳のリアバンパーにはぶつかった形跡があったが……

「違う。いい意味でだ」

「なに？」

と眉をひそめる直登。

「正直に言おう。お前の妹のほうがお前より速い。または速くなる」

「そんなの、わかりきったことだ。俺でも負ける」

「いや、まだお前のほうが少し速い。だが、そのうち抜かれるだろうな」

「今更だが、なんでわざわざここに連れてきていうんだ？」

「お前の妹なら、遠慮するし、逆に舞いあがらせるのも嫌だしな。

だったら、その対象となるお前に伝えて、緊張感を与えた方がいいかな、と」

「ふっ、相変わらずわけのわからんやつだ」

「だが、今のはマジだ。お前も、自分でわかっているけど他人から言われて、グサッときてるだろ？」

と言って、アルファードに乗りこみ。

「妹に伝えてくれ、もし金銭面で困ったら相談してくれて構わないって」

「ああ、でもあいつは別口があるみたいだしな」

「らしいな」

と言って、走り去ってしまった。

それを見送った直登は。

「……そんなこと、言われなくてもわかってんだよ」とボツリと呟く。

＊

無事、アルファードとのバトルも無事終了。

さて、今日は――

「やることも無くなってしまった以上、我々はなにをして過ごしていくかっ！」

と藤原。

「ていうわけで、VSアルファードが終わってしまった以上。なにか次のことを考えようと思って、いつも通りの練習走行とかだとマンネリに入っちゃうし」

「それなら、俺と横谷のラヴストーリーを――ぶがあー!!」

工藤を黙らせて。

「じゃあ、変態は散ったところで、最近気になってることを発表しようか」

ということで、気になっていること。

……そういえば、涼宮のことが……出番少ないし。

あ、別に百合ではないので。

そして、私生活も謎に包まれているし、てか、いつも一緒にいるけど目立ったことをしてないし……

「涼宮――」

いつもはどんなことをしてるの？ と訊くつもりだったのだが。

視界の隅で復活した工藤が。

『これを読んで「付き合ってください」』

反射的に。

「――付き合ってください」

しまった、なんてことをおおおおおおおおおお
お……!!

アトデクドウクロス。

一方みんな、笑顔のまま固まり。

「そうよね。タコは元々男子だもん。アハハ」
と固まったまま藤原。

「そうだよ。タコは男の子だよ。フフフ」

と横川。

「そうだぜ。それを忘れてはいけない。へへへ」と斉藤。

「そんな横谷も好きだぜ。グフフ」

と工藤。テメエのせいだろ。

なにか、なにかで誤魔化さないと……ッ。

俺は、とっさに目に入った。

「涼宮、胸大きいねっ！」

バカヤロおおおおおおおおおおおおおおお!!!

!!! 逆効果じゃねえかあああああああ!!!

「タコ……そんな目で……」

と涼宮。もうだめかつ！

よし、工藤と話して誤魔化そう。

「ねえ、工藤」

「なんだ？」

「……お前、手に持ってるボードを渡せ」

と工藤がさっきのボードを落とす。

「おいおい、なにやってんだよ……」

と言いながら拾おうとすると工藤が先にもぐり。

「……絶景だなあ……美少女達の脚……」

テーブルの下から、そんな声が……

「「このド変態ッ!!!!!!」」」

しばし、工藤をボコします。

「ぜえぜえ……まったく……どこかの生徒会副会長でもまともな気がする……」

「というか……裏で役に立ってる分、工藤はただの変態じゃない……」

…」

といいつつ、工藤の屍を見る。

「まあ、これで解決したと……」

と藤原はなにか忘れものをしたような顔をして。

「ねえ……あたし達、なにをしてたっけ？」

……なんだっけ。

「なんかどうでもよかったような……」

と横川。

「だったら、本当にどうでもいいことじゃない？」

と涼宮。

「「「でしようね」」」

……ほんとは、忘れてたフリをしてただけなんだけどね。

なんか適当に忘れてくれたが、藤原達の間では、そんなに大したことではなかったのだ。

さて、気を取り直して。

「涼宮、いつも家でなにしてんの？」

と訊く。

「まあ、読書とかかな」

うん、普通だ。

「でもなんで？」

「いや、涼宮ってプライベートが謎だから」

「そういうばあたしも最近シオの家に行っただけだからあんまり知らないね」

と横川も無言だが頷きながら乗ってきた。

工藤を除く全員で涼宮をみつめる。

「ええっ、みんなでどうしたの？」

涼宮を見ながら「ムムムムム」と唸った後、藤原が。

「まあ、今日はなにも思いつかないようだったから、今日はお開きにしょ」

と藤原がいい、解散。

だが、俺は見ていた、藤原が『尾行しよ』と目で言ってきた。

ということで、尾行開始。

若干、気が引けるが……ここは、好奇心を抑えるためだっ！

ということで涼宮とわかれ道で別れてから。

「よし、作戦要員は揃ったね」と藤原。

メンバーは藤原、俺、横川だけだ。

斉藤は「遠慮しとく」と言って帰り、工藤は空気を読めないところがあるのでダメ。

なんか謎に包まれた涼宮の生活を失礼ながら覗いてみる。

11話「決着、最速の才能」(後書き)

明日くらいになるかなと思っていましたが、予定より多く書けたので投稿しました。

次回から、普段は影が薄い涼宮の出番が増えます!!

12話「涼宮の秘密」(前書き)

この世界では車関係の相場が現実の10分の1と考えてください。

12話「涼宮の秘密」

かなり酷いことをしている俺達。

なにしろ、涼宮をストーキングしてるのだからな。

「……色々すまない、涼宮」

「タコ、ここで言っても聞こえないし」

「というか、バレたらどうすんの？」

と残りの二人、藤原と横川にツツコまれる。

俺は二人をスルーして前をテクテクあるいて行く涼宮を見る。
うん、まだ俺達には気づいていない模様。

それから数分、涼宮は帰り道にある本屋に入って行った。

「まさか！？『とら○ラ！』を買いに！？」

「なんで今更……」

時代遅れ感が否めないものだな。面白いけど。

「二人とも、違うよ」

と横川。

「きつと、『とある魔術の禁^{インなんとか}○目録』のアニメ版二期の情報が本当に書いてあるか見に行ってるんだよ！」

「入っていたのTSUYOAYAじゃねえし！ 大体あれはデマか適当説が濃厚だろ！」

「あ！ 奥にいったら」

と店の中を見ていた藤原。

「三人で入ったらバレちゃうよ……」

「よし、春奈が行って」

と藤原。

「なんで！？」

「だって、あたしは幼馴染だし、タコは目立つし」

「そういうことなら」

と不自然にならない程度に身を隠して店に入って行った横川。

「さて、出口はここだけだからちよつと離れて待機するか」

と俺は藤原を促して離れる。

本屋の出口にへばりついてたら不審に思われるからな。

その直後、俺の携帯に横川から電話。

『今、シオは車雑誌のところにいるよ』

「車雑誌？」

ここでは別に車雑誌を女子高生が読んでいてもおかしくはないのだが（そんな世界だからな）涼宮はFC乗りでそこまで新しい車に集中することはないと思うんだが……FCの大特集でもあったのか？

「どんな雑誌かわかるか？ FCの特集とか」

『FDの文字しかないけど……FCではないと思うよ』

じゃあなんだ。

「タコ」

と藤原。

「なにか心辺りは？」

と訊いてきた藤原。

「お前が知らないなら俺も知らねえぞ」

と言ったところ。

「てことは、なにかあたし達に言えないこと……」

言えないこと……

「彼氏ができたんだわっ！」

と藤原が少しだけ声を張り上げて言う。

「ないない」

と俺が否定をするも。

「タコ、シオの見た目、普段はおとなしいからわからないかもしれないけど、かなり可愛いよ。それに、性格もいい」

「確かに、そして……」
胸があります。

「「そりゃいつでもできるだろうなあー」」

「あたし達は見た目はいいかもしれないけど」

「性格が悪いからなあ」

「「うふふふふふふふふうふふふふふふふふ」」

と二人で気味悪く笑って。

「「こんちくしょー!!」」

ちよつと叫ばしていただきました。

「そうよね! シオは胸大きいもんね!」

「どうせ、俺らは平均だもんね!」

その後、自嘲的に笑ってたら横川から電話。

『今、シオがさっきの雑誌を持ってレジへ、あ、今買ってる。あたしも買って出てくるから遅くなる。先に追いかけて行って』
と言われた。

「了解……グスン……」

「後で合流しようね……グスン……」

『……二人とも、一体何があったの』

答えないで電話を切って、出てきた涼宮を追いかける俺と藤原。

「うん、なにか雑誌くらいの大きさの袋を持ってるね」

「ああ、これで家に帰るのか」

「みたいだね」

その後、涼宮は予想通り家に帰って行った。

で、

「横川、今どこにいる?」

『ごめん、この辺りの土地勘がないからあの本屋の前にいる』

「了解、今拾いに行く」

で、横川と合流して、俺の家に帰るとき。

「あれから雑誌に目を通しておいたんだけど。なんか最近出たFDの進化形のことの特集で、半分以上そればっかだったよ」

「FDの進化形？」

「そんなの出たっけ？ RX-8か？」

「あ、間違えた、今度出るんだった」

「今度出るFDの進化形……？」

「FD3Zか？」

「そうそう」

「もしかして……」

「あいつ、FCを売ってFD3Zを買う気なんじゃないか？」

「それはあり得る。別格のタコは別にして、一、二世代前のFCじや今のマシン、GT-Rとかには勝てないもん」

「よく考えれば、自動車研究部部員で乗ってる車の古い順に並べれば、タコの次にシオだもんね……」

「そりゃ、ガンガン金をかけてある俺のハチロクとは違って、あいつのFCはガソリンとメンテ、タイヤぐらいにしかかけてなかったもんなあ……」

で、気が付いたら俺の家に到着。

「さて、どんなになってるのかなあ」

と雑誌を開くと。

……とんでもねえ

RX-7 FD3Z どんなかというと。

外見は旧FDと同じエンジンは3ローターの20B、しかもターボ。重量配分を考慮して国産FR初後輪のデフとミッションをくっつけるトランスアクスルを採用。旧FDに採用されていた軽量化の

ための軽め穴をなくし、バンパーなどをカーボン、FRPで製作。
重量、1320kg。パワー、350馬力。トルク、45kg／
m。

あとはホイールベースが2430mmとFDより5mm拡大した
だけであるの寸法は変更なし。

さらに本気でGTRを潰しにきているようで、ニュルブルリン
クを7分41秒で走っている。

なんかGTRより遅いように見えるが、あの過酷なコースをF
Rでこれくらいのタイムで走ったということはかなりすごい。

「しかし、これってFDって見えるの？」

「いや、どちらかというとFDの皮をかぶった別の車だろうな」

「だったら、名前を変えろと……」

と横川。

「まあ、まだニュルを走っているのはプロトみたいだし、正式名称
はまだ出てないからわからないよ」

と言っておく。

「明日、シオに訊きましょう」
となった。

で、次の日。

「シオ！」

と藤原が教室で涼宮の机をたたきながら言う。

「なんで黙っていたの!？」

「え？ なにを？」

とたじろぐ涼宮。仕方がない。

「あたしはね……シオにそんなことはして欲しくなかったの……ま
さかあんなことに……」

おい、なんか話がズレてきてないか？

「……そうね。私も、そのうち言わないといけなくなっているって

ただけど……」

おい、クラスみんながこっちを注目し始めたぞ。

「……なんで、隠していたの？」

「そんな……つもりはなかったんだけど、一目惚れしちゃって……」
と顔を赤くする涼宮。恥ずかしいんだろうな。

だが――

『マジかよ……涼宮に彼氏……』

『俺、涼宮のことが好きだったのに……』

『しおりん、可愛いもんね……』

『横谷、俺はお前が好きだぜ』

とだんだん変な解釈が混じってきた。――――最後のはスルーな。

そんなクラスのざわめきに気付かないのか、二人の会話は続いていた。

「なにがよかったの……？」

「あの、曲線的なのが……」

『曲線的な……？』

的な雰囲気突入。当たり前だが。

「なんでよ……―あれ（FD）でもダメなの？」

もう、書く気がなくなるほど変な空気になってきた……

クラスのみんなは『あいつら、できていたのか……』となっていた。

「わかったわ……」

と涼宮がカバンの中からなにかを取り出す。

「これ……でしょ？」

そんなこんなで、涼宮を喋らすことに成功。

「で、なんで黙っていたの？」

と藤原。

「サオったら、もうどうでもいいでしょ」

と誤魔化す涼宮。

対して藤原はニヤリと笑つて。

「今度誤魔化したら工藤と一緒に一晩過ごすことになるわよ」

「ごめんなさい〜〜〜!!」
 言いますからああああああああ

「ああ！」

と泣きそうな顔言う。

それを見ていた工藤は。

「なんでだよ!!」

ときれる。

「だって、工藤と一晩明かしたら大事なものをなくしそうなんだから！」

[illegible]

それは普段からの行いからだろう。

「さて、そもそもFCじゃダメなの？」

そりや疑問だな。

「ダメなの……」

「なにが？」

「FCじゃみんなに追いつけないの……」

$$\left[\begin{array}{c} \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \end{array} \right]$$

「だから、みんなと張り合える最高のマシンが欲しかったの……」

「なんで、FDじゃないの？」

「サオとかぶっちゃーじゃん！」

ああ、そこは作品の都合を考えているんだな。

「けど、GT-Rって柄じゃないし」

「まあ、涼宮はおとなしいキャラだからな」

と俺は相づちを打っておく。

「でも刺激のある車がいいし……」

で、新型FD（仮称）か……

これ以上は聞く必要はないかと思いきやカバンの中からさつき自動販売機で買ったジュースを出して飲む。

メロンソーダうめえ……

ああ、そういえばそろそろ弁当用の冷凍食品が切れてきたな、帰りにスーパーでも寄るか……

と、俺が思考を巡らしていると。

「タコ、シオが新しい車を買っていいと思う？」

と藤原。

「いいんじゃないかあ？ そんなのは個人の勝手——」

「FCはどうするの？」

と俺の言葉を遮って藤原。

「まあ、売っても大した額にはならんし、カッコいいからホイホイ売る気にもならないな」

「だったら、デモカーとして自動車研究部で買ったほうがいいんじゃない？」

それが目的か……

「で、買ったらみんなでチューンするのっ！」

「そして、俺だけでやることになるのか……」

「いいや、タコだけには任せないよ！」

「じゃあ、どうするんだ……」

「直登さんに教えてもらう！」

おい。

「それなら、タコが過労で大変なことにならなくて済むでしょ？」
そもそも、今のデモカーのS2000をチューンに掛かりつきり

になったのが俺が性転換した理由だが……

「でも、いつでるかからんだろ？」

と言ったら。

「『FD3Zの販売モデル、来月発売』だって」

と斉藤。

「名前はFZ3Sか、もう名前が別の車だな……」

なぜ、FD3Zって名前でプロトタイプを出したし。

「けど、基本的には変わらないらしいな。60万か、高いなあ……」

「大丈夫、FCにはメンテ代くらいしかかけてないから80万は貯金はあるしっ！」

と涼宮。おい、本気ですよ。

「ふふふふふふ……」

と藤原。気味悪いな、おい。

「元祖FDのが速いって証明するときに来たようね」

「……サオ、負けフラグを立てないように」

と横川。

「うっ……」

やってしまった……という風に顔が青くなる藤原。

「ど、どうせ、そんなフラグは折ればいいのよ！」

またフラグ立てた。

それに気付いたのか藤原はリアルに「orz」の格好をしている。

「……（おい、誰かフォローしてやれ）」

と小声で斉藤。

「……（なにその難題！？）」

と工藤藻小声で応じる。

「……（簡単だ）」

と斉藤が工藤に答える。

「……（お前が藤原に抱きつけば良い）」

おい、それって……

「……わかった」

と工藤はうなづいて――っておい！？

「どうせあたしなんて……」

と落ち込んでいる藤原の背中に工藤がダイブ！

「つて、工藤!? あんたはなんなのよおおおおおおお
おおおおお!!!!」

[illegible]

「あんたが離れないと落ちて着けるはずないでしょ!!!」

「うおおおおおおおおお！！」

「あんたはタコにしか興味がなかったはずでしょ!？」
この節操無しめっ!

ボコボコボコボコボコ。ズドドドドツドドツドドドド！！

「……藤原あ、あんた、強えなあ……」

と言つて崩れる工藤。

「はあはあ……変態め」

と工藤を睨む藤原。

「……（な、治まっただろ）」

と小声で斉藤。

俺も小声で。

「（ああ、けど、犠牲が一人）」

「あんなのは気にしなくて大丈夫だ」

「（ですよー）」

と、涼宮がまだ下校時間でもないのに帰る準備を始めていた。

「って、涼宮、帰るのか？」

と訊くと。

「うん、FZ3Sの予約してくるから」

と言って今まで見たことのない速度で帰って行った。

ああ、来月から厄介なことになりそう……

12話「涼宮の秘密」(後書き)

涼宮のニューマシン、FZ3Sは元々FD3Zのままのつもりだったんですが、藤原のFDとかぶるのでFZに変更。
次回から涼宮が覚醒してきますよw

13話「FZ3S」

で、あの後結局やることもなくなり下校した俺達。

「タコ」

と帰りがけに寄ったスーパーで藤原。

……涼宮のことだろうな、親友だし――――

「今日のご飯なに？」

「……」

「どうしたのタコ？　口をパクパクして」

「テメエはイン○ックスかあああああああああああああ！

！！」

「ひゃあああああああああああ！?!?」

と小規模な争いをしていると。

「あ、二人とも」

「「ッ!」？」

とそこにいたのは涼宮ではなくクラスメイトの女子だった。

正直、涼宮より厄介だ。

「ど、どうも……」

だって、通常の男子モードから学校用の女子モードに変えなきゃいけないんだから。

「やっほー」

と藤原。こいつの口調を分けて欲しい。

「あれ、瞳ちゃん、顔が赤くなってきてるよ」

と指摘。確かに自分でもわかるほど赤くなってきているんだろう

――
「タコのほっぺた柔らかいよ」

と俺の頬をいじり始めた藤原。

「はにふんだ〜（なにすんだ〜）」

「あははははは〜」

「あはははは！ 瞳ちゃんおかしい〜！」

助けてくれえ……

このままでは一男口調（本性）が出てしまう……

あ、そういえばこの後家に帰って晩御飯を作らないといけないからそれを口実に———

「あ、そうそう、これからカラオケに行くんだけど二人ともいく？」

と聞かれたがもちろん———

「いくいくー！」

と藤原。

「ちつと来いよオ……」

と俺は藤原を引きずり。

「なア？ 俺はなア、これ以上クラスメイトといるとボロをだしそうなんだよなア……だから今日はご飯を作らないとっていつて帰るぞオ」

と言ったら藤原は意識が飛んだように呆然としてから。

「あ、うん。あたし……ボケてた……」

「よし、わかったならいい」

「というか、そんな視線だけで戦闘機が二機落とせそうな目で言われたら覚醒もするわ」

と藤原。どんな目だよ……

「ごめんごめん」

と藤原がクラスメイトの元に向かっていくのを眺める。

その後、藤原がすまなそうにクラスメイトになにかを言ってこちらに向かってくる。

で、戻ってきた藤原は。

「ふう……つかれるわ」

「あんたのせいだな！」

ということでもた買い物。

と、唐突に藤原が。

「ねえ……？」

「なんだ？」

いつになく真剣な藤原。

「シオって……」

と肩が震えている。

「シオって、なんであんなに胸が大きいのかな……！」

それを聞いた俺は藤原の肩に手を置きながら。

「大丈夫だ、俺達もいずれ——」

「香織さんに聞こうか……」

「やめろ、姉貴に聞いたら。『ふふふ、それはね、エロゲをやって

いればね——』となるのが目に見えている」

「なんだか、将来があ……」

「牛乳でも飲むか」

と俺が牛乳を手にとりながら言う。今日は安いな。

「タコ！ 真面目に考えてっ！」

「藤原……」

と俺は藤原の胸部を見る。

「なあ、自動車研究部の胸部の大きさを不等号であらわすと。涼

宮＞藤原Ⅱ横川＞俺。なんだよ」

「た、タコ……」

「じゃあ……帰るよ……」

フラフラ――

「タコお――あたしが悪かったあ――！――！」

そして、帰宅。

「ここが3・5で……」

と姉貴がPCに向かってなにか数式を解いていた。
まあ、大学生だからな。

「あ、瞳おかえり」

と振り返ったときに見えたPCの画面には計算のソフトなどというものはなく、一枚の写真が――

「なあ姉貴？」

「なに？」

「なんで人の写真を見て計算をしているのかなあ？」

「ふふふ、これはね、瞳がニーソを履いてたときに黄金比が出来ていたか調べていたのよ」

「黄金比？」

「ふふ、知らないの？」

なんだか、最近デビューした注目新人歌手のことを言うような口調で語ってほしくない気がするの俺だけか？

「ニーソとミニスカの間にできる『絶対領域』の黄金比はねえ、『ミニスカ・絶対領域・ニーソ』4・1・2・5なのよ」

と、得意げに言われても困る。

「で、だからどうした？」

大体想像できますが。

「だから、瞳がちゃんと黄金比を守れているか調べているのよ」
だと思った。

「で、どうなんですか？」

と藤原。

「残念ながら、スカートの面積が大きくて、素肌の部分が少ないのよ……」

悪かったな。

「だから瞳、月曜からは見えるか見えないくらいに短くしなさい！」
こんなことかと思った。

「ああ、やだ」

「なんか簡単にスルーされた!？」

「大体、そんなに短くしたら男子に迷惑だし」

「見えたっていいじゃない」

「男子みたいなこというな！」

「某ストパンの登場人物は普通にしてるじゃない」

「あれはズボンってことだからねっ！」

とんでもない誤解である。

「まったく、わがままなんだからあ……」

お前のほうがだ。

珍しく姉貴は引き下がったので安心して夕食の準備に入れる。

「タコ、今日はなんなの？」

と藤原。

「今日からはから揚げ」

「よしっ」

とガッツポーズをしながら出て行く藤原。なんなんだ？

だが、そんなこともすぐに忘れて目の前でジュージューいつてい
る油を見つめる。まだ、いい温度じゃないかな……

俺が油に集中していたところ、俺の部屋のほうから。

『おお、瞳のパソコンに三次元のエロ画像が――』

「んなもん入れてねえよ!!」

『そうよねえ、瞳は二次元専門だもんねえ』

「そうそう……ってなにを言わすんだあ

!!

てかなんでこんな大声で話しているんだ……

『よし、瞳のパソコンのＣドライブを見てみよう♪』

[illegible]

明日の弁当に詰め込むものも夕飯で決定して、平和な食卓になった。

なんだなにもないのかよ、と思う人もいるだろうが、これが日常だ。

てか、そうそう事件とかが起きてたら俺の身が持たん。

明日は土曜で休みだからゆっくり寝て……と。

*

で、ゆっくり寝ようと思っていても7時から8時には起きてしまった。

仕方ないのでうるさくならない程度に趣味をする。

しかし、そろそろハチロクもオーバーホールしないとな……

もうなにかといって10万キロ、かなりのハイチューンだしやっ
たほうがいいだろう。

けど資金はどうするか……

などと考えながらブログのコメント返信をする。

てか、よくこんなに働いて倒れないか、自分でもわからんよ。
まあ、いろいろな意味で病気な姉貴や、居候の藤原———
あ。

俺は藤原が寝ている部屋に向かって走る。
そして、藤原の部屋を開け放って。

「そういえば、今日は暑くなるんだよね……」

「そうそう、だからだよ」

「ねえ」

と藤原が真剣な顔から――

「錦糸卵ってどうやって作るの？」

――子供がなにかをねだるようにニコオと笑って言った。
冷やし中華、危うし。

その後、コンビニで朝ごはんをかうついでに冷やし中華の材料を買ってきた。

「まったく……コンビニの冷やし中華を買う準備をするなよ……」

「いいじゃない。で、どうするの？」

「まずは朝ごはんを食ってから考えような……」

俺は姉貴を起こしに姉貴の部屋に向かう。

「姉貴――」

とドアをノック。

……返答無し。

「姉貴」

反応無し。

「入るぞ」

入ってみると、姉貴がPCに向かってなにかをしていた。

画面には、美少女が重なり合っている絵が――

「ひひひひひひ、瞳！ なにかしらあ……？」

と冷や汗をかきながら言う姉貴。

……また、エロゲか

「……朝ごはんだよ」

「あ、ああそう！」

といってそそくさといってしまった後。俺は姉貴の部屋にあったある箱を見つけた。

『オンナノコ同士でっ えくすたしー』

と、ファンシーな絵で書いてあった。内容、百合エロゲー。

まあ、そんなのにいちいち気を使ったりしていたら先はないのでスルーする。

「タコ、なにしてたの？」

と藤原。

「いや、ちよっと荷物の整理を」

といったらイスに座っていた姉貴がビクウ！と体を震わせた。

「さ、さあ！早く食べましょう！」

と姉貴、わかりやすいぞ。

テレビを見ていると涼宮が予約しにいったFZ3SのCMが入っていた。

「シオ、予約できたのかなあ……」

と藤原。

「できたんじゃないか」

と俺が適当に言ったら。

「詩織ちゃん、FZに乗るかえるの？」

と姉貴。

「じゃないの、予約しに行ったし」

「じゃあ、楽しみだなあー」

「なんでですか？」

「だって、新車に乗せて貰えるかのしれないのよ」

「まあ、それは……」

楽しみじゃないといったら、嘘になる。

「あ、そういえば詩織ちゃん、今のFCはどうするの？」

「売るんじゃないか？」

「でも、大した値段にはならないんじゃない？」

「だろうな。けどパーツくらいは買えるだろ」

「そういえば、兄さんが『程度がいいFCがないかな』とか言っ

たよ」

兄さんとは、俺が兄貴と呼んでいる姉貴と俺の実の兄、横谷直登のことだ。

「なにに使うんだか」

「多分、兄さんが編集者をやってる雑誌にでも使うんじゃない？」

「なるほど、どんな感じで引き取ってもらうか訊いてみるか」

まだ涼宮がFCをどうするとも言っていないのに、自分でもお節介だと思いながら兄貴に電話する。

13話「FZ3S」(後書き)

少し間が開いてしまいすみませんでした、ちょっと忙しかったので……

とりあえずFZ3S編は当分続くと思います。

あと、ブログで頭文字Sの人気キャラ投票をしていますのでよろしければ。

<http://orotot.blog47.fc2.com/>

14話「海に……じゃなくて涼宮のFC」(前書き)

この世界では車関係の相場は10分の1です。
どういう仕組みかはツツコまないでください

14話「海に……じゃなくて涼宮のFC」

俺は携帯に登録してある兄貴の電話番号を探す。

兄貴の番号を見つけた俺はその番号に電話をする。

4コールほどで兄貴はでた。

『もしもし、瞳、どうした？』

「兄貴？ FCを探しているって訊いたんだけど……」

『ああ、涼宮だろ。本人から電話があってもう聞いたよ』

「あいつ、早えな……」

『まあ、どうするかは実物を見てからだな』

「まあ、よろしく頼むよ」

『ああ』

といって電話を切る兄貴。

リビングに戻ると姉貴と藤原が向かい合ってなにかを話し合っていた。

廊下からその声を窺うと。

『最近思っただけだね、色気が足りないのよ』

と姉貴。

『そういえば、タコが異性に裸や下着姿を見られたってことがありませんね』

と藤原。なぜ俺に限る。

『そうよ、でも滅多にそういうことになりにくい。ということでは海に行けば水着姿が見れる。これはベタだけど効果抜群よ』

と姉貴。とにかくアホだ。

俺はあきれてリビングに入る。

「あ、瞳」

と姉貴はほんの僅か、藤原に目配せした。
そしたら藤原が。

「タコ、今年は海に行こうよ。海水浴！」

「なんか悪巧みの予感がするのだが」

「そんなことないよ。ねえ、香織さん」

「そうよおく、そんなことは全然ないわよ」
嘘だ。

「まあ、いいか。で、どこの海にいくんだ？」

「……九十九里浜？」
と藤原。

「……西海岸？」
と姉貴。

「おい、現実的か非現実的、両極端すぎるぞ」

「……」

「黙るな」

「……北極？」

「遠いな！ ホッキョクグマと一緒に泳ぐのかっ！」

「旭川動物園もいいかもね」

「もう海水浴関係なくね!？」

「!？ いやいや、やっぱり——」

「やっぱり？」

「「九十九里浜」」

「お前らにしては一般的でビビった俺は……？」

「リ○バスをやってくるべき」

「なんかおかしくない!？」

「クラスの男子に上目遣いと媚声でなにかを奢ってもらうべき」

「あんたらは色々歪みすぎ!」

絶対自重とは違うことだった。

「しょうがない……」

と姉貴はため息をつきながら。

「たまにはギャルゲから離れてメ○ルギアでもやりましょうか？」

「「いつからゲームの話題になったの!？」」

急な話題転換すぎてついていけない。

しかもリト○スからメタル○アって……

「俺はエース○ンバットのほうがいいっ!」

「「なんで!？」」

二人から思いつきりツッコまれた。

「いや、だって俺は地上のものを爆弾で焼いたり、空中戦ドックファイトしたほうが楽しいし」

といったら二人はメタ○ギアで通信プレイをしながら。

「ああ、私達は瞳の航空支援に助けられるのね……」

「そうですね……というか、あまり女子でメタルギ○をやってるのはいませんよ……」

「細かいことは気にしない……」

そんな二人を見ていたらあることを思い出した。

「というか、もともとの話題はなんだったんだ？」

「瞳の濡れ場はいつあるのか、だっけ？」

「そんな話題だったの!？」

とりあえず整理をしよう。

俺が兄貴に電話しにいった。

それから戻るときに姉貴と藤原の会話を聞いた。

俺が乱入。

で、海水浴がうんたら。

で、俺が「一般的だな」とツツコンでリト○スに。

で、ゲームの話題。

ということとで話題を戻すことに。

「で、さっき兄貴に電話したんだけど……」

「沙織ちゃん、瞳の航空支援がまだね……」

「香織さん、一生来ないかと……」

「二人とも、現実に戻って来い」

「「しょうがないなあ……」」

「しょうがないのはお前らだろっ！」

「で、なに？」

と藤原。俺は続きを言おうと――

「ニーソのエロさに今更気付いたの？」

と姉貴。もう――

「姉貴は当分黙っておけ」

「ズーン……」

口に出して落ち込み始めた。

そして俺は藤原に電話での兄貴とのやり取りを伝えた。

「うーん、流石シオ、早いね……」

「流石って、涼宮ってそんなにやることは早いのか？」

「いや、マイペースだよ」

「なんなんだよ……」

「でも、いつも早いくらいでやるからね」

「ああ、なるほど」

マイペースでも遅い人と早い人がいるしな。

「で、FCを直登さんに譲るつもりなんだ」

「そうなんだろうな」

「でも、どうやって直登さんがFCを探してるって知ったのかな？」

と藤原は首をひねる。

「そういえば……」

ロリコンの匂いが……は流石にしないよ。

「いや、多分涼宮がFC乗りだからなにかあるかと思って聴いたんだと思うよ」

「そうだな」

そうと思いたい。

「ということなら、もう俺達には出番が無さそうだな」

「そうね」

さっぱり、切った。

「じゃ、なんか飲むか」

といって冷蔵庫に向かう。

飲み物を入れてある扉を開けて中身を確認する。コーラとオレンジジュースか……

「藤原、どっちがいい？」

と両手に持って藤原に見せながら訊く。

「コーラでいいや」

「はいはい」

二つのコップに入れてテーブルに戻るとちょうど携帯が着信を知らせてきた。

「Looking! The blitz loop this planet to search way. only my RAILGUN can shoot it 今すぐ——」

「しかし、着信が『only my railgun』ってすごいね……」

「一時期の雪○の警告音よりいいだろ」

といいながら発信者を見る。——工藤だ。

「もしもし？」

いまだきメールじゃなくて電話なんて、と思いながら返事を待つと。

『横谷、一緒にホテルに行かないか？』

携帯を耳から離して切る。通話時間、1秒。

「タコ、何だったの？」

と藤原が首をかしげていた。

「気にするな」

といったとき、また工藤から電話。

通話ボタンを押す。

そしてすぐ、というか瞬間的に切る。

「……なにしてんの？」

と怪訝な顔の藤原。

「気にするな」

また一工藤（変態）から電話。

『さっきのはなんなんだ！ 新種の逆ワン切りですか！？』

「うっせえんだよ。さもねエとテメエのふざけた幻想と肉体をぶち殺すぞオ？」

『なんか向きを操る能力者と幻想殺しの少年が混ざってますが！？』

「細かいことを気にするな。それより問題なのは――」

と俺は言葉を区切ると。

『……問題なのは……？』

「最近一禁書目録（イン○ックス）ネタが多いことだ」

『知るかあああああああああああああああ！！』

「ボケ担当の工藤にツッコまれた」

『心の中だけで言えっ！』

「お前……人の心を読んだな……？」

『いやいや、お前の思考が駄々漏れなだけだからな！』

「……チッ」

『なんで舌打ち！？』

「まあ、そういうわけでさよなら」

『切るな！ まだ俺の話題が始まってすらない！』

「チッ」

『お前最近性格悪くなってないか！？』

「気のせいだよ。うん、私はいつも通りっ！」

『なんか超可愛くあしらわれた！』

「とっとと用件言えよ」

『はいはい』

「……やっ和本題か」

『大体はあんたのせいだよね!?!』

「だーかーらー、とっととしろ」

『はいはい、ええと、なんだっけ?』

「死にたいか?」

『……涼宮から電話があったんだ、かなり深刻そうに……』

「ここで真面目な話題か? まあ、いいが」

『それでな……薫にもすがるような思いつて、こういうことを言うんだろうなあ……あ、とにかくそういう感じの声で』

「声で?」

『「ねえ、今FCを売ったらいくらかな?」って』

「そっちのことかああああああああああああああああああ!?!」

もうさっきまでの弱シリアスの空気がぶち壊れたよ!

『だって、さっき「真面目な話題」って言われたけど。決して「シリアスな話題」とは言いも訊かれもしなかったぞ』

「そうだけどさあ!」

ああ、もう工藤に負けた気がする!

「もう、工藤のバカあああああああああああああ!?!」

『え!?! 理不尽すぎ——』

プツツ、ツーツ。

俺が強引に切ったからまた電話が来るかと思ったが、用件が済んだようなので電話は来なかった。

「誰から?」

と藤原。

「工藤からだ」

「シオ関連?」

「そう」

「なにがあったの? なんかエキサイトしてたけど」
「どうでもいいことだ」

「シオのことも？」

その問いに、どう答えようか一瞬悩んだときに。

Looking! The blitz loop this
planet to search way. only my
RAILGUN can shoot it 今すぐ——」

「タコ、着信」

「わかってるよ」

発信者の名前が出るところには『涼宮詩織』と書いてあった。

「もしもし？」

『もしもし、タコ？』

「そうだ。てか、俺の携帯に他にやつが出たらどうする？」

『月並みの返事だよ』

と笑いながら本題を——

『ところでタコ』

「ん？」

『「AnOel Beats!」終わっちゃったね』

「そっち!？」

その前にいうことあるだろうっ！

『ああ、間違えた間違えた。あはは』

「まったく……で、なんだよ？」

わかってるが一応訊いてみた。

『ええと、私のFCっていくらぐらいになるかな？』

「どうだろ……よくて6万でとこかな……」

実際にFCの相場なんてそんなもんだ。

『えええ……私のFC、20Bを積んでるに……?』

「嘘付け!」

んな豪華なもの搭載してたらエンジンだけで5万は軽くオーバー
だろ。

『……そんなにFCって安いのか?』

「まあ、F Cに限らずロータリーエンジン搭載車は安くなりやすいんだ」

『酷い……』

「なんで酷いんだよ？」

『だって、タコのハチロクはまだ高いのにいいいいいいいいい！』

「仕方ないだろ！ あれは人気が高すぎるんだ！」

『F Cだって！ F Cだって！』

と藤原は意味がわからないまま覚醒したのだが、直後に電話は切れてしまった。

俺はツーツ、ツーツと音を出している携帯の通話を切る。

「なんかシオもエキサイトしてたね……」

と藤原。

「今日は周りに藤原しかまともな奴がいないのか……」

「ふふふ、今日はあたしがまとも王ね」

と胸を張っているが、普通は藤原みたいのが大多数を占めていると思うのであまり威張れないと思う。

「あたしがいつも変人だと思わないのが一番ね！」

また変なことを言い出した。

＊

瞳との電話を終えた涼宮は。

「うーうー、みんなはF Cのことをなんだと思ってるの……！」

決して瞳はF Cのことをバカにしているわけではない、真実を述べただけだ。

「そもそも、私は出番がなくて速さなんて不明瞭だし、空気だし。でも、本当は速いんだから！」

とぶつぶつ言っている。その周りには普段ではまったく感じない

真っ黒いオーラが――

「こうなったら、FZを買ってどんどん速くなるしかない！」
と一人で決断する涼宮だった。

14話「海に……じゃなくて涼宮のFC」(後書き)

涼宮のキャラが崩れてきていますが、おそらく大丈夫です。

次回、ついにFZ3S登場。

15話「ポテンシャル」

あれから涼宮にメールをしても返事はなかった。

「シオ、へそを曲げちゃったかな」

とプリンを食べながら藤原。

「かもな……あと、今食べると太るぞ？」

「……ッ!?　だ、大丈夫。あたしは食べても太らないから!」

「ああ、そうですか……」

別に藤原が太ろうと俺には関係ないし。

「……」

と藤原。

「なんだよ、気味が悪いな」

「だってさあ……」

と俺の手元を見て。

「プリンとシュークリームを二つ食べてるタコに言われたくないよ!」

「うぐっ……いいもん、俺は太らないから!」

「うぬぬ……!」

と二人で睨みあう。

「タコだって!　いずれはぶくぶくと太って後で後悔するのよ!」

「なにを!　俺だって、俺だって甘いものを食べたいんだよ!」

「タコ、いつか言おうと思っていたんだけど、基本は口調は男なくせに微妙に女口調が混じったり行動が可愛かったりするのになに!」

「ぬぬぬ、そんなことはない!　ないもん!」

「今だってなんか語尾が可愛いじゃん!　いつもクラスで女口調をしているから馴染んできたんじゃない?」

「そんなことはない!　あってたまるか!」

「……そして、タコはツンデレの道へ」

「いかねえよ!」

「だからモテないのよ」

「モテなくていいから!」

「大丈夫、タコは最近女子からもモテてるから」

「それも怖くね!？」

まさかの百合!？

「大丈夫だよ」

「なにが!？」

なんか学校行くのが怖くなってきたんですけど……!

「だって、香織さんの妹って話はみんな知ってるし、香織さんは……ね？」

「『ね?』ってなんだよ『ね?』って!!」

「あんな性格よ」

「……確かに」

あの姉貴なら『私の妹に手を出したら次の日の太陽は見れないと思いなさい』と言いかねないからなあ。

「というわけで、大丈夫よ」

「ああ……」

釈然としないが。

＊

と、バカなことをしたりしていたらあっという間に涼宮のFZの納車日。

「いやあー、昨日は寝れなかったんだよ」

といつもよりテンション高めの涼宮。

「じゃあ、今日の10時に榛名山にいくから。みんなも来てね☆」

なんだか、いつもの涼宮じゃない……

と考えていたら周りから音符が飛び出してきたきそうな感じのオーラ

で帰っていった。

「シオ、テンション高いねー……」
と藤原。

「sonだけうれしいってことだろ」
と冷静に工藤。

そして、午後10時。

俺と藤原が榛名山頂上にいくと工藤と斉藤が着いていた。

「涼宮は？」

と俺が訊くと。

「あいつはまだ着てねえぞ」

と工藤。

「まあ、主役が最後に来るってところかな」
と斉藤。

まあ、なんかの法則だとそうなんだろうな。

それから少し話していると麓から――

「ん？ ローターエンジンの音だ」

と俺が言ったところ、工藤が引き継いで。

「しかもレアな20Bってとこかな」

「前から思ってたけど、よくエンジン音だけでわかるよね……」
と藤原。

「もはや、こいつらの頭の中は車の知識だらけなんだろうな」
と斉藤。

俺の頭は知識と経験の塊――のはず。

＊

数分後、白いFDに似た、FZが来た。

「ふふふふふふ」

普通ならどこか黒いものを感じる笑い方だが、今は綺麗な笑い方に見える。

「ごめんね。ガソリンを入れてきたりとかしたから」

「別にいいよ」

と藤原。

「早速走る？」

と涼宮。

「いや、その前に色々みたいんだけど」

と俺が言うつと。

「いいよ」

と快く了解してくれた。

やはり、最初に見るのはエンジン。

工藤と覗きこむ。

「よくよく考えれば、3ローター系のエンジンは初めてだな」

「そうだな」

2?で3?分の排気量を出せる20Bエンジンを最新技術でモデファイ。それをFZに搭載している。

「今更だが、ボディはオールアルミなんだな」

と工藤がボディを叩きながら言う。

「しかも、ルーフはカーボンだよ」

と俺もルーフをコンコンとノックのように叩きながら言う。

「車内はどうなんだろ？」

と俺が内装を覗くと藤原が運転席にいた。

「基本的にはFDと同じだけど、FDよりは乗りやすいね」

「どっちみち、レカロシートとかに換えたら同じだろ」

と工藤。

「うっ……けど、ノーマルでも結構バケットシートみたいだよ」

そういわれて助手席を見てみるとドライバーを包み込むような形

のシート——すなわちバケットシートのようになっていた。

「まあ、実際にはどういう感じなのかは乗ってみないとわからないだろうしな」

と言ったら後ろから涼宮が。

「タコ、なんなら乗ってもいいよ」

「え、いいの？」

「タコなら平気だもん」

と満面の笑みで言われた。

「はい」

と涼宮からキーを渡された。

俺はFZの運転席に座ってキーをひねる。

20Bが始動する。

「じゃ、ぶつけないように頑張ってくるね」

＊

20Bエンジンの音を響かせながら加速していくFZ。

（思ったよりトルクがある？ まあ、実質は3リッターと同じだもんな）

基本的にロータリーエンジンは通常のレシプロエンジンと構造が違うため、排気量では比較ができないが、ロータリーの総排気量×1.5で求められるのだ。
20Bエンジンはほぼ2リッター、それに1.5なので、ほぼ3リッターの排気量があると同じなのだ。

（それにツインターボだからな。軽い80スープラのようなもんか？）

と考えながら第一コーナーをクリアする瞳。

（やっぱり、FDよりアンダー気味か。でも、このくらいじゃない

と踏めないか)

基本的にはハイパワーな車はアンダーステア気味⇨曲がりにくいように作られている。

そうでないと安心して踏めないのが主な原因だ。

だが、歴代RX-7はそこそこパワーもあり、なおかつ曲がる車⇨オーバーステアだったのだ、

だから、瞳が「FDよりアンダー気味」と評価しても通常よりは曲がるようになっていたのだ。

ヘアピンの旋回性能、ストレートの加速を経て、瞳は大体のことをつかめてきていた。

(思ったよりもポテンシャルはありそうだな。曲がるし、トラクションのかかりも思ったよりいい)

日本車は基本的に量産車なので面倒なところは省かれている。だが、FZはミッションのトランスアクスル化、つまりは通常エンジンとくっついているミッションを切り離してリアのデフと組み合わせているのだ。

当然、ある程度の重量物のミッションを後ろに置くことにより、後輪を押し付ける力(重量)が増す、つまりトラクションがかかるのだ。

だが、それも全て。

(なんてすごいボディ……)

このFZを特筆するとしたら、オールアルミボディだろう。軽量で、今の技術なら強度もだせる。

(しっかりと造ってあるから剛性もしっかりある。FDなんかギリギリのレベルだったのに)

とそこまで考えていた瞳は顔を曇らせる。

(でも、音がなあ……)

瞳が感じるには、ノーマルのFZのエキゾーストノートは湿ったような、あんまりいい音でないのだ。
(ここは改善の余地があるな)

と思っていたらもうゴールである。

＊

俺が頂上に戻って涼宮にFZを返すと。

「どうだった？」

と訊かれた。まあ、当然だろう。

「思ったよりはよかったよ。早く足回りのパーツを換えてセッティングを出したいね」

「そう？ まあ、ノーマルで乗れるうちはノーマルで乗るよ」

「けど、FDの進化形というより、新型RX-7といった感じかな。ノーマルは知らないけど藤原のFDとは違う感じがするよ」

といったら、今まで黙っていた工藤が。

「まあ、エンジンは3ローターだし、ボディもオールアルミだからな。形は同じでも性能は全然違うだろうな」

「ま、ここは部長（自称）、さらに現役FD乗りのあたしが乗ればすぐにわかるわよ」

と藤原がいい。走り去っていった。

藤原が戻ってくるまでみんなに俺が感じた感想を言う。

「パワーはやっぱりあるね。旋回性能もいいし。けど、足回りがちょっと柔らかいのと、個人的には排気音が残念なの」

「まあ、音はマフラーとかで変えられるからな。総合的には？」
と工藤。

「総合的にはいいね。若干パワーのわりに安定性が少ない気がするけど峠なら平気でしょ」

「きっと、1，2ヶ月したら湾岸で700馬力FZが最高速とかしてんだろな」

と斉藤。

「その通りだろうな」

と答えておく。

「……もうサオならスケートリンク前ストレートを抜けたかな」と涼宮。

「だろうな……」

＊

そんな話をされている藤原は、スケートリンク前を抜けてそこから数えて二つ目のヘアピンに進入していた。

「すごい性能……下手なチューンドFDより速いかも」

と、FZ3Sに驚愕しているところだった。

（これなら、シオも一気に自動車研究部のトップ争いに加わるかも）と評価しつつ走る。

＊

戻ってきた藤原は珍しく渋い顔をしていた。

「どうしたの、乗り切れなかった？」

と涼宮が聞くと。

「いいや、思ったよりも速くて驚いているの」

「ああ、なるほど、俺も結構驚いたけどな」

と俺は言いつつFZを見る。

「FZは、チューニングのいい素材になりそうだな」

「そうだな」

と工藤が応じてくれた。なんか今日は出番多いな。

ああそうか、工藤はこういうときじゃないと出番がないのか……

可哀想に。

＊

それから走りこみや他愛のない雑談をしていた。内容は本当にどうでもいい内輪ネタなので割愛。

と、麓から車の音が。

「ん？ この時間帯に登ってくるのは珍しいな」

と斉藤。そう、平日の夜に来るのは珍しい。いつもは土日なのに。

「横谷、この音、V6だな」

と工藤。

「だね。V6のターボかな。となるとR35GT-Rとかかな」
と思っていた。

数分後、俺達の前に現れたマシンは。

「Z32？」

と藤原。確かにニッサン、フェアレディZのZ32だ。

……これはバトルフラグか？

降りてきたドライバーは――

「……貴女誰？」

と俺はツッコむ。漢字を見ればわかるが女性。というか俺達と同じ年に見える。

「確か、隣のさらに隣のクラスにいなかったけ？」

と涼宮。記憶力いいな。

そして、改めてZ32から降りてきたドライバーを見る――

15話「ポテンシャル」(後書き)

なんか中途半端ですが、ここまでで。

みんなが好きなZ32ですよ！(だからどうした)

とりあえずライバルの設定を考えるので少くし更新が遅れるかもしれません。

……ストーリーが単純だなどか言わないでくださいw

16話「どんなチューンするの？」

改めて見ても普通の女子にしかみえんのだが……

見た目はセミロングの髪をツインテールのように結んだ一応美女。
女。

相手は俺がジーっと見ていたら恥ずかしそうにうつむいてしまった。

「タコ、あの娘は隣の隣のクラスのおおばやしななみ
大林春実さんだよ」
と藤原。

「よく知ってるなあ」

「ってシオが」

「涼宮が情報源かよっ！」

と言いつけていたら。

「ん？ VTECの音だ」

「誰だろ？」

………誰か忘れていたような……？

記憶力がいい読者なら気付いたかもしれないがな。ハハハ

数分後、頂上に来たのはFD2 シビック。

「なんでみんなあたしのことを忘れてるの――――」

――！！

ドライバーは横川春奈。我が自動車研究部のメンバーである。

読者の皆さん。前回を読み直してください、一人ほど空気を超えて存在ごと消えていますか？

ああ、『忘れてた』なんて言えないよなあ……

他の自動車研究部の面々をそう思ってるらしく、俺にアイコンタ

クトで『フオローしろ』と言っている。

「何故だ？」

と小声で訊くと斉藤が。

「（横つながりだ）」

といわれてしまった。まあ、仕方ないか……

「どうしたの春奈。遅かったね」

「絶対忘れてたよねっ！」

「春奈。落ちて着いて」

と手を出す。

「いやいや、瞳が普通に乙女を演じてる時点でおかしいよ。誤魔化してる感がバリバリ出てるよ!!」

「オマエ、自分の遅れのツケを、自動車研究部に回してるんじゃないか。ええ。なんだよ、忘れてたってよオ。俺達はな、いくら待ってもこないから、いずれくると思って頂上で待っていたんだよ」

おお、俺説教できるんじゃない？

「なのに、オマエはどうなんだよ？　それで来たと思ったら、『忘れてた』だと？　ふざけるんじゃないやねえよ……」

と俺がノリノリになってきたところで。

「いやいや、そんな某上条さん並の説教されたって困るし」

「チツ、乗ってきたのに」

「タコっ！」

と藤原が横から。

「禁○目録ネタは禁止って決めたでしょ！」

「すっかり忘れてたあああああああああああああああああああああああ
あああああああ！」

「今はそっじゃないでしょおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

なんだが、横川の怒りメーターがレッドゾーンを吹っ切って一回
 転しそうだったので自動車研究部全員で土下座。

「「「本気で忘れててすみませんでしたっ!!」」「」」

……その後、なんとか解決しました。なにがあったかは、ご想像にお任せします。

「で、あの子はなに？」

「さあ」

いったいなにをしに来たんだ？

——大林視点——

大林の目的は目の前で騒いでいる自動車研究部にバトルを挑むことだった。

自分でもよくできるなと思うのだが、バカ正直にエースの瞳に挑もうとはしない。

なので、自分と張り合えそうなのを雰囲気で選ぶつもりだったのだ。

（で、ど、どうしよう……）

無駄にどいつもこいつも速そうだったが。

（FZに乗ってる人が張り合えそう）

という結論に至って。

——瞳視点——

と、相手——大林さんはなにかを決めた様子で、俺ではなく。

「あの……」

と涼宮のほうを見て。

「私とバトルをしてくだはいい!!」

囁んだ……

一方涼宮は。

「……へ？」

まさかの、涼宮に申し込みだと……？

「なんで、私に……？」

「なんででもです！」

「……いいよ」

ということで涼宮VS大林が決定した。

＊

「じゃあ、バトルは来週の土曜で」

と斉藤が相手と話をつけている。

その間にも、俺達は。

「涼宮、どうするんだ？」

と訊く。

「なにを？」

と可愛らしく首をかしげて訊きかえされた。

「いや、だってお前のFZはノーマルだろ。あっちはいくら古いZ32とはいえ、チューニングしてあるんだぞ」

「問題ないって」

「そうかぁ……？」

ものすごい不安です。

で、次の日の部室にて。

「で、シオのFZをどこからイジるかよ」

と藤原がホワイトボードに車の絵を描いて説明している。

「足回りじゃない。パワーはそこそこあるし」

「いや、エキゾースト関係よ」

「なんでだ？」

と斉藤。

「単に最初に発売されたのがエキゾーストだからよ」

「いやいや、このシヨップにはサスも売ってるよ」

と横川が言ったら――――

「まずは、ホイール、マフラー、サスが基本よねえ？」
おい。

「でも、涼宮。金はあるのか？」

と訊いたら涼宮は自分の身体を見てから。

「多分大丈夫よ」

「絶対汚い金だね!？」

「ちよっと脂ぎったおじさんからもらってるだけよ」

「それダメでしょ!？」

「冗談よ。まったくタコったら」

ふふふ、と笑っている。……ウソだと信じよう。

「そういえば、FCはどうするんだ？」

なんとなく気になっている。

「大丈夫よ、直登さんが5万で買い取ってくれるって」

「あれ？ もっと高くないか、とかって言わなかったの？」

こいつのことだから7万程度にならないとダメとかいいそうだと
思ったが。

「それがね……どこで査定しても4万が限界だったの。だから5万
で直登さんに引き取ってもらったほうがいいからあ」

いつもの癒しボイスで言う涼宮。

まあ、本人がいいならいいか。

とにかくにも、来週の土曜日、バトルなのである。

「まあ、パワーはいいとして、問題は足回りだよな」と俺が言ったら。

「いや、ここはあえてタービン交換で――」
と藤原。

「やっぱりダンパーだけでも換えたいね」
強引に遮って藤原はスルーする。

「あたしの意見スルー!？」

「あのねえ、峠を走るんだからタービンはいいだら……」

「タコ、世界にはパワー命の人がいるんだよ」

「だったら峠で600馬力とか出していいのかよ……」

「……首都高なら？」

「「走るのは峠だ(よ)!!」」

と涼宮と一緒にツツコム。

「大体、FRで600馬力も出すならボディ、足回りとかをやんないと真っ直ぐも走るかわからないぞ」

と工藤の的確なツツコミ。

「まあ、GT-Rやランエボ、インプならそれなりでもいけるだろうけど。まあ、インプで600馬力は難しいけど」

と斉藤。

「そもそも、600馬力のFRを峠で踏むって発想もないよね」と横川。

みんなからツツコミを受けてまんま、『ズーン』というSEが出てきそうな様子で凹んでいる藤原。

俺が藤原の後を引き継いでホワイトボードに書き込む。

「じゃあ、涼宮のFZはサスからイジればいいな?」

「そうだね。あとはホイールも換えたいなあ」

「FZならRAYSってとこのCE28がいいかな」

「工藤……俺はわかるけど他の人はわかってない顔をしてるよ……」

「そういうホイールがあるんだよ。……多分」

多分ってなんだ、多分って！

ちなみに、そういうホイールは実在しています。

その後、涼宮のFZは、ダンパーとホイール、タイヤを交換することになった。

家に帰るとき。

「そういえば涼宮」

「なに？」

「いつ兄貴にFCを渡すんだ？」

「今日の」

「唐突だなおい！」

いきなりすぎるだろ。

「で、タコの家で引き渡すの」

「しかも俺の家でかっ！？」

もう唐突を超えたよ！

「大丈夫大丈夫、少し上がっていただけだから」

「大丈夫……といえば大丈夫だけど……」

「早く言おうと思ってたんだけど、忘れたの」

と言われた。……若干天然が入ってるな。

＊

で、俺の家の前。

「兄貴……ちょっと大げさじゃない」

「だからといって歩いてくるには遠いだろ」
何故、兄貴の横谷直登とこんな話をしているかといえは。

目の前に駐車してあるデカイ車載用のトラックが俺の家にあることについてだ。

「まあ、仕方ないよ」
と藤原。

「てか、兄貴。大型車の免許持ってたんだ……」
「車の運転のためならな。それに持っておくといいいことはあるしな。今回みたいに」

「なんだか兄貴がいうと説得力がありすぎる。」
「ま、あとはFCが来るのを待つだけだ」

と兄貴が言ってから数分後。

「あ、着たみたい」

と俺が言うと、それを見計らったように涼宮の白いFCが表れた。

俺らの前に止まると。

「すみません、最後なんで洗ってきたんで」

「いいよ。じゃあ載せるよ」

「はい」

といった後、涼宮はトラックの真後ろにFCを持っていく涼宮。

その後、兄貴の指示で車を降りた涼宮。

無人となったFCにワイヤーを引っ掛けて車を手際よく載せていく兄貴。

「じゃあ、これが約束の5万円」
と涼宮に渡す。

「ありがとうございます」

「じゃ、大事に乗るからな」

「ねえ、兄貴？」

「なんだ？」

「そのFC、どんなことに使うの？」

と訊いたら、兄貴は。

「最高速仕様だ。そのうち雑誌に載せるから、読んでくれよ」といって兄貴は帰っていった。

「じゃ、涼宮。ウチに上がってく？」

「いいの？」

「大丈夫だよ。どうせ、うるさいのが二人いるから一人増えたところで変わらないよ」

ということでしたいま涼宮がいるのだが――

「さあ、FZの所有者がいるからチューニングの内容を話し合うわよ」

と藤原。

「「「おー」」」

と棒読みの俺ら。

「じゃあ、まずはタービン――」

「サスペンションだな」

「「うんうん」」

「なんであたしの意見は聞かないでタコのは聞くのよ!？」

「いや、また『タービン交換をしよう!』って言いそうだったから「……ッ!」

「じゃあ、まずは足回りってことで」

と、男性陣の意見も入れたつもりで決定。

数日後。俺の家のガレージで届いたパーツ類を眺めながら。

「うん、やっぱりサスからだね」

「お前、タービンタービン言ってたくせに……」

「細かいことは気にしちゃダメよ」

「いやいや、タービンとサスだと全然——」

と俺と藤原がヒートアップする前に涼宮が。

「まあまあ、その前に誰がパーツを交換するの？」

「俺か……」

そういうことができるのは俺しかないからな。

「いや、横谷。俺に任せろっ！」

と工藤。

「お前にやらせるとフロントとリアを間違えそうだ」

「ふっ、こんな時のためにちゃんと勉強していたんだぞ」

「じゃ、任せるよ」

といって工藤に任せて俺達は作業を眺めることに。

タイヤやブレーキ類などをテキパキ外してそしてサス。

と、工藤が少し手を止める。

「なあ、横谷——」

「なあに？」

「ここにはどのスパナを使うんだ？」

「「「「はあ……」」」」」

「みんな一斉にため息はやめてくれる!!」

「やっぱ工藤だな……」

とあきれ顔で斉藤。

「工藤だもん……」

こちらは諦めきった顔で横川。

仕方ないので使う工具や、使い方とかを教えた。

それからかなりの時間を使って、サスとマフラーを変えた。

「こ、これで終了か!？」

と工藤。

「そうそう」

結局一晩置いて、作業時間なら5時間程度かかった。

「早速慣らしを含めた走行か……」

と疲れた顔で工藤。

「よし、工藤を少し休ませたら慣らし走行だ」

といって俺達は工藤を雑巾のように引きずって一旦家の中に撤退する。

今日の夜からテスト走行開始だ。

16話「どんなチェーンするの？」（後書き）

ブログにうpしましたが、瞳の絵を描いてて遅くなってしまいました。

しかも内容……もうすみません。

夏休みなので次回は早めに投稿しようと思っています。

17話「FZを仕上げる」

その日は、学校が短縮で早く帰れてガレージに戻っている。

「あー、早く夜にならないかなあ……」
と藤原。

そして、唐突だが夜。

「よし、ドライバーは涼宮だ」

「うん。で、なにに注意すればいいの？」

「特にないけど、動き方とかをよく見てきて、それでセットアップしていくから。」

「わかった」

といって出て行った。

さて、疲れてグッタリしてる工藤でも覚醒させるか。

「工藤、起きて」

「……横谷、流石にお前の願いでも……」

「じゃあ、涼宮が戻ってきたらちゃんと起きて作業してよ」

「はーい……」

心配だな……

「ちゃんとやってくれたら、いいコトしてあげる」

「……古すぎたな……いくらこいつでも引っこからないか。」

「オーケー、いつでもいいぜ！」

と工藤が元気ハツラツになっている。……単純すぎるな。

数十分後、涼宮が戻ってきた。

「どうだった？」

「いい感じだよ」

と笑顔で降りてくる涼宮。

「でも、もうちょっと安定性が欲しい感じが……」

「よし、工藤」

「オーケー、オーケー」

と元気ハツラツな工藤。

それからまたしばらくたって。

「よし……横谷。できたぞ」

と疲労困憊の工藤。

「『いいコト』って!？」

と迫ってくる。……工藤のくせに覚えていたか。

「ほら」

とスポーツドリンクを投げると。

「……こんだけ？」

「こんだけだよ。どうして？」

「いや、てつきり夜の関係に」

「……じゃあ、頑張ってるね」

「見捨てるなああああああああああああ!！」

なんか叫んでいるがスルーする。

「じゃあ、涼宮。また走ってきて」

といってドアを閉める。

涼宮は頷いてから峠道へ飛び出していった。

「さて……」

俺もハチロクの中で休憩――

「横谷」

と工藤が背中に抱きついてきた……気持ち悪い以前に暑い……

俺が周りを見渡すと藤原がアワワといった感じで立っていた。

「工藤くん？」

「なんだい？」

俺は全身の力をこめて。

「暑いし気持ち悪いんだよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおお！！」

「ぎゃああああああああああああああああ！！」

数分後。

「タコの怒りに触れた者は、このようになるんでしょう……」
と藤原が占い師のように言っている。

藤原が見つめる先には屍になった工藤がいる——と表現してよい
のかわからん。

「まあ、工藤の自業自得だな……」
と斉藤。

「なんかタコがシ○ナに見える……」
と横川。それは前々から言われる。

「はあはあ……トドメを刺す……」
と俺が近づくも。

「もうやめてっ！ 工藤のライフは0よ！」
と藤原。

「ふふ、こいつの生命力は台所にいる黒くて触角の生えた虫並みさ」
と俺が工藤のトドメを刺す。

「……灰になってる」
と横川。

「まあ、工藤だからそのうち復活するよ……」

と藤原。

＊

それから十数分後、涼宮が戻ってきた。

「ふう……ブレーキがフェード現象を起こし始めちゃったあ」と言ってから、一工藤（灰）を見て。

「激しいことがあったみたいね……」
と言った。

ちなみに、フェード現象というのは、ブレーキ——今の車はタイヤと一緒にホイールの中でブレーキディスクというパーツを回して、それをブレーキパッドで押さえて減速させている。自転車のブレーキを思い浮かべれば分かりやすいと思う——のブレーキパッドなどが過激な走行で一消耗（熱ダレ）を起こしてブレーキが利きにくくなる現象だ。

まあ、ようはブレーキのパーツが消耗してブレーキが利きにくくなる現象だ。

「あゝ、純正品ノーマルだからね」

と俺は涼宮に言いつつFZの足回りを見る。

ブレーキ周りから煙が上がっている。相当消耗してるな……

「これだと……どっかから強化チューニングパーツを探したほうがいいね。バトル中に『フェード現象で負けました』なんて情けないし」

ということとで走りこみを早く切り上げて、ブレーキパッドを探す。

それから二日後。

「これがパッド本体。こっちがブレーキオイル、そして――」

と我が家のガレージ内の作業台にパーツを乗せていく。

「これでブレーキを含めた足回りの性能は上がるよ」

発売と同時にメーカー直系のチューニングパーツメーカーが発売してくれてたおかげですぐに入手できた。

「さて、工藤」

「……またすか？」

「またつすよ」

「……だってなあ、瞳さんに騙されたしなあ……」

うわあ俺のことを瞳たんって……ぶん殴りたいけど我慢……ッ。

「ああ、そういえば今日、朝ごはんまで食べたウィンナーが残ってるんだった」

若干棒読みだが、問題は無いはず。

「誰かにあーんしたいなあ」

「さて、とつとつパーツ交換するかあ！」

と工藤が覚醒。……こいつの将来が不安になってきた。

三時間後。朝から初めてもう昼間、まだブレーキオイルしか交換し終わってない。

「横谷、ワインナーを食べたいんだが」

「いやー、あと一つなんだよ」

「くれ！」

俺はとある人物に目配せをしながらフォークを刺したウィンナーを工藤の口に持っていく。

だが、工藤は予想しなかったであろう。

なにかが横切った後、フォークの先端にあつたウィンナーは消えていた。

と、今までで一番長く叫んだ工藤。

叫びながら呼んだ名前から分かるとおり、横取りしたのは藤原だ
「何故だああああああああ！！　なんで最後のウィンナーwi
th横谷のあーんを横取りするんだああああああああ！！」

口をモグモグさせてウィンナーを食べていた藤原が飲み込んでか

「いや、美味しそうだったからね、つい」

「『つい』で俺の希望は消えたのかあああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
ああああ！！！！！！」

今回の工藤はよく叫びます。

「また工藤が灰になつたる……」

と涼宮。

「今回は燃え尽きたみたいだな」と斉藤。

「見てるとすっごい憐れに見えるよ……」

と横川。

「まあ、動けないんじや仕方ないよ。お昼ごはん作ったから食べよ」と俺が工藤以外のみんなを促したら。

「ってことは横谷が作ったのか!？」

「まあ、そうだよ」

[illegible]

「工藤……」

と、悲しそうなものを見る藤原。

その理由は、半分は姉貴が作ったからだ。ウソは言っていないよ。だって姉貴だって『横谷』だもん。

ちなみに、工藤が好きなのを姉貴に作らせたので、ほとんど姉貴

が作ったのを食べた工藤だった。

「あー、美味しかったあ」

「だねえ」

お前が食ったのはほとんど姉貴が作ったのだけど。

ということとで午後の部。

「よし、後はブレーキパッドか……工藤、頼んだよ」

「了解!!」

買収しやすい奴だ。

それから一時間後。

「これでブレーキは完璧だ！　ハハハッ」

工藤が若干ランナーズハイになってきているが、一応やることは終わったのでとりあえず。

「お疲れ」

と工藤の肩に手を置く。

「ふふっ、横谷に慰められて、もう俺は……」

ガクッ、と工藤のなにかが抜けたようだ。

「……工藤は、犠牲になったのよ」

と藤原。

「うん、大事にするわ……」

と涼宮。

今の工藤は一見すると、屍に見える。

＊

それからみんな（どこかに旅立った工藤は抜いて）他愛のない話をしていた。ようは駄弁っていたただけだね。

そして晩ごはんを食べてテスト走行に行く。

あと3日しか有余はない。

「じゃあ、これで問題はないと思うから、行ってきた」と言ったら涼宮は頷いてマシンを発進させる。

第一コーナーにマシンが吸い込まれるように侵入していった。

それを見た後、俺は軽く休憩を取るためにハチロクの中で座っていた。

少ししたら藤原がハチロクの運転席側のウィンドウを叩いたので、開く。

「どうした？」

「いや、タコがお疲れ気味だったから」

「で？」

「はい」

と藤原は俺にリングジュースを渡してきた。

「タコは工藤の次に働いてるんだから、休んでよ」

「大丈夫だよ。そこまで動いてないから」

「タコはか弱い女の子なんだから」

「……待て、俺のどこがか弱く見えるんだ？」

と訊いたら、藤原は笑顔で硬直して。

「ええと……多分どっかあ————————！」

といいながら自分のFDに戻ってしまった。

……俺のどこがか弱く見えるんだよ……まったく。

それから二、三十分後、涼宮が戻ってきた。

「どう？　なんか気に入らないところはある？」

「特にないよ。扱いやすいし」

「じゃあ、これからいくつかのセッティングを試してみるよ」

と、俺は涼宮を降ろしてからFZをジャッキアップする。

「て、ちょっと待ってよ！」

と藤原に止められる。

「なんでタコが作業するの！？」

「そりゃ、工藤がノックダウンしてるし」

「でも……」

多分、藤原は俺がデモカーのS2000をイジってるときに性転換したから、そこを気にしているのだろう。

だが。

「俺はな、あんなにクタクタになってる工藤に頼むほど鬼畜じゃないよ。まあ、手遅れ間はあるけどね」

「じゃあ、斉藤！」

「俺がやれと？」

と斉藤。

「そうよ、女の子に任せて楽しようとしてはダメ」

「了解しました」

と若干呆れたように肩をすくめてから、俺に近づいてきて。

「なにをすればいい？」

「リアのダンパーのセッティングを変える。それを手伝って」
「わかった」

それか十数分後、セッティングを変えたFZで涼宮が出て行った。
それからいくつかのセッティングを試して、一番よかったのを本
番に使うのだ。

そして、涼宮が。

「今のがよかったよ」

と、若干疲れている俺達に言ってきた。

「わかった、今のセッティングで気に入らないところは？」

足回りのセッティングでもかなりの組み合わせがある。今回はサ
スペンションのパーツ、ダンパーの減衰力の調整をしている。

これによって、車は安定性重視か、旋回性重視か決まってくる。
それを、涼宮と話し合って変えていく。

少ない時間でも、いいマシンを仕上げたい。
それだけが、今の俺の願い。

そして、バトル当日。

「ホントに、みんなありがと」

と涼宮がバトル後のようなことを言ってきた。

「いいんだよ。シオがバトルで勝てば」

と横川。

「そうそう、あたし達が本気で仕上げたマシンだから負けないよ」
と藤原。

「きつと、みんなが仕上げたマシンだから安心して踏めるんだよ」
と涼宮が言った直後。

「V6の音だ」
と工藤。

「来たみたいだね」
と俺が言う。

FZとZ32の対決が始まる――

17話「FZを仕上げる」(後書き)

はい、次回からやっとバトルです。もう一週間以上待たせたのにgdgd小説ですみません。

8月中にも次の章(FZ編の次)に入りたいです……

18話「激突、Z32対FZ」

登ってきたZ32を見て、詳細はわからないが見た目で相手のチューニング度を測ってみる。

見た目、足回りを変えて、ブレーキ回りも強化されている、エンジンはブーストアップにECUでとか。

ボンネットは変えてある。もしかしたらFRPやカーボンの軽量素材かもしれない。

後はレカロのフルバケットシート、スポーツハンドル、マフラー、ホイールなどのお決まりだけだ。

「じゃあ、始めましょうか」

と涼宮が言って、ドライバー二人で話している。

その間にも失礼してZ32^{マシン}を見る。

ボンネットには大きいダクト、しかもカーボン製。

ホイールも軽そうだし、エアロも軽そうなパーツで出来ていた。

「軽量化重視みたいだな」

と工藤。

「にしても、ランエボに乗ってる俺が言うのもなんだけど、でけえダクトだな」

とボンネットのダクトを見ている。

「まあ、Z32はエンジンルームが狭くて熱が抜けにくいからね」

「これで車重は1390kgってどこか」

と工藤が言っている。

「って、横谷。なにを見てるんだ？」

「このZ32、2シーターだよ」

「なに？」

驚くことにこのZ32は2シーター仕様の^{ホイールベース}前輪と後輪の間が短い

タイプだった。

「これだと、FZとはパワーでは若干上、重量でも若干上、操縦性は悪め。ってとこだね」

「思ったより旋回性能はありそうだな」

「しかも、これをうまく仕上げれば峠ならかなりいけるかも、なにせFDよりちょっと大きいくらいだしね」

「予想より厄介そうだな」

と工藤は言うが、それでも余裕は消えていない。

「まあ、涼宮には伝えておこう」

そして、バトルが始まる前に。

「涼宮ちよっと——」

と涼宮に、さっき気付いたことを教えた。

「わかった……ありがとね」

と頬笑みながら言う涼宮。

俺が離れると、カウントが開始された。

「5，4，3，2，1、GO!!」

合図とともに二台のマシンが峠に飛び出していく。

先に前に出たのはわずかながらパワー差があるZ32。

「あー、やっぱり先頭取られちゃったね」

と藤原。

「仕方ないよ。パワーならZ32あっちだもん」
と横川。

＊

「でも、コーナーではFZが有利なはず」と瞳。

第一コーナーでは互角。

だが、第二コーナーからヘアピンにかけてはFZが余裕を見せる。

（ちょっとでも油断したら、一気に抜かれる……ッ）

と大林。

大林も下調べで自動車研究部と涼宮のことを調べていた。そして、今の速さから見ると。

（なんて……実力）

若干ヘタレな発想ながら弱いやつから倒して上に挑戦しようと思っていた大林からすれば、最初から中ボスに戦いを挑んでしまったような感じだった。

（自動車研究部でも中盤の実力と言われてるドライバーでも、こんなに速いなんて……）

と唇を噛む。

（車自体もいいけど、それ以上にドライバーからのオーラが違いすぎる……）

一方涼宮も、それなりに気を使っていた。

（意外とやる……タコが言った通り、コーナーでも思ったより速い）と、頭の中で整理していく。

二台はヘアピンを抜けてストレート。

ストレートではZ32が速く、FZがわずかに離れる。

だが、次のヘアピンの侵入のブレーキングでFZが差を詰める。

（やっぱり、突っ込みだと詰められるか……）

と普段のおとなしそうな印象から一転、若干顔が陰しくなってい

る。

（このまま終盤のセクションに持ってくと抜かれそう……）

涼宮も険しい顔になっていた。

（このままいくと、中盤のスケートリンク前とかで抜けない……やっぱ五連続ヘアピン抜きたいけど、あっちも警戒するだろうなあ……）

と作戦を練るが、どれにしても難しい。

二台が、一旦右に曲がって、そこから切り返してヘアピンに侵入する、難しいコーナーに侵入。

（ここで！！）

と涼宮は勝負を仕掛けるが。

（行かせるもんかっ！！）

と、大林も抵抗。

Z32が華麗なドリフトを見せ、FZの道を塞ぐ。

突っ込むスペースが無くなり断念する涼宮。

（チッ、やっぱり、失敗した……やっぱり『あそこ』しかないか）
と心中で舌打ちする涼宮。

＊

頂上では、瞳たちが話し合っていた。

「タコならどこで仕掛ける？」

と藤原。

「俺なら、第二ヘアピンかな。相手によっては手前の緩い右で減速するのもあるし」

「横谷ならフェイントみたいにして、その反動で次のヘアピンをドリフトで抜けるからな」

と工藤。

「そう、けど、あのレベルの相手なら別のところで仕掛けないと」

「五連続ヘアピンだと、防がれそうだけど……他にあった？」

と横川。

「仕掛けるなら、俺も使った『あそこ』しかないんだよ」

と瞳はニヤリと笑いながら言う。

「けど、『あそこ』はかなりの度胸がいるぞ」

「涼宮は運転すると性格が変わるから大丈夫だよ」

と瞳。

*

その頃二台のマシンはストレートでの攻防に移ろうとしていた。

（やっぱり離される、やっぱ後半で……！）

と、涼宮。

*

スケートリンク前ストレートの後の（峠では）高速コーナーにいる二人の男女。

「まあ、あいづらなら、ここで仕掛けるはずだ」

と言ったのは、瞳の兄。横谷直登。

「けど、涼宮ちゃんは車に慣れていない」

とその隣で喋ったのは、瞳の姉かつ、直登の妹の横谷香織。

「まあ、根性があれば仕掛けるだろ」

と直登がつぶやく。

二台のマシンはストレートで競う。
ストレートではZ32のほうが上。
FZが離れる。

だが。

（ピッタリ私の走行ラインをなぞってる……？）
と、バックミラー越しのFZの動きに不信感を抱く。

（まさか、スリップストリーム！？　こんな速度で……！）

スリップストリームとは、ストレートに入ると先行車の真後ろについて空気抵抗を減らして加速力を上げて抜き去るテクニックであるが、大林が驚くように、このテクニックは100km/h以上でなければほとんど意味がないはず。

だが、大林は気付いていないが、この時の速度は80km/hを超えている。多少なりとも効果はある。

そうまでしてでも離されたくない涼宮。

そして、二台ともフルブレーキング。

コーナーではFZが有利。

そして、FZは多少離されたがまだ射程圏内。

（まさか、ここで！？）

と驚く大林。

（こんなハイスピードで、道幅もそんなに広くないのに……っ！）
本能的な危機回避で相手が入れるようにアウト側の道を空ける。

(あいつ、バカじゃない!!)

そして、アウト側に空いた道に間髪入れずにマシンをねじ込む。
そして、サイド・バイ・サイド。

＊

それを見ていた香織と直登。

「やっぱ、ここであるか……」

「やっぱ、外から見るとすごい怖いわ」

「相手のドライバーもいい、これは、あの子のヘアピンで勝負が決まるかな」

「しかし、涼宮ちゃんはすごいよ。まだ乗って1カ月も経ってない車でガードレールスレスレまで攻めてる……」

かなりの解析をしている二人だが、実際に見れば二台が二人の前を通ったのはほんの少し。

それなのに解析できるのは、二人の動体視力などの良さがある。

そこからでも二人のドライバースキルの高さがうかがえる。

「ま、ここで先にヘアピンを抜けた方が勝ちだな」

と直登は言う。

「まだ挽回できるチャンスはあると思うけど……」

と香織。

「どっちかがよほどのミスでもしない限りは次のヘアピンで決まりだよ」

と言って自分の車のほうに行く。

「兄さん」

と香織は呼び止める。

「本当に、瞳とまた走^やるの？」

「ああ、今回は本気の本気だ」

と今日乗ってきたマシンのドアを開けながら言う。

「今回のバトルは、俺が首都高、サーキット、そして峠での培った全てを出させてもらう」

今直登が乗りこんでいるマシンはGT-Rではない。

全体的に低い車体、運転席と助手席の後ろにあるダクト。それはこの車がミッドシップであるということを表している。

GT-Rとか違い、サーキットでも走ってそうなレーシングカー
ルックなエアロ。

そのマシンに乗り込み直登は行ってしまった。

＊

サイド・バイ・サイドのまま高速コーナーを駆け抜ける二台。
アウトとインが入れ替わるが、まだ並んでいる。

ヘアピンの飛び込み。

（（ここで先に飛び込んだ方が勝ち！！））
二台が飛び込む。

イン側の涼宮が有利。

そしてイン側でのフルブレーキング。

（FZのラインが膨らむ！？）

ほんのわずか、FZのブレーキが遅れてアウト側にラインがふく
れる。

（マズった……っ！！）

イン側が空く。

そこにマシンをねじ込む大林。

（もらったっ！！）

だが。

アウト側に膨らんだFZが、一步早くアクセルを踏んだ。
ストレートでわずかに前に出る。

（FZ、頼む、加速して！！）

と念じる涼宮。

綺麗にトラクションを掛け、フル加速するFZ。
Z32の加速が遅れたため、結果的にFZが前に出る。

だが、大林もストレートでFZの横にノーズをねじ込む。

そして、次のヘアピンに突入する。

二台、フルブレーキング。

イン側の一見有利なポジションに見える大林だが、ブレーキングではFZの方が上だ。

（ブレーキもタイヤも余力は無い……頼むよ、Z32！）

だが、ブレーキングでFZが前に出る。

FZがリードして五連続ヘアピン前の中速コーナーに侵入。

操縦性が高いFZがここでもリードする。

このままでは負ける、そう思った大林。

（どうすれば、どうすれば……っ！）

と念仏のように頭の中で唱えていた大林だったが。

「あ」

と間拔けな声を出してしまう。

（ギャンブル性が高いけど、やるしかない……っ！）

先行する涼宮がバックミラー越しでZ32を見ると。

（ペースがほんのわずか落ちた？ 諦めた？ いや、まだなにかあるんだ……っ！）

二台は五連続ヘアピンに突入する。

18話「激突、Z32対FZ」(後書き)

とりあえず、早めに投稿できましたね。タイトルは「Z32VSFZ」だと、紛らわしいのでこのタイトルにしました。

次回、涼宮のFZ、VSZ32編が完結の予定です。

19話「決着、FZ対Z32」

二台とも、五連続ヘアピンに侵入。

走りに変化が起きたのはZ32だった。

それは、わずかなペースダウン。

二つ目のヘアピンを抜けて涼宮は確信する。

（間違いない、突っ込みの勢いが落ちてる……）

Z32はつかず離れずでついてくる。

大林はこう考えていた。

（ここで無理に突っ込んでブレーキを消耗するのは得策ではない。つかず離れずでついていって、最後の高速セクションで抜く！）
という、計画を立てていた。

＊

一方頂上では俺たちが話し合っていた。

「今、香織さんから連絡があって、シオが抜いたって！」

「よくやったな」

と斉藤。

「てことは、今頃は五連続ヘアピンだな」

と工藤。

「まあ、最後の高速セクションが悩みどころだけどね」

と俺が言う。

「最後の最後での、高速セクション……か。Z32が有利だろうな」と工藤。俺と同じことを考えてそうだ。

「なにが悩みどころなの？」

と藤原。こいつは……

「もし、Z32のほうが、FZよりパワーがあるなら、高速セクシ

ヨンでは『基本的』には有利だよね」

「『基本的』には？」

と首をかしげる藤原。

「ようは、パワーだけじゃ速く走れないだろ。足回りとかもしっかり万全でってこと」

「なるほど」

「で、ここまでのバトルでZ32はタイヤ、ブレーキを消耗している」

と工藤が俺の説明を引き継いでくれた。

「まあ、ブレーキを消耗しないように五連続ヘアピンで我慢すれば、逆転のチャンスはあるかもな」

と工藤は説明する。

「まあ、涼宮だったら見破るだろうけど」

と、俺は安心させるために付け加える。

＊

涼宮は最後のヘアピンを抜けるとき。

（まさか、ブレーキの消耗を抑えるため！？）

そのことに気付いた涼宮は、それに対抗するためのことを考える。

（最後の最後で抜かれるわけにはいかない！）

それを追う大林も、焦っていた。

（こんなに距離を開けて大丈夫なの……？ ああーっ！ すっごい

不安になるう————！！）

と、心の中で叫ぶ始末。

一方涼宮は、なにをするかわかってしまえば、安心できる。

例えるなら、ゲームなどで敵に攻撃される前に、どのような攻撃

をされるかわかっている状態であろう。

なにをされるかわかっているれば、対処もできる。

そして、五連続ヘアピンの後のヘアピンを抜け、高速セクションへ――――ッ！

＊

その頃俺たちは頂上で涼宮がどのようにすれば勝てるかを話し合っていた。

「とにかく、シオが抑えきればいいんだよね」

と藤原。

「うん、少なくとも最終コーナーまで防げれば大丈夫だよ」

と俺が説明すると、工藤が。

「最終コーナーは道幅が狭い上に、コーナーの一曲率（R）が一きつい（高い）からな」

と、付け足してくれた。

「けど、あくまで『最終コーナーまで抜かれなきゃ』だろ？」
と斉藤。

「……なんで、そんなテンションが下がることをいうの？」
と冷たい目で藤原。

「まあ、それも事実だから仕方ない」
とフォローしてあげる。

＊

後ろから追われる形で、高速セクションに突入したが、涼宮は焦らなかった。

（なにをやっても、車が応えてくれる！）

涼宮がそのように思う理由は、峠では低速すぎて役に立たないと思われる空力パーツにある。

峠のバトルでは、大した速度にはならないと思われるが、最近の車やチューニングカーの性能、などからみれば、瞬間的にも恐るべき速度に達してるときもあるのだ。

そして、発売されたばかりのFZは、FDと外見はさほど変わらなくても、細部で空力のことを考えられている。

ウイングの角度、そして、シャーシの下から効率的に空気を抜いて、マシンと地面の間の気圧を薄くしてマシンを吸盤のように地面に押し付ける役目のデュフューザー。

そのような変更により、マシンが地面に押し付けられ、スピード自体は遅くても安定性、機動性が高い。

そして、空力パーツは速度が上がれば上がるほど、真価を発揮する。

そのため、パワーが高いZ32のほうが有利と思うかもしれないが、実はFZも有利な一面を持っている。

だからこそ、涼宮は車が応えてくれると感じたのだ。

一方で大林は。

（いける、パワーならこっちが上！）

ストレートでマシンの先端^{ノーズ}をねじ込む。

（いける！？）

だが、FZのほうがコーナーでの速度が高い。

ギリギリでFZが先頭を守る。

（ここでは抜かせないッ！）

ギアチェンジと同時に、FZとZ32のマフラーからアフターファイヤが出る。

残りあとわずか。

（どうする！？ もう勝てないんじゃ……）

と、一瞬マイナス思考になったが。

（んなことはない、まだチャンスはある！）

そして、唯一道幅が三車線あるコーナーに侵入する。

二台がコーナーに侵入。

ストレートでアウトにノーズをねじ込んだZ32が先頭を取ろうとする。

（行かせるかっ！！）

涼宮もインから攻める。

旋回性能では、一歩上のFZでZ32より早くコーナーを抜けようとする。

だが、慣性でアウト側のガードレールにギリギリと近づく。

二台とも、コーナーでサイド・バイ・サイド。

そしてそのままコーナーを脱出。

次のコーナーが最終コーナー。

サイド・バイ・サイドのまま最終コーナーに侵入。

インが大木のZ32，アウトは涼宮のFZ。

イン側のポジションだが、タイヤの消耗が激しい大木はきつい。

だが、涼宮のFZのタイヤには、まだ余裕がある。

そして、最終コーナー。

差は歴然だった。

イン側でアクセルを踏めないZ32と、アウト側でアクセルを踏むFZ。

そして、FZが前に出る。

そのままゴールラインを通過する。

勝ったのは、当然涼宮だった。

＊

頂上で俺達は報告を受けていた。

「よし、涼宮が勝ったよ!!!」

「やったあ!!!」

と、藤原が叫んだ。

「まあ、涼宮なら当然の結果だろ」

と嬉しそうにインプにもたれかかりながら斉藤。

「ま、新車の割には頑張ったじゃないか」

とこれまら嬉しそうに麓のほうを見つめる工藤。

と、その直後。

「V6の音だ」

と俺が反応すると。

「しかも、VTECエンジンっぽい音だな」
と工藤。

なんだか、ものすごい力と一緒に登ってきているような雰囲気……

登ってきたのは、低い車体が特徴のNSXだった。

「兄貴のNSX!？」

そう、ピリピリとした緊張とともに登ってきたのは、俺の兄、横谷直登のNSXだった。

涼宮の勝利への喜びから一転、一気に臨戦態勢の空気になった。

「久しぶり、というほどでもないな。瞳」

と、車から降りて話しかけてきた兄貴。

「なんの用事？」

大体想像できたが、訊いてみる。

「バトルの申し込みだ」

と、今の空気を読んでか読まずか、あっさりという兄貴。

「いつ、どこで？」

「再来週の土曜日。瞳も夏休みに入るだろ？」

そういえばそんな時期だったな。

「いや待て、そろそろ期末試験の時期じゃないか？」

「だったら、3週間後でもいい。俺も瞳が万全の状態まで走ってほしいからな」

「次は負けない、次はこのNSXで行かせてもらう」

「そういうと思った」

それと入れ替わりに涼宮達が戻ってきた。

「ど、どうしたの？」

[illegible]

「バトルって、さっきのNSXですか!？」

「知ってるの？」

「知ってるものにも、今首都高のC1や横羽線で、一番速いって言われてるNSXですよ！」

と、大林は恥ずかしそうに顔を下に向けてしまった。

いつもは恥ずかしがり屋で、ハンドルを握ると性格が変わるタイプなのかな。

なにはともあれ、FZ対Z32の戦いは終了したのであった。

＊

「うぬぬぬぬぬぬぬ」

俺の前に座っている藤原が、謎の唸り声を上げる。

ちなみに、今はテスト期間でテスト勉強をしている。

「なに唸ってるの？」

と訊く。まあ、こいつのことだろうから――――

「タコと直登さんのバトルのことよ」

即答された。

「今はテストのことを考えろ」

「けどさあ！」

「はいはい、今は勉強」

「なんでそんなに集中できるのよ……」

ボソツという藤原。

「……」藤原（お前）の集中力が足りないだけ」

「むっ、タコ、それは違うよ」

「なにが？」

「香織さんを見ればわかるけど、――横谷家（この家）は頭の出来が違うんだよ」

「あのなあ、姉貴はともかく俺はそんなによくないと思うよ」

「まあ、成績は飛びぬけていいってわけじゃないからね」

「だろ、俺は平凡に生きてるんだ」

「（……一度性転換したのに平凡って）」

「なんか言った？」

「いえいえ、なんでもありません！」

嘘臭い……

「まあ、いいや」

「ふう……」

「おい、誤魔化したのに『ふう……』で台無しだぞ」

「……」

「おい、俺のことをうるうるした目でジーっと見るな」

「どうする、ア○フルー♪」

「お前は犬だったのかっ!」

「チワワみたいでしょ?」

「いや全然」

「なによっ!」

「そっちがだろ!?!」

ひどい理不尽だ。

「む、タコが適当なことばっか言うからでしょ!」

「……なんだと」

「まったかう、いつもいつも適当なことをいって、男子の時からそうだったじゃん」

「俺がいつ適当なことをいった!」

「いつもいつもいつも!」

ただいま、ケンカが発生しています。

まあ、色々言い合って、数分後。

「このー!」

と俺は藤原に武力行使をするために、藤原を押し倒して乗りかかる。

「きゃあああ、タコが襲ってきた!」

と、藤原が言った直後、入口のドアから『ガシャン』という音が。

「ひ、瞳。そんな趣味があったのね……」

と言っているのは、一番見られたくなかった姉貴だった。

「わわわわ、私はなにも見てないからー！」
と言って、どこかに走って行ってしまった。

それから少々の沈黙を経て。

「不毛な争いはやめようか……」

「そうね、あたし達がバカみたいだしね……」
停戦協定が結ばれました。

……ちなみに、テスト勉強はノルマの半分ほどで終わったのは秘密。

19話「決着、FZ対Z32」(後書き)

とりあえず、涼宮のFZ編は完結、次からは最強のNSX編に入っていきます。

少しずつ、口調だけでもキャラがわかるようにしていきたいと思うので、違和感があるかもしれませんが、そこはスルーしてください。

20話「首都高最速のNSX」

唐突だが、今は期末試験を受けている。

Z32対FZが終わった後、一週間もしないでテスト週間に突入、そしてテストなのだ。

ちなみに今日は最終日なので、みんなの欲望がいろんなところに向いているだろう。

まったく勉強しなかったあー、というわけでもないのですが、危機的状态でもないのだが、だからといっても、不安は不安だ。

なにしろ、今回のテストで夏休みの運命が決まるとも言えるのだ。これはみんな経験することだろうな。

と、全ての問題を解き終わって、余った時間で考えていた俺なのだが……

それでも、テストが終わって少ししたら対戦することが、頭から離れなかった。

なにしろ、相手が実の兄なのだ。

あれから、斉藤が調べてくれたところ、兄貴は首都高で『C1'、横羽、新環状線最速』と言われているらしい。

なぜ、「首都高最速」ではないかというところ、湾岸ではパワー少なくて勝てないそうさ。

噂によると、800馬力クラスのGTRがいるとか。

しかし、C1で速いということは、コーナーでも速い、ということとは峠でも速い可能性が高いのだ。

厄介な相手すぎる……

それからテストは1時間もしないで終わり、下校。

「やっと終わった〜」

と身体を伸ばしながら藤原。

「といっても、テスト返却があるから、ある意味終わっては無いよ」と落ち着いた様子で涼宮。

「あー、どうせ俺のテストなんか終わっちまりましたよ。はい、だから横谷、夜待ってるから」

と世界の終わりの前のような顔で言っているのは工藤。

「夜にはいかないからねー」

と、流しておく。

「なにしろ、試験自体は終わったんだからいいじゃん」

と嬉しそうに横川。

「これで、今日からまた走れるな」

と斉藤。

「そうそう、直登さんとのバトルもあるし」

と楽しいことが起こると言わんばかりに、藤原。

まあ、傍から見れば楽しそうかもしれんが……

「ん？ タコ、元気ないね？」

と横川。

「まあね。だって、今回のバトルは自信がないもん……」

＊

瞳達が走っている峠以外にも、走りや御用達の場所がある。

——首都高速。

ここも峠と同じように、サーキット化されており、毎日にぎわいを見せている。

首都高は、大量のコーナーがある一環状線（C1）と、日本で屈指の最高速ステージ湾岸線、コーナーとストレートが混ざりあう環状線と湾岸線をつないだ新環状線。狭い道幅に、荒れたアスファルト、そして高速域でのコーナリング、横羽線。

主に首都高と呼ばれるのはここである。

その中、C1，新環状、湾岸、横羽で速いと言われているマシンがいる。

それが、昔の友人と訊いた荒畑勝二は、最近直して走らせている80スープラで横羽線に出ていた。

以前、友人の妹に榛名山で負けて以来、アルファードでスポーツカーに勝とうなどという、無謀な挑戦は諦めて、またスープラで湾岸、峠を走っていた。

（あいつが、また榛名山のハチロクに挑むなんて……勝てるのかよ）
と思いつつ、榛名山のハチロクこと、瞳の走りを思い出す。

（あれは、もはや天使や悪魔とも表現できる走りだ……）
特に宗教を信じてはいないが、そういう風に表現したほうがわかりやすいと思っている。

神ではないのは、やはり一番上というには、規模が小さいからだ。

（まあ、直登^{あいつ}に会ったら、何故今更再戦なのか、問い詰めるまでだ）
と思いつつ、前にいるマシンを抜く。

（今の、そこそこ上手かったな）
だが、バトルしようと思うほどは上手くはない。

（しかし、今日は出てきてないのか？）

と思いながら、コーナーを立ち上がってストレートを加速しているとき。

（来たか！）

一瞬でわかった。

後ろからくる重圧。

首都高でトップ5の実力に入ると言われている荒畑でも、その重圧は恐ろしかった。

ミラーに移る低い車体。

ルーフの後ろにあるちょんまげのようなエアダクト。

バブル期に作られたマシンで、第二代GT-R、80スープラ、FD、ランエボ、インプなどと同じように人気が高く、日本初のスーパーカーと言われるマシン。

（直登のNSX……！）

相手も、前を走っているスープラが荒畑だと気付いた気付いたらしい。パッシングをしてきた。

——バトルの合図だ。

直登が追いついたところでバトルが開始された。

後輪駆動とは思えない加速をしていく二台。

横羽線では、200km/hに突入することもある。

しかし、路面は荒れている。

ミスをすれば、側壁にヒットしてしまう。

だが、そんなことを意に返さない二人。

それに応えるように、地面にびったりと貼りつくマシン達。

それを実現するのは、ワイドかつ、レーシングカーを連想させる派手なエアロダイナミクス。

途中にいる、ゆっくり流しているマシンを追い越し、時には利用しながら横羽線を駆け抜ける。

（パワーはこっちが上か！）

なにしろ、荒畑のスープラは700馬力程度ある。

（なのについてくるというのは……！）

恐ろしいことに、コーナリング差を詰めている。

一方、直登は。

（荒畑、上手くなってるな……）

コーナーが連続するところで、直登が仕掛ける。

ブレーキングでノーズをねじ込み、インを取る。

（行かせるか……っ！）

荒畑もアウト側で踏ん張るも、直登の圧倒的なコーナリングスピードで抜かれてしまう。

抜かれて、瞬間的に思考が止まる荒畑。

（イン側で、あんなに速く回れるのか！？）

思考能力が復活して出てきた思考。

再加速するNSXのリアを睨む。

そしたら、NSXのウインカーが光る。

どうやら、パーキングエリアを改良して作られたピットスペースに入るらしい。

それを追って荒畑の80スーブラが入る。

＊

直登がマシンから降りるとちょうど荒畑のスーブラが入ってきたところだった。

それを目で追う直登。

一台のスペースを空けて止まっているスーブラとNSX、見た目だけでない、マシン自体の速さのオーラに周りで見ていた者は息をのむ。

マシンから降りてきた荒畑は。

「久しぶりだな」

と口を開く。

対して直登は。

「確かに、榛名で会って以来か」

「お前、妹にバトルを挑んだんだってな」

「まあ、今の俺とNSXならいける」

「んなわけあるか、どう考えてもお前と妹の腕は互角だろ」

「だろうな」

「だろうなって……」

と呆れる荒畑に、直登は。

「『腕は』だろ」

と、軽く言う。

「まさか……」

と、荒畑は呆れつつも、驚く。

それは、今までの直登と違うスタイルの走り方をすると言っているようなものだ。

「勘違いするなよ、俺はお前と走ってるころより変わった」

と、こちらも呆れながら言う。

「確かに、お前と走ってるころは『マシンの性能より、自分の腕で勝つ』だったが、今では新しい車もあるから、そうはいかない、だから『腕がダメでも、マシンでも勝てるようにする』というスタイルになったんだ」

何て野郎だ、と荒畑は心の中でつぶやく。

「だから、自慢のNSXを引っ張りだしてきたのか」

「そうだ」

またさらりという。

「まったく、そのNSXはお前の全てともいえるんだぞ」

と、直登の後ろに停めてある、白いNSXを見た。

フェンダーもワイド化されて、太いタイヤを履いている。高速域で空力を生むためのエアロパーツ、ちょんまげのようなエアダクト、それらが官能的な美しさを持つNSXの車体をさらに引き立てている。

「どう考えても、ハチロクじゃ太刀打ちできないな……」

と荒畑は瞳のことを心配する。

「どう考えても、ショップのデモカーレベルのNSXとバトルして勝っても、当たり前と思われるんじゃないか」

と、適当に言ってみたら、直登が真面目に答えた。

「瞳は高性能車殺しと言われている。だから、高性能な車で勝てば

『あの高性能車殺しに勝ったって、名声をもらえる』

「どうせお前は、名声なんかに興味はないだろ」

「そうだ、全ては自己満足のためだな」

と言って、満足したのか。

「じゃあ、俺は帰るか……」

と立ち去ろうとした直登に。

「そうはいかないぜ、横谷」

「なにが望みだ……?」

「バトルだ、ここが平和島だから……上ってって、浜崎ジャンクションからC1入り、江戸橋で9号に入って、そこから湾岸に出るの
は？」

「いいだろ、C1でちぎってやる」

＊

二台がパーキングエリアから出て行く、バトルは浜崎ジャンクションからC1に入って、立ち上がったところからスタートする。
先行は先程と変えて、直登。後攻は荒畑。

二台が浜崎ジャンクションに侵入する。

きついコーナーを曲がっていく二台、そして、C1入り。

二台のマシンが加速していく。

推定馬力、350馬力のNSX、推定馬力、700馬力のスープラ。
ラ。

倍の差があるが、NSXもコーナリングではスープラを圧倒する
速さをもっている。

そして、これから走るのにはコーナーが多いC1、パワーが多い方
が有利、そう簡単にはいかない。

むしろ、パワーがあると持て余してしまい、ロスしてしまう。そ
のようなこともあるのだ。

今、二台が走っているのはC1の中でも速度が出る外回り。

もうひとつ、コーナーが多く、スピードも乗らない内回りもある
が、今回のバトルでは使わない。

やはり、荒畑のスープラが離れていく。

だが、荒畑は焦っていなかった。

（C1で不利なのはわかってるんだ。こっちが少しでも有利な9号まで持ちこたえればいいんだ）

確かに、それが一番の作戦である。

だが、この作戦の弱点は。

（だが、ついていけるのか……？ このペースに……ッ！）

荒畑がそこまで思うほど、直登のコーナリングが速いのだ

二台のマシンは、元々高速道路とは信じられないほど曲がりくねったコースを攻めていく。

この二台が本気で交わるのは、まだ先————

20話「首都高最速のNSX」（後書き）

マンネリ化を防ぐため、首都高の話をいれてみました、そしたらほとんどん書けるww やはり、瞳達の日常は、若干ネタ切れだったみたいです。

もしかしたらマンネリ化、ネタ切れの時のためにスピノフみたいな感じで、首都高verでも書こうかなと思っています。

なにか意見があったら感想からでもいいからお申し付けください。

21話「首都高完結、そして日常へ――」

二台のマシンが首都高を疾走する。

それは、感動的な美しさに見えるかもしれない。
しかし、同時に戦闘機ドッグファイトの空中戦にも見える。

荒畑は直登のNSXについていくのがやっとだ。

（くそ、どうすればあんなに曲がるんだ……！）
同じ車に思えない。

確かに、パワー重視の80スープラと、コーナリング重視のNSXでは性能は違う。

だが、本当にそれだけなのか？

荒畑も首都高では速い方だ。峠も走るから、コーナリングも上手い。

格が違う……

そうとしか考えられない。

（あれなら、一榛名のハチロク（横谷瞳）にも勝てるかもしれない……）

と考えるが、違うことも荒畑は考える。

（だが、それだけで勝てるのか？ あいつの妹も、かなり無理をするやつだ。土壇場でなにをするかわからんからな……）

しかし、何故そう考えられるのか、自分でもわからない荒畑。

（まあ、まずはバトルだ）

と心を入れ替え、バトルに集中する。

荒畑のスープラは離されてはいるが、まだ絶望的というわけではない。

それに、コーナーが多いC1は後少し。

あとはC1より直線的な9号、そして湾岸。

ここを凌げばチャンスはある。

一方直登も、そんなことはわかりきっている。

(C1でどこまで離せるか、それが勝負だ)

と思いつつ、次のコーナーへのアプローチをする。

(9号だと五分五分か、スープラが上だろうな……)

ステアを握りなおし。

(それがどうした、そんなことでは瞳に勝てない……！)

わずかでもストレートがあると荒畑のスープラが近づく。

(流石だ、トラクシヨンの掛け方が上手い)

と直登は心中で荒畑をほめる。

トラクシヨナー——すなわち駆動力は、いくらパワーがあっても地面に伝えられなければ意味がない。

二台とも、それが上手く、加速でほとんどホイールスピンをさせない。

それが、どのくらい走りに影響が出るか、実際に走っている人ならわかることだろう。

そして、9号線に突入。

荒畑のスープラが本領を発揮する。

700馬力もののパワーが大きい車体のスープラを加速させていく。速度はあっというまに150km/hオーバー、そこから減速、また加速の連続。

そんなスープラから逃げるNSX。

コーナーへの侵入では一歩先にいくが、立ち上がりから加速は追いつかれる。

このままでは、湾岸線で負ける。

わずかにマシンを滑らせながら、加速していくスープラ、それをミラー越しで見たいた直登は。

「ここまでか……」

直登は、C1でスープラを引き離れたことで満足だった。

この9号でも700馬力クラスのマシンと渡り合えるとわかった以上、湾岸で負けてもどうということはない。

そして、日本で最高峰の最高速ステージ、湾岸線に入る。

排気量では直登のNSXのほうが上だが、ターボ付きの荒畑のスープリのほうが、加速、最高速ともに高い。

湾岸線への合流。

普通に流しているマシンもいるが、多くいるわけではない。

直登がフルスロットルで駆けて行く。

それを追うように、荒畑もギアチェンジからフルスロットル――

——できない。

荒畑が飛び出ようとした車線に、流している車が居たのだ。それにより、一瞬アクセルを踏み損ねる。

ターボ車には痛い失速だ。

ターボは排気ガスにより、動力を得てエンジンに過給する。だから、アクセルを踏まないと、排気ガスが出ないので、タービンが動かない。

そして、タービンが動くのは、最近では少なくなってきたが、ラグがある。

それにより、一瞬加速が鈍る。

さらに、シフトアップしたばかりで、落ちた回転数を補うため、シフトダウンさせるか悩んでしまったのだ。

その一瞬をつき、NSXがさらに加速する。

荒畑はギアは変えず、そのまま加速させる。

唯一の救いは、スープラに搭載されているエンジンの2JZ-GTEは、第二代GT-Rに搭載されているRB26DETとは違い、低中速でもトルクはあるため、失速してもすぐに挽回できたことである。

（これがスープラのいいところなんだ。さあ、仕切りなおしだ！）

二台のマシンは、150km/h前後で走っている車を左右とよけて走る。

湾岸では、左右の車線変更でのミスが命取りになる。

二台とも、そこではミスをしなない。

直登のNSXのすぐ後ろ——10メートル以内に荒畑のスープレが近づいてきた。

ゴールは大井パーキングの近く、そこまであとわずか。

そこまで直登のNSXは逃げ切れるか。

NSXの後ろにピッタリとついていたスープラが前に出る。

荒畑がギリギリで抜き去る。

そして、勝負が決した。

＊

減速して大井パーキングに入る二台。

NSXから降りた直登は。

「荒畑、お前の勝ちだな」
対して。

「なにいつてんだ、C1，9号で圧倒されてたから、実質はこっちの負けだよ」

と言ってから、NSXを見て。

「しかし、どんだけコーナーで速いマシンを作ったんだよ」と直登を褒める荒畑。

「ま、これでも足りない気がするけどな。なにせ相手は高性能車ハイスベックキ殺しだしな」

＊

そして、対戦相手の俺こと、横谷瞳は親友達と帰りながら。

「まあね、だって、今回のバトルは自信がないもん……」
と言うと。

「なんで……？」

と雰囲気を感じたのか涼宮が神妙そうに訊いてくる。

「だって、相手は兄貴だし、軽量ミッドシップのNSXだよ。正直、俺がバトルしたくない車種上位車になってるよ」

「そんなに速いっけ？」

と藤原。

「しっかり仕上げれば、GTRよりも速いはずだよ」

「そんなに……」

「兄貴なら、そんなくらいできそうだし。俺でもダメだろうなあ……」
我ながら、いつになく弱気だ。

「そんな弱気な横谷も、好きだぞ」

と工藤が俺の手にキスをする。

……………

「って、なにすんだこの変態があああああああああああああああああああ
ああああ!!」

「くそおおおおおおお!! どさくさに紛れる作戦が!!」

「紛れても俺の思考が追いついたら意味が無いんでしょ———」

「!!」

「ってことは、瞳の思考が追いつかないうちに攻撃すれば!!」

「さりげなく呼び捨てにするな———!!」

そうやって、ワーキヤー騒いでいるうちに帰宅。

「タコー、今日のご飯は？」

「……決めてない」
忘れていました……

ということで、夕食をなににするか会議。

「なにがいいかな」

と俺が訊くと、いつの間にか居た姉貴が。

「瞳を食べましょうか」

「あ、いいですね」

と同意する藤原……

「つてなにサラツと恐ろしいことを言ってるの!?!」

「冗談よ。ふふふ」

あなたが言うのと冗談に聞こえません。

結局夕食は――

「瞳で決定!」

「わー」

「だからそれはやめてえ――――――!?!」
俺は変態に囲まれているような気がする……

＊

結局夕食は肉じゃがなどで決定。

ちなみに、肉じゃがなのは、姉貴が。

「女たるもの、肉じゃがくらい作れないといけないのよ!?!」

と、偏見満載なことを言い出した。

だが、俺と姉貴は料理はできる。

誰が料理するか……それは

「うー……女は料理できないといけないって、偏見すぎるじゃん……」

とスーパーと一緒に来て嫌そうに言う藤原。

「男でも女でも、料理が出来た方がいいでしょ」
となだめつつ食材を眺める。

「これと、これ……」

カートに入れていく。

「って、藤原？」

いつの間にか居なくなっていた。

「あれ？」

いくらなんでも、お菓子を買いに行くような年じゃないと思うけど――――

「タコ、このお菓子買って」

――藤原は例外のようだ。

「おい、ガキ」

と、声を低くして言う。

ちなみに俺が声を低くすると男子にも聞こえるらしい。

「うー、お姉ちゃんのケチ」

こんなことを言っているが、見た目は同い年、誕生日は藤原の方が上である。

「まったく……」

と俺は藤原が持つてるお菓子を見る。

……美味しそう。

「仕方ないなあ……」

試しに買ってみることに……

そんなことをしながら買い物を終えて帰宅。

「お帰りー」

と姉貴が言ってきた。

「さて、藤原、作るよ」

「頑張って」

「お前が作るんだっ！」

と台所に引っ張っていく。

……これが、全ての始まりだった。

21話「首都高完結、そして日常へ——」(後書き)

投稿が遅くてすみません……ネタが切れてきて……これから更新頻度が落ちてしまいますが、ご勘弁を……

いつNSX編が完結するかWW

22話「最速のバトルの前哨」(前書き)

更新遅れてすみませんでした……

22話「最速のバトルの前哨」

藤原に作業を始めさせたのだが……

「ピーラーで大体いけるでしょ！」

と詰め寄ってくる。

「あのなあ……それだとエンジンを大きく切れないでしょ？」

「そのまま入れればいいのよ」

と普通に言う藤原の精神は大丈夫なのだろうか。

「さあ、切るわよっ！」

と包丁を握る藤原。

流石に指を切りそうな様子ではなかったので俺はちよつと席を外した。

数分後、戻ってみると。

「ふふふふふ、うふふふふふふふふふふ」

と笑いながらニンジンなどを切る藤原が居た。

「藤原さん！ 怖いから笑いながら切るのはやめて！！」

「ふへへへへへへ……」

「もお怖いよ！ なにがあったの！？」

そう言った直後、切り終わったのか、笑うのと同時に包丁を動かす手を止めて藤原が振り返り。

「タコ……手え切っちゃった」

「今更！？」

俺が藤原に絆創膏を貼ってやっている。

「なんで、笑ってたんだろ……」

とつぶやく藤原。

……もう知らない。

気を取り直して肉じゃがを作る。

で、細かいところはカットするが、思ったより藤原は出来ていたの
で少しの間放置することに。

＊

瞳が藤原から目を離して別のところに行ったあと。

（あれ、なにを作るんだっけ？ ニンジンとか切ってて忘れちゃっ
た……）

と、とんでもないボケをする藤原、

（ニンジン、玉ねぎ、じゃがいも……カレーかな……）

と思い、心辺りを探すも、カレールーは見つからず。

（買い忘れたのかな）

と思い。

「タコー、買い忘れがあるから買ってくるよ」

「あ、うん。けど、俺が行くのに」

「いいのいいの、いつもタコに作ってもらってるし」

と手を振って自分の愛車、FDのところに向かう藤原。スーパー
までいくには、車でいくのが一番速いのだ。

＊

俺はふと、なんの材料が足りないか、疑問に思った。

全部買ってきたんだけどな……

一応確認してみると、みりんが無くなっていた。

……そういや、みりんが切れそうだったの忘れてたな。

十数分後、藤原が若干上機嫌で帰宅して料理を再開する。

それから数分後、ぐつぐつ煮込んでいるような音が聞こえてきたので、藤原もしっかりやってる、と俺は確信を持っていた。

それからまた数分後、だんだんスパイシーなカレーのいい匂いが

……

………？

………カレー？

………ってなんでカレー作ってんだ！？

「藤原、なんでカレーを作ってるんだよ！？」

「えー、カレーじゃないの？」

………とんでもないボケをされた。

「いや、だって。ニンジン、玉ねぎ、ジャガイモがあったらカレーでしょ」

「こんなにやくが目に入らないのか！？」

「こんなにやくカレーじゃないの？」

「んなわけあるかあああああああああああああ！！！」

それからまた数分後、こんにゃくが入ったカレーが食卓に並ぶ。

「藤原……あんたは、天性のバカだよ」

「なんでそんなこと言うの!？」

「だってそうだろ! どうなったら肉じゃががカレーになんだよ!」

「肉じゃがは日本のカレーっていうじゃん!」

「それはシチューだ!!!」

「言い争っていたら、姉貴が。」

「おいしいからいいのよ」

と幸せそうな顔で言ってきた。

くそ、なんだか反論できない……

＊

話は戻って、首都高の直登達。

「直登、そのNSXって排気量^{ボアアップ}アップとかしてるのか?」
と荒畑。

「ああ、C32B改3.5リッターだ」

「元でも倍の排気量があるのにな……お前の妹も可哀そうだ」

と本気で瞳を心配するようにいう荒畑。

「速い相手には本気で挑む、これが俺のやり方だ」

と言いきる直登。

「そもそも俺は、車自体にこだわりはないからな」

と話題を変える直登。

煙草に火を付けて、荒畑が。

「ホンダ好きが聞いたら『お前、ホンダ好きじゃないのかよ……』
と言われそうだな」

と呆れながら言う荒畑。

「まあ、旋回性のある車を探してて、GT-Rはあれだし、FDも

トラクションとかがな。で、NSXがちょうどよかったんだ」

「なるほどな。お前らしいと言えはお前らしい」

と返しつつ、荒畑は思う。

「けど、そのNSXって筑波で57秒出したやつだろ？ ショップのデモカーレベルのNSXでバトル……大人げ無さ過ぎだろ」

「なにを言う、チート並みの速さのあいっぴに勝つにはこれくらい必要なんだ！！」

「落ち着け……」

と直登をなだめる荒畑。

「あ、ああ……そうだな」

と一瞬で落ち着いた直登。

「はいはい、そんなにお前がシスコンなのはわかったから」と冗談で言った瞬間、直登がゆっくり顔を上げて。

「シスコン……だと？」

その目は天敵を見る様なもの――

「やべえ、本気だ！！」

と言ってスープラに乗り込み、逃げるように――のような比喻ではなく、逃げるために走りだす。

それを無言で追いかけたす直登。

それをミラー越しで見る荒畑。

「くそ！ 何故シスコンでキレルんだああああああああああああああああああああ！！？」

と叫びつつ湾岸線方面に逃げる。

＊

話はまたまた戻って俺、横谷瞳。

「じゃあ……皿洗いくらいはしっかりやってくれよ……」

と俺は藤原に言う。

「なにがわかったんだ？」

「うん、
じゃあね」

『ちよつ、まだ言い訳を――』

俺は携帯から耳を離して、閉じて手元に置く。

そして、台所から。

『あつ、おつとつとつとつとつ……』

と、なにか落としそうになって必死に拾っている声が聞こえる。一体なにをしているんだ……

さらに数分後。

『これって、どこに置くんだったけ?』

「一人で出来るって言うときながら俺に訊くなあああああああああああ
ああああああ！」

数分後。

「ふう……まったく、配置くらい覚えろよ……」

「てへっ☆」

「可愛く言っても無駄だ」

「酷い……」

「なにを言うんだ……て、なんか皿が一枚足りない気がするんだが……？」

と言ったとき、藤原はサーツと距離を取っている。

「ふふ、沙織ちゃん♪」

ダッ、と俺は追いかける。

「いやああああああああああああああああ！」

[illegible]

被害、お皿一枚でした。

＊

バトル当日、榛名山頂上で自動車研究部部員——ようは俺の仲間達が集まっている。

「今日は伝説のバトルになりそうだな」と斉藤。

「まあ、はっきり言って負けるかもしれない」と言う。

「そんなこと言わないでよー……」と横川。

「そんなこと言われても……今回ばかりは本気の兄貴だよ、勝てる気がしないよ……」

「とか言いつつ勝つのが横谷クオリティー」と自信ありげに工藤。……他人ごとだと思つて。

「そろそろ、時間だよ」と涼宮。

すでにたくさんの観戦客ギャラリーが集まっていて、いつもの静かな榛名山とは違う場所に見える。

そんな中、V6エンジンの音を轟かせてマシンが登ってくるのがわかる。

数分後、登ってきたマシンは当たり前だが、兄貴のNSXだった。斉藤が調べた話では筑波サーキットで57秒台を出したことで有名なマシンらしい。

ちなみに、筑波サーキットでは1分台を切れば速い方だ。

3. 2リッターのC32Bを搭載したマシン、NSXの後期型、通称NA2型のタイプRがベースらしい。

だが――

「3. 2リッターの音じゃないな」

とレースモード（レース中と前後の真面目なとき）の工藤が言う。

「うん、音的には3. 5はありそう」

実際に3. 5リッターにするパーツは出ているから不可能ではない。

そのホンダ車のいいとこの一つの、NAのいい音を響かせて俺達の前に止まった真っ白のNSX。

「久しぶりだな、瞳」

と言う兄貴。

「だね」

となにを思いつかず、適当に返してしまった。

ちよつと気まづくくなるな、と思った直後、また別のエンジン音が鳴り響く。

「直6、あいつか……」

と兄貴がつぶやく。

登ってきたのはNSXとは対照的な真っ黒な80スーブラ。

「バトルには間に合ったか……」

と降りてきたドライバーは言う。そのドライバーの顔を知っている。

「荒畑さん、久しぶりです」

と言うと。

「……やっぱ直登、お前とは違って素直でいいな」

「うるせえ……」

やっぱ、この二人は仲いいな。多分。

「まあ、気を取り直して、じゃあ、そろそろバトルを始めるか」

「いいよ、タイヤもエンジンも準備できてるし」

「じゃあ、始めるか……」

二台がスタートラインに並ぶ。

22話「最速のバトルの前哨」(後書き)

本当に更新遅れてすみませんでした……なんとか、スランプでした。

自分こんな調子になるかもしれませんがお許しください。

23話「峠最速の走り」

スタートラインに並ぶ二台のマシンを見て、車を知っている人なら異様な光景に見えるだろう。

方や、80年代のライトウェイスポーツカーのトヨタ スプリンタートレノ AE86型。

方や、日本初のスーパーカー、ホンダ NSX TYPE-R NA2型。

この二台は、普通に考えれば別クラスの車、同じスタートラインに並んでいる時点でかなりのシニールさがある。

だが、決してハチロクが悪い車ではない、基本的なところが違うだけで、二台ともいいマシンだ。

例えるなら、ボクシングや柔道で別の重量級同士が戦っているようなものだ。

本来なら迫力でNSXが圧倒しているだろう。

だが、このバトルは違う。

NSXに負けないほど、ハチロク——と瞳から迫力のオーラが出ている。

瞳のハチロクは超高回転型のエンジンを搭載しているが、黒いカーボンボンネットやホイール、車高などの外見以外はノーマルである。

直登のNSXは、ノーマルより太いタイヤ、それに合わせて前後のフェンダーの拡大、小ぶりのGTウイング、その他のパーツを付けている。

見た目だけの性能では、直登のNSXが勝つ。

だが、相手は横谷瞳、ハイスベックキラ高性能車殺しと呼ばれる少女。同じような高性能車を何台も倒してきている。

直登にすれば、中途半端なチューンの車でバトルを挑むより、しっかりチューンをした車で全力で挑むのが礼儀だと思っている。瞳も、相手に不足はないと意気込む。

二台のマシンの空ぶかしが始まる。

それから一拍置いて、バトル開始のカウントダウンが始まる。
「3、2、1、GO！」

二台がスタートする。

やはり加速ではNSXが上。

グン、と引き離すNSXを後ろからみつめる瞳。
そして第一コーナー。

（やっぱコーナーも速い！）
と若干ながら、瞳が焦る。
ギリギリでついていけたものの、下手をすると引き離されるかもしれない。

（流石、兄貴といったところかな）
ここからどうやって巻き返すか考える瞳。

＊

頂上では自動車研究部の面々が考え込んでいる。
「まあ、いつも通りならギリギリでも勝って戻ってくるのが横谷クオリティーだが、今回は相手があの直登さんだ」

と真面目モードの工藤。

「そうよね、タコも何回も『負けるかも』って言ってるくらいだし」と涼宮。

「そんなこと言っても勝ってくるのがタコじゃ〜ん……」

とパタパタ手を振りながら藤原が言う。

「サオ、今回くらいは負ける可能性も含めてみてあげよう」と横からなだめるように横川。

（てか、横川はいつも横谷が勝つと思ってバトルを見ているのか？）と心の中でツッコむ斉藤。

と、その時、チャーラチャーラ、ラララ、と藤原の携帯が着信音を出す。

発信者は瞳の姉兼直登の妹、香織だった。

「もしもし香織さん、いまどこですか？」

『今五連続ヘアピンよ、今回はここできにか起きそうだからね』

「そうですか、またなにかあったらお願いしますね」

『もちろんよ！　しっかり実況してみるわ！』

そういつて通話が切れた。

＊

第二コーナーに侵入する二台。

わずかながら追いつく瞳。

（この調子だと……結構つらいな）

もしかしたら直登はタイヤなどを労わって本気で走ってないのかもしれない。そう思うと後々の展開がきついかもしれない、と瞳は考えた。

そして、最初のヘアピンに突入。

（ん？）

コーナーで違和感を覚える瞳。

（今、NSXの動きが……気のせいかな）
と考えをまとめる瞳。

加速していくNSX、流石にストレートでは排気量が2倍以上あるマシンには追いつけない。

だが、コーナーでは軽量なハチロクが一瞬ながら、ブレーキのタイミングを遅らせられる。

それも、瞳のテクニクがあつてこそだ。

一方逃げる直登も作戦が無しに逃げているわけではない。
彼なりの作戦を練っているのだ。

それは彼なりに瞳を評価、分析した結果で実行している。

そして、作戦は今も着実に進行している———

バックミラーに映るハチロクを見て、ニヤリと笑う直登。

（さあ、どこで仕掛けるか———）

＊

頂上ではそんなことなどわからない自動車研究部＋αが話し込んでいる。

「で、結局のところ、香織さんは五連続ヘアピンでなにかあると予想しているのか？」

と斉藤。

「そうみたい。でも、香織さんでも予想は難しいと思うよ」
と藤原。

「俺にも直登^{あいつ}がどこで仕掛けるかがまったくわからないから、どうなるかはまったくわからん」

とさりげなく荒畑。

「なにげなく混じってますね」

と横川。

「どうか、いつからいたんですか？」

と何の気なしに訊く涼宮。

「……バトルが始まる直前に来たんですよ」

「ああそうでしたね」

と携帯をいじりながら言う藤原。

（高校生に軽くあしらわれた……）

＊

二台のマシンはヘアピンを抜け、90°。コーナーを抜ける。

そのとき、瞳は違和感の正体に気付く。

（インが空いてる……？）

ほんのわずかだが、微妙にインが空いているのだ。

（攻め切れていない？ それとも、タイヤを労わってる？ どっち

……）

なにはともわれ、隙があるのは確か、瞳は次のヘアピンでも同じなら仕掛ける予定を立てる。

（手前の右をアウトから侵入、そして右でインから抜く……けど行けるかな……）

そして、ストレートの加速。

ここでは置いて行かれるが、次のヘアピンの侵入の前にある少し右に曲がるとこは瞳の得意なポイントの一つである。

直登のNSXが右コーナー侵入前にブレーキ、これはセオリー通り。

一方瞳はアクセルコントロールだけで同じコーナーに突っ込む。

（よし、今のところはいける！）

そのまま左に曲がるヘアピンに侵入。

二台ともスピン寸前でのフルブレーキ。

直登のNSXはわずかにスライド。

（これ以上滑ると……そのままスピンだ……っ）

NSXをはじめとするMR車はグリップ走行でのコーナリング性能は高いが、滑ってドリフト状態に入ってからコントロールの幅が極端に狭い。

それに比べ、瞳のハチロクを始めとするFR車はグリップ走行でのコントロール性能はMRに負けても、ドリフト状態でのコントロールの幅は広い。

二台のマシンは、ヘアピンで横並びになる。

どちらが先に立ち上がれるか。

（無理……っ）

瞳が本人でもわからないうちに舌打ちをする。

車で一番の重量物であるエンジンを運転席の真後ろに搭載しているMRは、トラクションがかかりやすくコーナーの立ち上がりなどは強い。

MRのトラクション、それに加えてNAエンジンならではのリニアな加速を利用して瞳より先に立ち上がる直登。

(やっぱ……タイヤを労わっているのか)
と結論づける瞳。

＊

頂上では荒畑が仲間からの連絡を受けている。

「ああ、わかった。ありがとな」

通話を切り、自動車研究部に伝える。

「今、ハチロクが仕掛けたらしいが、直登が抑えたらしい」

「おしかったなあー……」

と横川。

「まあ、まだ先は長い」

と工藤。

＊

二台のマシンが車好きが聞けば興奮必須の快音を出しながら走り抜けていく。

直列4気筒エンジンと、V6エンジン。

本来は音がバラけて、あまりいい音はしなないと言われているが、ハチロクに搭載されている4A-GEU。NSXに搭載されているC32B改 3.5リッター。

この二台の音は、不思議なほどの快音を出して榛名山を下っていく。

音だけ聞けば気持ち良いかもしれないが、走行しているのを見ると、二台の激しい接戦に気持ちよさがかき消され、興奮一色になるだろう。

（どこで仕掛ける……）

正直瞳は、直登についていくのにやっとだった。
マシンの差も大きいが、なにより腕の差もある。

前の直登のNSXは、とんでもないほど気持ち良い加速をする。
ドリフトでもない限り、ほとんど空回りホイールスピンをしないのだ。

（かなりアクセルを踏み分けてる……）

瞳は目の前にNSXの走りに恐ろしいものを感じる。

——改めて、勝てる気がしない。

そう思う瞳。

だが、負けるわけにはいかない。

ギュツ、とハンドルを握りなおす瞳。

必ず弱点がある。

そう思いハチロクを走らせる。

そして、二連続ヘアピン。

二台がフルブレーキで侵入。

（やっぱインが空いてる……！）

瞳は次のヘアピンでいけるのではないかと思いながら、マシンを動かす。

そして、次のヘアピン。

二台のフルブレーキ、ブレーキディスクが熱で真っ赤に染まる。
わずかにスライドするマシンを強引にインに寄せる瞳。

そして、直登のNSXの内側、インは開いている。

（いけるか！？ いけるの————ッ！？）

23話「峠最速の走り」(後書き)

今回はハチロクVSNSSXですが、このバトルは次の話で完結する予定です。

どうなるかは決まっていますが、まだ細かい動きとかは決まっていというorz 早めに投稿できるように頑張ります。

24話「決着、そして最速崩壊」

空いているイン側にマシンをねじ込む瞳。

だが、直登もラインを塞ごうとする。

（ダメか……ッ！）
と思った瞳。

（いや、ノーズがッ！）

わずかながら、マシンのノーズが直登のNSXよりイン側にあつた。

これにより、イン側の主導権は瞳のもの。

だが、加速で抜かれるかもしれない。

そこで、ぶつけない程度で直登のラインを塞ごうとする瞳。

その甲斐があつてか、瞳はインからギリギリで抜き去ることに成功した。

一方抜かれた直登の顔には、笑みしかなかった。

＊

頂上では、瞳が直登を抜いたという情報が伝わっていた。

「ついに抜かしたね」
とそわそわと藤原。

「だが、直登さんがこんなに簡単に抜かれるのか？」

と工藤。

「工藤、今はそんなマイナス思考はやめよう……」

と涼宮が不安そうな顔で言う。

「いや、工藤の言うとおりだ。直登^{あいつ}がこんな簡単に抜かれるとは思えない」

と荒畑が工藤のことをフォローする。

「ということは……まだなにかあると……？」

と藤原。

「だろうな……」

と、二台が走り去って行った道を見る荒畑。

＊

ハチロクが先行して高速セクションへ侵入。

高速セクションではパワー、空力などの面でNSXが有利だ。

だが、それもテクニクがあって生かされる。

瞳は最小限の角度で^{スライド}コーナーを抜ける。

対して直登はマシンをスライドさせず、グリップ走行で駆け抜ける。

二台とも、アウト側、ガードレールに掠めるようにコーナーを脱出。

すぐに右に切り返し。

微妙な角度で曲がるコーナー。

それを巧みなハンドル、ペダルさばきで駆け抜ける二台。

そしてヘアピン。

二台のマシンがフルブレーキで侵入する。
ここでの状況の変化はなし。

（ここでもなにもしてこないなんて……諦めた？）
と瞳は直登の走りを不思議に思う。

そしてストレート。

ここであるのではないかと心配をした瞳だが、直登は抜きにかからず、瞳の後ろに貼りつくように付いてくるだけだ。

（ストレートで仕掛けるのは得策ではない、第一、パワーだけで勝ったと思われるのは癪だ）

と直登は頭の中でシュミレーションを立てる。

そして、ストレートの後のヘアピン。

ここでも直登はなにも仕掛けてこない。

微妙に飛び込んできたようにも見えたが、瞳は気のせいと思い、今は前に集中する。

ここから90°曲がるコーナーが連続する。

そこを二台は駆け抜ける。

ここでも瞳はドリフト走行。

直登はわずかにスライドさせる走行。

そして、五連続ヘアピン。

瞳の中では、直登レベルのドライバー相手に五連続ヘアピンで仕掛けてきたのはいない。

だが、あの直登なら仕掛けてきてもおかしくはない。

＊

「五連続ヘアピンに侵入してきているそうだ」

と頂上で仲間の連絡を受けて自動車研究部の面々に報告する荒畑。

「こっちも、香織さんから音が聞こえるってメールが来ました」

と携帯を閉じながら藤原。

「こっからが勝負だな……」

と、わずかに音がするほう——二台が走りぬけて行った方を見つめる斉藤。

＊

一つ目のヘアピンは、特に変化無し。

（やっぱ、ここでは来ないのか……？）

と不安そうにミラーを気にする瞳。

だが、ヘアピンはまだ四つある。

二つ目のヘアピン。

アウトにマシンを降る直登。

わずかにスライドの角度を増やしてラインを塞ぐ瞳。

直登も無理には抜かず、一旦引く。

（やっぱ来る！）

そう確信する瞳。

一気に戦闘モードに切り替わる。

三つ目のヘアピン。

瞳が少しラインを塞ぐようにして、直登が抜きにくるのを防ぐ。

直登もピッタリついてくるだけにしている。

四つ目のヘアピン。

ブレーキングで直登が離れる。

（諦めた……？）

そのまま加速する二台。

そして、最後のヘアピンの前に変化が起きる。

侵入で離れたはずのNSXが、立ち上がりで猛烈な加速をしているのだ。

（まさか、立ち上がり重視にするため！？）

基本的にコーナリングはアウト・イン・アウトというように抜けていくが、時にはイン・イン・アウトや、イン・アウト・アウトのように早くアクセルを開けられるように侵入を犠牲にするときがある。

このように仕掛けてきたということは、ヘアピンの間のわずかなストレートでもスピードを稼ぎたいということ。

そのように瞳が気付いた時には、NSXのノーズがイン側に入ってきていた。

その直後、ブレーキング。

完全にNSXがイン側を取る。

瞳が抵抗するも、綺麗にマシンを曲げ、加速させていく直登。

前と後ろが入れ替わる。

（こんなところで……ッ！）
と前に出たNSXを睨む瞳。

そして五連続ヘアピンの間よりわずかに長いストレート。
パワーの差でさらに離される。

だが、次のヘアピンで追い付ける。
そう思っていた。

だが――――

（走りが……違う……）
今までの走りとは、動きが違いすぎる。

（今まで本気じゃなかったのか……）
それはつまり、『瞳を油断させられる程度遅くて、瞳に抜かれても離されない程度速く走る』というように器用にスピードを調整していたのだ。

自分の技術をフルにつかって走るのは誰でもできる。
だが、『ある程度抑えて、ペースをそろえておく』というのは難しい、それこそプロのドライバーの技術に近い。

（化け物レベル……俺では勝てない……）

だが、まだなにかがあるかもしれない、そう勇気づけてアクセルを踏み込む瞳。

それをミラー越しに見た直登は。

（無理だ瞳、技術うんぬんの話ではなく、その精神状態では無理だ）
もはや崩れかけたモチベーションを強引に組みなおしたようなものの、この状態でコーナリング勝負で負ければ、あっという間に減速するだろう。

（俺もそうだった、今の瞳に足りないのは負けから学ぶことだ、そ

れさえ越えれば俺を超えられる)

そして、直登の本気のブレーキングからのターンイン。
わずかに瞳が離れる。

それだけで十分だった。

瞳のハチロクが離れる。

その瞬間、横谷瞳の負けが確定した。

——————峠最速のハチロク、ハイスペックキラー高性能車殺しが負けた瞬間だった。

＊

頂上では。

「五連続ヘアピンの最後で、ハチロクが抜かれたらしいぞ」
となるべく冷静に伝えようとする荒畑。

それでも自動車研究部の面々は驚きを隠せない。

「うそでしょ……」

とつぶやく藤原や。

「やっぱりな……けど五連ヘアピンの最後か……直登さんの速さを
考えると……くそッ……」

と頭を掻きながら言う工藤。

「タコ……抜き返せるかな……」

と涼宮が言うも、それに対する応えは無い。

＊

ゴールしていくNSXを後ろから見つめる瞳。

マフラーからアフターファイヤを出しながら停車する直登のNSX。

その後ろにつけるように停止させる瞳。

「……お疲れ様だったな、瞳」と直登。

若干言葉が場違いなのは、おそらく、自分で負かせてしまった妹にこういう声をかけていいかわからないのだろう。

「やっぱ速いね」

と、精一杯笑顔を作って言う瞳。

「お前もなかなかだったぞ」

と無表情で返す直登。

「でも……ね」

と言ったところで瞳がプルツと震えた。

「……悪い瞳、やらないといけないことがあるから帰るな」

と言って、NSXに乗り込み走り去っていく直登。

NSXが完全に見えなくなったところで、瞳の目から塩辛い液体が漏れてきた。

＊

「どうする、迎えにいくか？」と荒畑。

「ここは行ったほうがよさそうですね」

と、いつつ愛車のランエボに乗り込む工藤。

「なんか泣いてそう……」

とFZのドアを開けながら涼宮。

自動車研究部と荒畑の車両の集団が、榛名山を下っていく。

＊

ゴール地点でハチロクのボンネットに座るようにして泣いている瞳。

（くそっ、なんで涙が止まらないの……これでみんなが降りてきたら……）

と思いつつも、涙や鼻水が止まらない瞳。

その直後、頂上から複数の車が下ってくる音がした。

（早く……泣き止まないと）

と思いつつ、気持ちを落ち着かせる。

だが、そうしているとバトル中、もっと考えて動けばマシンな結果になったかもしれない局面があったことに思い当たり、それに対しての悔しさからか、また涙が止まらない。

そうこうしていると複数の車が下ってきた。

下ってきたマシンはもちろん自動車研究部の面々だった。

「タコっ！」

と藤原が叫びながら近づいてくる。

もちろん振り返らない。

「ねえ……泣いてるの？」

と恐る恐る訊いてきた藤原に対し瞳は。

「泣いてないもん……」

と、自分でもアホとしか思えない言い訳を言う。

その後。

「瞳ッ！」

と言いながら、いつの間にか下ってきていた香織が瞳に声をかける。

それにも反応しない瞳に対し、香織は優しく瞳抱いた。

24話「決着、そして最速崩壊」（後書き）

遂に瞳が敗北、言い方はあれですが、何故NSXが勝ったのかと言え、単に作者の好みですww 他の車も好きですが、やはり一番好きなのがNSXでして……w

ですが、いままで瞳がバトルしてきたマシンが遅いというわけではありません、今回はドライバーがチートすぎただけです。

次回からは瞳の復活——じゃなくてサブキャラクター、工藤や藤原、香織などのバトルでも書こうかなと思っています。

25話「最速へ戻るため」(前書き)

投稿が遅れて本当にすみませんでした……次回からはもっと早く投稿できるように頑張ります。

25話「最速へ戻るため」

横谷瞳が敗北した次の日。

いつも通り早朝に起きて自分と姉と居候の分の朝ごはんを弁当を作ろうとした。

だが、キッチンにいくと。

「あ、おはよう。瞳」

と姉の香織が話しかけてきた。

「なんでこんなに早く起きてるの？」

「いつもいつも瞳に任せるのは悪いでしょ」

と言った支度に戻る香織。

（ま、姉貴がやるって言うてるし。俺の休憩できるからいいか）
と思い、寝室へ戻ることにした瞳。

寝室に戻った瞳だが。

『あ、香織さん。手伝いますよ』

と部屋の外で藤原の声。

あれ？ と瞳はなにかに引っかかりを覚える。

（なんかあったような……？）

だが、大したことではないだろうと、すぐに思考を止める。

その後、30分ほどだがもうひと眠りした瞳だった。

＊

その後朝食を食べて、支度を整えて、登校する瞳と藤原。

「いやー、やっとな夏休みだよ」

「もうかあ、あんまり実感ないな」

と言ったあと、瞳が携帯で時間を確認すると。

「やばっ、いつもより遅い……電車言っちゃうかも！」

「え、うそ!？」

と藤原が訊き返そうとした瞬間には瞳はダッ、と走りだしていた。

「ちよっと、待ってええええええええええ!!」

と叫ぶも先に行ってしまう瞳。

それから小走りで駅についた藤原が電車に乗り込んで、数十秒くらいで電車のドアが閉じて発進した。

「はあはあ……セーフ……」

というつつ自分の身だしなみを確認する藤原。

藤原が電車内を見渡すと、瞳がゼーゼー言いながら座席に座っていた。

乱れた髪や制服を直していない辺り、いまだに女性になり切っていない感じを受ける。

「つ……疲れた」

と言葉を漏らす瞳。

その横に座ると同時に、電車の車両と車両の間の連結部のところのドアを開けて瞳達の車両に見慣れた顔が来た。

「工藤……」

未だにクターっとしながら言う瞳。

「なんか見慣れた女子が二人、走ったきたからきてみた」と妙なことをいいつつ近づいてきて。

「乱れた横谷もいいぞ」

と言葉だけなら綺麗に見えるかもしれないが、実態はザ・変態な顔で瞳の頭に手を置く工藤。

「触んな！」

バチッというよな音を立てて瞳は工藤の手を叩いて振り払う。
本来ならかなり痛そうな音だが――

「いいぜえ、瞳。痛くて気持ちいい！」

「もうお前怖いよっ！」

「本当に犯罪起こす前にその精神を改めた方がいいよ……」
と哀れな目で言う二人。

次の駅で涼宮と斉藤と横川が合流して、工藤のことを哀れな目で
見るものがまた増えた。

「工藤、前々から思っていたんだが」
と斉藤。

「良い病院知ってるから、そこに行った方がいいぞ」

「なんてこと言うんだ！」

と工藤が反論。

そこに涼宮が。

「そうだよ。工藤を受け入れてくれる病院なんてないよ」

「そうだな……ごめんな。力になれなくて」

と頭を下げる斉藤。

横川は見る意味すらないという風に

「お前ら酷すぎる……」

ズーン、と凹んでいる工藤。

その後、学校についた瞳達。

「夏休みかー、やること大して決めてないなあ……」

と呟きながら全校集会をやる体育館に向かう瞳。

「いやいや、やることはあるでしょ」

と横川。

「なに？」

「ドラテクのアップとハチロクのチューンでしょ？」

「ああ……そっちね」

瞳のテンションが下がり、横川が、しまった……と後悔する。

「あ、気にしないでいいよ」

と瞳が返したものの、その顔は暗かった。

それから、校長などの長い話、生徒の間には「とっとと終わらせて帰らせてくれ」というオーラが広がる体育館。

だが、それも終わってホームルームを済ませば夏休み。

それを頭の中で念じている瞳。

そのうちに、必要あるかが不明なことも終え、教室に戻ることになった。

「毎年毎年思っただけど、校長ってよくあんなに長く話すことがあるよね……」

手をうちのわの代わりのように振りながら言う藤原。

「きつと、何カ月も前から考えているのよ」

とこちらも暑そうに涼宮。

「おかげで髪結んじやったよ」

とポニーテールの瞳。

「似合ってるぞ（くんくん）」

と瞳の髪の毛の匂いを嗅ぎながら工藤。

「なにすんじゃあああああああああああああ！！」

と勢いを付けて振り返りながら肘鉄をくらわす瞳。

屍のように黙りこくった工藤は斉藤が連れて行って、無事に教室に付く。

その後、いろいろプリント類などを受け取ったりして帰宅となった。

もちろん、部活がある者は部活に部活に出るが、瞳達、自動車研究部はほぼフリーダムに活動時間を決めているため、そのまま帰宅することに。

「……？」

瞳が首を傾げている。

「どうしたの？」

と不思議そうに藤原。

「……あっ!？」

と言ってカバンを開けて、中身をゴソゴソして――

「授業午前中だけなのにお弁当作ってきちゃったじゃん……」
とカバンから弁当箱を取り出す瞳。

瞳が持っている弁当箱を2秒ほど見つめて、それから自分のカバンを見つめて。

「誰が作ったの……？」

「あんたらだッ!」

と瞳が尽かさずツツコミ。

それから十分後、瞳達は学校から最寄りの駅にいた。

「まったく……余計な荷物を持ってきちゃったよ」

と藤原。他の自動車研究部の面々は笑っている。

「けど、よく面倒くさがりなサオがお弁当を作ったよね」
とクスクス笑いながら涼宮。

「いやー、いつもタコにまかせっきりだから、たまにはいいかなって」

「へー」

口ではそう返しつつ、心の中では「なんて露骨な慰め方だろう…

…」とツツコンでいた涼宮。

話題を変えるように横川が。

「ところで、今日は夜に榛名山にいくの？」

「そうだね、今夜の10時に榛名山に集合！　ってことでどう？」

「「「「……」」」」

全員無言。

「……。異論はないということで。今日夜10時に榛名山に集合！
全員無言をそのように受け取る藤原。誰もなにも言わないので問
題は無いようだ。

＊

家に帰って昼食に弁当を食べる瞳と藤原。

「まったく……誰か気づいてもいいだろうに……」

と藤原。

「いやいや、お前が気付くべきだったろ……」

という会話をつづけている二人。

それから数分後、言い争いともいえない微妙な会話は、食事の終
了とともに終わる。

＊

その日の夜、榛名山。

「結局、あの後昼寝しちゃった……」
と藤原。

瞳との昼食のあと、瞳が片付けに出た時に寝てしまったのだ。

「そのうち牛になっちゃうかもねえー」
と適当に返す涼宮。

それでも落ち込む藤原。

「牛……あたし、牛になっちゃうんだね……モー」

「なにこいつ怖い」

とツツコム工藤。

峠を疾走する一台のハチロク。

コーナー手前でブレーキランプが点灯。

荷重が前に掛かる。

リアタイヤから荷重が抜けて、グリップ力を失い滑り始める。

瞳はそのままドリフトに持っていく。

魅せる為のドリフトではなく、早く走るためのドリフト。

最小限のカウンターステアで、立ち上がりの時、道との角度が平行になるように調整する。

ハチロクがインのクリップについて、アウトに膨れてくる。

ガードレールとバンパーが触れ合うか合わないかのところでスライドが止まる。

そしてアクセルを踏み込む。

1. 6リッターのエンジンとは思えないような加速をするハチロク。

それは軽さと高回転を維持しているからである。

どこを見ても完璧にしか見えない、だが。

（どこか違う……）

と渋い顔をする瞳。

（やりたくなかったけど、やっぱアレをするしかない……）

そう思いながら、次のコーナーに侵入していく瞳。

夏休み初日。

榛名山を走った後、帰ってきてそのまま寝てしまった藤原と瞳。

夏休みはどうかかわからないが、いつも通り瞳が朝食を作っているかもしれない、そう思い台所がある一階に下りる藤原。

香織はまだ寝ているようだ。香織の寝室から寝息が微かに聞える。

(……微かに?)

なにか引つかかる藤原。

台所まで行くが、誰もいない。

そもそも、誰かが起きているなら物音ぐらいするはずだ。

それなのに、今は寝息——オヤジのようなうるさいものじゃなく、スースーというような——が聞こえる程度静かだ。

(寝てるのかな……)

と思いつつ瞳の部屋に行く。

瞳の部屋のドアはわずかに開いていた。

それを閉めようとして気付いた。

誰もいない。

本来なら瞳が可愛らしい寝息を立てて寝ていると思っていた藤原は驚く。

途中に前を通りかかったトイレには誰も入っていなかった。

恐る恐る部屋に入る藤原。

「タコ——いる——……?」

と言っても誰もいない。

そして、机の上には書き置きが置いてあった。

25話「最速へ戻るため」(後書き)

投稿遅れてすみませんでした。なんか書こう書こうと思っていてもなかなか書けずに気が付いたら……

今回は書きかたを変えました。瞳の一人称より三人称のほうが良いなら、感想とかで教えてください。

あとついでに、絵師さん募集中です。練習で描いてみたい、とかでも全然歓迎です。

もしかしたら今回のようなこともあるかもしれません……その時は活動報告を書くかもしれないので、そちらを確認してくださいさればどうなっているか書いているかもしれません。

26話「失踪の理由」(前書き)

26話「失踪の理由」

瞳が失踪した。

そう思った藤原は走って香織の部屋の前に行き。

「香織さん！ 香織さん！」

とドアを叩きながら言う。

「まだ夜這の時間じゃないわよ……」

「そんな時間過ぎてます！ 第一目的が違います！」

「ふふ……沙織ちゃんもついに——」

「ふざけてないで話を聞いてください！」

「まったく……今日は8時まで寝てな○はシリーズを全話観ようと思っていたのに……」

「若干無茶だと思えます！！」

「で……用事は？」

「タコが行方不明です」

「部屋でなにかしてるんじゃない？ ……ふふふ」

「最後の『ふふふ』はなんですか！？ じゃなくて、部屋にもどこにもいないんです！」

と言った直後、ガタツ、とドアが開き。

「なんですか？」

「ホント……どこにもいないんですよ」

「ガレージにハチロクはある？ いや、その前に」

香織は携帯電話を取り出して電話をかける。

5コール目で相手が出た。

『……もしもし？』

相手は工藤、

藤原は香織の耳元に耳を寄せる。
周りが静かなので相手の声もよく聞こえる。

「ねえ、工藤君。素直に話さない。瞳をどこに隠したの？」

『なんでそんな話になってるんスカ！？』

その会話を聞いた藤原も。

「工藤……タコが可愛いのはわかるから、早く場所を知らせて、今なら警察に言わないから——」

『なんのことだかさっぱりわからないんだが……』

「あんたがタコを誘拐したのは推測できるんだから！」

『だから知るか！』

「工藤君……瞳を襲うなんて……」

と香織が悲しみを含んだ声で。

「襲うなら私も誘いなさい！！」

「とりあえず香織さんは話が滅茶苦茶になるので黙っていてください！！」

と言って携帯電話を強引に奪う藤原。

藤原が携帯を耳に当てると。

『はぁ……はぁ……二人なら襲っていいんですか……？』

「あー！　　どいつもこいつも！！」

数分後、事情を説明してから再度話を聞く。

『だから、昨日の夜は寝てたから横谷をさらうなんてできねえよ』

「うーん、信じるしかないか……」

『てか、横谷が真っ先に居なくなって俺を疑うなんて……お前らは……』

「いやー、香織さんが真っ先に電話しちゃって」

『まったく……ところで、横谷探すの手伝おうか？』

「いやー、まだどうなったかわからなから、必要になったら電話す

るよ」

『わかった』

と言って電話が切れた。

携帯を香織に戻そうとして、香織がいないことに気づく藤原。

あれ？ などと言いながら首を回して探していると、香織が階段を上がってきた。

「ガレージに行ってきたの、ハチロクごとなかったわ……」

「じゃあ、あたし達に黙ってどこかに出かけたんですかね？」

「でしようね」

＊

俺こと横谷瞳は愛車のハチロクで国道を走っていた。

父親の友達のチューナーにハチロクのチューニングを頼むためだ。

あの二人になんにも言わないで出てきたのは、単に面倒くさいだけだった。

あいつらに言ったら「あたしも連れて行って！」って騒ぎだすだろうからな。

それに、チューニングしてくれるおじさんの邪魔になっては困るし。

車で走って一時間程度。おじさんが経営しているショップに到着。

「あ、瞳ちゃん」

と出迎えてくれたのは父親がレースをする前、中学時代からの親

友の高城直洋さん。たかぎなおひろ

「どうも」

と返事をしつつ車から降りる。

「じゃあ、いきなりですみません」

と言ってキーを渡す。

「はい。じゃあ、前相談した通りにやっておくよ」

「ありがとうございます」

「帰りはどうすんだい？」

「近くにあるバス停から帰ります」

「なんなら駅まで送って行こうか？」

と勧められたが。

「いえ、ハチロクのチューンの費用で負けてもらっているのに……」

「大丈夫だって」

と言われて「ついてこい」とでも言うように歩きだしたので追いかける。

「この公道でのテスト走行も兼ねてるから」

と言っておじさんが立ち止まった近くにある車は。

「ポルシェ911？」

「正確にはポルシェ911RSだけどね」

確か997のRSだから……というか。

「高かったんじゃないんですか……？」

中古でも普通に一千万はオーバーしているマシンだしな。

「いや、ウチのじゃなくて、お客さんの車だよ」

「そうなんですか……」

どっち道、俺は運転したくない。

「じゃあ、瞳ちゃん、運転して行く？」

「お断りします」

「はは、じゃあ行こうか」

と言っておじさんが乗りこんだので、俺も助手席に乗る。

どうやら俺がいなくてエ○ア初号機のように暴走してしまったようだ。

それから家に帰ること数十分後。

「おかえりー……」

とボロボロになった藤原の姿。

衣服の乱れかたから想像するに、激しいことをしたみたいだ。

「ささ、二階へどうぞ」

と言われて恐る恐る二階に行く。

そして、真っ先に目についたのは姉貴の部屋だ。

表現するなら、漆黒のオーラをまとっている。

「あのー、お姉ちゃん。帰ってきたよおー……」

と言ったら、ドアがキィ……と言う音を立てて開く。

そしてガシッ、と万力の力で俺を掴んだと思ったら、部屋に引きずり込まれたのだ。

その後、どこぞの上条さんよろしくお説教されたのは言うまでもない。

＊

「まったく、私は出掛けるなら出かけるって言えば、なんにも言わないのに」

と未だにプンプン言っている姉貴。

ここで反論しても意味がなさそうなので言いたいことはあるが我慢する。

「しかし、タコがハチロクのチューンなんてね」と藤原。

「そろそろ足回りとかが古くなってきたからオーバーホールじゃなくて新しいのに換えたほうがいいかなって」

「ちなみにどのくらい時間はかかるの？」

「えーっと、ボディ本体も見直すから2週間程度かな」

「……相当走れないじゃん」

「いや……そこはスルーして……」

逆に言えばそこまで時間を掛けないとこれ以上の速さに持っていない。

「まー、たまには自分の車と距離を置くのもいいことよー」

とさっきまでの暴走はなんなのかと訊きたいほど落ち着いている姉貴。

*

その日の夜、いつも通り榛名山に集合した俺達。

「だからS2000に乗ってきてるんだね」

と涼宮。

「にしても懐かしいなあ」

と斉藤。

今俺が乗っているS2000は中学校のときにチューンしたものだ。

今でも一週間に一回はエンジンを掛けていたのでしっかりと動く。

「……」

みんなで騒いでいる中で一人むっとりしているのが居た。

「工藤、どうしたの？」

うつむきながら工藤が。

「だってさあ……」

「だってさあ？」

「なんで俺のことを誘拐犯扱いするんだよ！！」

「……いや、いつも言動とかを見てるとね」

と俺が答えると。

「ということは、横谷と既成事実を作ってしまったえば『もう、誘拐なんてしなくてもいつも一緒だもんね！』みたいな感じに———ガハッ」

途中、工具で殴っておいた（良い子の皆さんは真似しないでね）。

「そんなことばっか言ってるから疑われるんだ」

と言って工藤の屍を見る。

「はは……これが俺のアイデンティティなのにな」

とかすれた笑い声で言う工藤。

ロクでもないアイデンティティだな。

それから二時間ほど走り、帰宅することになった。

＊

ちょうどその頃、榛名山の中腹ほどのところにある——ちょうど三車線になっている道のところ——に新たなライバルのマシンが止まっていることに、瞳達は知らなかった。

26話「失踪の理由」(後書き)

投稿遅れてしまいすみませんでした。

とりあえず次回からバトルの序章のような感じで、次のライバルが出てきます。

今度のマシンは直6エンジンを載せたあの車です。

そして、瞳がバトルするとは限りませんよw

27話「4WD対決」

榛名山を下るマシン、前から瞳、涼宮、藤原、横川、斉藤、工藤というようにつながっている。

特に順番には意味はないのだが、下りでは瞳が先頭になってしま

う。
S2000でも十分な速さを秘める瞳だが、仮にここでライバルが現れたとしてもバトルする気はない。

＊

それから少し下ったところで一台のマシンが止まっていた。
スカイライン GT-RのBNR32型だ。

以前、瞳の兄の横谷直登が乗っていたのと型式はほぼ同じだが、色やチューンの度合いが違う。

直登のBNR32は白、こっちはシルバー。

そしてチューンも見た目からして違う。

直登はカーボンボンネットやGTウイングを装備していたり、見えないところでは排気量アップで2.8リッター化していたりしたが、このBNR32はタービン交換やサスを変えてある程度だ。

それでも、GT-Rは市販時よりも格段に高い性能を発揮できる、チューニングされるために生まれた車と言っても過言ではないだろう。

上から自動車研究部のマシン達が下ってきた。

＊

真っ先に止まっている車——先程紹介したBNR32——に
気付いたのは先頭を走っていた瞳である。

（トラブル：？ いや、バトル^{やる}する気？）

瞳の本能がそのマシンから発せられるオーラのようなものにな
かを感じ、ペースを上げる。

久しぶりに乗るS2000で慣れていないこともあり、いつもの
8割程度でしか走れない瞳の後ろにぴったりと涼宮、藤原、横川が
ついてくる。

だが、自動車研究部の中でもあんまり運転が上手でない斉藤が出
遅れる。

それに引かかるように工藤も出遅れる。

そのせいで後ろから近づいてくるBNR32のヘッドライトが近
づいてきた。

斉藤をパスしたが、ペースを上げない工藤。

（ここは、軽くバトルするか…）

ここで突っかかってくる正体不明のマシンに対し対抗意識を燃や
した工藤は、挑戦を受けて立つことにする。

案の定、斉藤をパスして近づいてくるマシン。工藤は初めて車種
を確認する。

（BNR32か…でも直登さんでは無いな）

工藤のマシンはランサーエボリューション？、前は？を乗りまわ

していたが瞳の性転換の直後に買い替えたばかりだ。

あんまり金は掛けておらず、タイヤ、ホイールを変えてブーストアップにマフラー交換、そして少し足回りを強化したくらいである。

いつも瞳を追いかける情熱、もとい変態行為で知られていないが、工藤は下りはともかく登りでは自動車研究部でも1，2を争う速さである。

下りでも並みの走り屋を凌駕する速さも持っている。

＊

ランサーエボリューションといえばコンパクトな車体に4WD＋ターボエンジンというコンセプトのもとに作られている。

そもそも、三菱がラリーに出る為に作ったと言っても過言ではない

初代などは欠点が多かったが、名機、4G3Sを積む最後の型となっている？の完成度は市販時から高い。

そのランエボを操る工藤は、後ろにピッタリとついてくるGTRを見て、アクセルを踏み込む。

（ストレートだとしっかりついてくるな…。流石GTRといったところか）

ランエボも350馬力ほどあるが、相手のGTRはそれを凌駕している。

（400馬力ってどこか…でもそこまでチューンはしていないか…）

GTRもブーストアップにその他もろもろで400馬力は簡単にいく。

ヘアピンが近づく。

(行くぜッ！)

と心の中で言い、フルブレーキング。

一瞬ハンドルをコーナーとは逆に切り、すぐに戻す。

そうすると、ランエボはわずかにスライドしながらコーナーに侵入していく。

今のはフェイントモーションというテクニックで、コーナーの侵入時に一瞬、コーナーと逆にハンドルを切りすぐに戻すという動作でスライドを起こしてドリフト状態にもっていくというものだ。

カウンターの当てない程度にスライドさえながらアクセルを踏み込む。

流石に今の突っ込みにはついていけないようで、GTRが離れる。

ランエボがコーナーを立ち上がり加速していく。

瞳が乗っているハチロクのFRやGTRのアテサーETSとも違う、真正正銘の4WDだ。

旋回性能は負けるかもしれないが、安定性能や加速性能は高い。

ランエボがロケットのように加速していく。

後ろからGTRもついてくる。

GTRはアテサーETSというシステムを搭載しており、基本はFRだがコーナーの立ち上がりなどで4WDとなる可変型4W

Dなのだ。

F Rと4 W Dのいいとこどりのシステムだが、ターマックの路面ではあまり前輪にはトルクは配分されていない、アクセルワークでアンダーステアを出さないためにだ。

さらに基本的にはF Rなため、どちらかといえば「F R車をラフに運転してもある程度補助してくれる」というのがアテーサE T－Sだ。

だがその効果で「運転がうまくなった、速く走れている」と勘違いする場合も多々ある。

もちろん、限界での動きなどを理解している『本物のR乗り』は他の追隨を許さないほどの速さを誇る。

大して工藤のランエボはフルタイム4 W Dだ。

だが、ランエボ？にもスーパーA Y Cというものがついている。

これは後輪左右の車輪のトルク配分を調節して、旋回性能およびトラクションを高めるというものだ。

だがこのシステムは、駆動していないと意味がないという弱点があった。

だが、先代のA Y CからスーパーA Y Cは加減速に関係なく駆動配分ができるようになった。

それが意味することは、いかなる状況でも旋回力の制御ができるようになった。

ランエボの後ろからくるR 3 2は、相手のレベルがわかったかのように、さらに接近してくる。

これは相手の速さがわからないとできないことである。

低いレベルの相手に不用意に近づくと、ブレーキングミスなどで追突などの恐れがあるからだ。

（一発で俺のレベルを見切ったか……にしても、いきなり後ろにピッタリなんて、そうとう相手のことを信賴しているのか？）
と思いつつ加速させる。

（けど、どの辺までその距離を維持できるかなッ！）

またしてもヘアピン。

ランエボとGTRがフルブレーキング。

若干GTRが遅れる。

ランエボはグリップ走行でコーナーを抜ける。

アフターファイヤを吐き出しながら加速。

その後ろを追うGTR。

このさきは90°コーナー、そして五連続ヘアピンである。

90°コーナーに侵入。

工藤がミラーを確認すると、先程ほどではないが、まだGTRはついてきている。

だが、この先の五連続ヘアピンで差を広げられる。

そう思い、90°コーナーではあまりプッシュしなかった。

そして、五連続ヘアピン。

工藤は微妙にテールスライドさせてヘアピンを抜ける。

GTRは置いて行かれる。

――だが。

（思ったより離れねえ！）

初めて工藤が焦る。

ここで離せなかったのは誤算だった。

このままでは最後の高速セクションで追い付かれてしまう。

それに――

（タイヤがまずい…）

先程からタイヤの手ごたえに違和感を感じる工藤。

このままでは抜かれてしまう可能性も。

（こんなことになることになるとは思わなかったからな……安いタイヤのままだったのが悪かったか……ッ！）

と、焦り始める工藤。

高速セクションでBNR32のヘッドライトが近づいてくる。

次のコーナーまで持ちこたえられるかが勝負になる。

だが、次のコーナーは高速コーナー。

仮にストレートで耐えてもコーナーで抜かれるのではないか。

そう考えてしまい、不安が募る工藤。

次のコーナーが闇から浮かんてくる。

――BNR32が並びにかかってくる。

27話「4WD対決」(後書き)

最初に、こんなに遅くなってしまいすみませんでした！

ツイッター等にハマっていたところ、こんなに遅くなってしまいました。

次こそ早く…と言いたいところですが、グランツーリスモ5の発売にテスト期間も近いのでまた遅くなりそうです…本当に申し訳ありません。

28話「新バトル」

横に並ぶBNR32。

工藤のランエボ？は、加速で若干劣っています。

そして、若干の差は実戦では大きすぎる。

そのまま前に出たGTR。

GTR独特の丸いテールランプを睨む工藤。

睨みはしたが、工藤はGTRを追うことはしなかった。
正式にしたレースでもないし、抜かれた以上負けということだから。

GTRが減速を始めた。

工藤が追ってこないことから、バトルは終わったのだと判断したのだろう。

＊

先に下っていた俺達は、ゴールから少し離れた地点で工藤を待っていた。

先に下って待っているのは俺、藤原、涼宮、横川、さらに遅れて下ってきた斉藤だ。

耳を澄まさなくても聞こえるほどの音を立てながら、二台の車が下ってくるのがわかる。

一台は工藤のランエボ、もう一台は音からして6気筒だろう。少なくとも4気筒とは思えない。

まもなく降りてくる、そう思った直後に二台のマシンが現れた。

先頭が見たことのないR32型のGTR。

次が工藤のランエボ？だ。

仮に工藤が本気で走ったとしたら、抜かれたということになる。

ゴール地点から少し離れたところ――俺達とゴール地点の間に二台が止まった。

*

工藤が先に降りて相手を確認する。

中にいるドライバーは割とゴツイイメージのGTRとか異なり、男か女かも微妙な男性だった。

（こいつ、どこかで見たことあるぞ）

と思いつつ降りてくるのを待つ。

少し離れたところでエンジン音が聞こえた。瞳達が動き出そうとしたようだ。

そのときドライバーが降りてきた。

女性にも男性にも見える、中性的な男性だ。

しかし、男性というより男子や少年と言った方がいいかもしれない

い。

年は工藤達と同じくらいだろう。

(やっぱ知らない奴か?)

と、工藤は引っかけかりを覚えながらドライバーを見つめる。

工藤達に近づく、相手のドライバーの顔はどこかで見たことのあるような無いような。

「ねえ……」

と横から小さめな声で藤原。

「あの子、同じクラスのはずんだけど……」
と歯切れが悪そうに藤原。

「そうだったか？」

と返す。

「けど、名前が……」

「その年で物忘れか？」

「タコだってクラスの全員の名前覚えてないでしょ」
とジト目で見てくる藤原。確かにそうだ。

元々クラスメイトに興味がない、というか関わられたくない俺はあまり他の奴を見ていなかった、だから他の人を知らなくてもおかしくはない。

けど藤原や涼宮は俺以外の女子とも普通に話しているのだからいかにも女子ですって奴の名前くらい――。

「あの子、女子じゃないはずなんだよねえ」

*

と涼宮。

「確か、男子のはずだよ」
と、確信を持って言う。

「……え？」

いや、あれはどうみても……。

「私達も変だとは思ってたんだけどね」
とそいつのほうを見ながら藤原が言う。

「タコと見比べれば……」

と藤原と涼宮が俺の身体を舐めまわすように見つめている。それから相手を見直して。

「「うん、やっぱ男だ」」

「「どういう判断基準で判断したんだよ!？」」

「いや、タコは微妙に男子っぽいから……ゴメン、わかったから涙目で見ないで」

「いいさいいさ、どうせ俺はひんにゅーさ」

「謝るから…許して」

ここでグレてもしかたないので、暴りたい気持ちを抑えつつ工藤の相手に意識を移す。

よく見れば、男子に見えるな。うん。

このままやっていると埒が明かなくなりそうなので近づくことに。

近づいてみると、結構男子っぽさもある。

簡単にいえば美少年といったところだ。

それから近づいていこうと思ったが、バトルしたと思われる二人の間に割って入るのも気がひけたので十メートル前後離れたところから観ていることに。

やはり俺には相手のドライバーに見覚えが無い。完ぺきに忘れている。

「誰だっけ……？」

と隣でも完ぺきに忘れているのか、藤原、涼宮、横川、斉藤の4人も首をかしげている。

「おい、誰だかわかるか……？」

と小声で訊いてみるも。

「出かかってるんだけど出てこない……」

と横川。

話しているであろう工藤のほうも、気づいていない模様。
というか話しているのだろうか？

＊

工藤は悩んでいた。

（やっぱ見たことあるよな……てか、あいつらとっと来いよ）
と心の中で仲間を罵りつつ、相手の様子をうかがう。

やはりどこかで見たような、そんな感じの男だった。

と、そんなに遠くないところからエンジン音。

（やっと来るか……）

と正直、このまま沈黙していると胃に悪そうだったので、瞳達に感謝する工藤。

近くまできてこちらに来ると思ったが、十メートルほど離れたと

そう言われてもピンとこない工藤。

（相当存在感が薄いんだろうな……でもそういうのも可哀そうだし、合わせるか）

「ああ！ 思い出した！ いやー、いつも話さないからあんまり覚えてなくてー」

と愛想笑いを浮かべながら、いくらなんでも不自然すぎと思いついて話題を変えることに。

「にしても、お前R32乗ってるんだなー。俺の知り合いも乗ってるけどカッコいいよなー」

我ながらうまい話題転換だ、と考える工藤。

「そ……そう。ありがとう」

やはりぎこちなさが伝わってしまったているようだが、この程度のことには気にしてはいられない。

「ところで、わざわざ来たってことは、横谷と走るためか？」

そう聞いて、返ってきたのは意外な答えだった。

「いや、僕は下りと上りを混ぜて走りたいから。いくら下り最速のハチロクでも、上りまで走らせたら可哀そうだし」

「なん……だと……？」

「だから、工藤君と走りたいかな、って」

28話「新バトル」（後書き）

放置していてすみませんでした。車好きなら知ってるであろうグラ
ンツ―リスモ5の発売があり、そのプレイに夢中になっていたた
め執筆が遅れていました。

次回からは気を付けたいです。

って、いつも言ってる気がするなあ…w

29話「セットアップ」

俺、横谷瞳はよく走り屋に絡まれる。

だからよくバトルするのだが、今回は違う。

俺ではなく工藤がバトルをする。

俺自身がバトルしないとなるのは、涼宮VS大川のとき以来であろう。

涼宮のときはFRのFZ対これまたFRのZ32だった。

今回は4WD同士、ランエボ対BNR32だ。

ちなみに今は、近くのチューニング関係のショップに工藤と二人で来ている。

読者の皆さん。これはデートではない、繰り返す、これはデートではない。

「いやー、瞳と二人っきりでデートなんて……ゲハッ！ ……ごめんなさい」

「まったく、次同じようなことを言ったら記憶を消去するからな」「やめてください。自重しますから」

工藤が自重するとは思えない。

ちなみに今探しているのはマフラー関係と、デフ関係のものだ。

「これか、AYC対応のLSDって」

と工藤が棚の目線よりちょっと下くらいのある段ボール箱を見ながら言う。

ランエボなどに搭載されているAYCに対応するLSDを見ているらしい。

そこから目を移し、別のものを見ている。

AYCのプログラムだ。

ランエボ？ではAYCのセッティンは『速く走るもの』というより『安全性のため』というため、違和感が強いらしい。

そのセッティングを変えられるものだ。ECUのセッティングを変えるのと同じようなものらしい。

そこにAYC対応のLSDを入れることにより、より高い効果が得られるもの……だったはず。

「でも、ここまでやる必要もあるかね」

と言ったら工藤は。

「あそこまでやられたら、やるっきゃないだろ……」
と真剣な顔で言った。

それから1時間と少ししてから店から出た。

パーツの装着はショップに任せているので俺達はS2000でショップを後にした。

「そーいや、お前が女子になったのってこのएसニが原因だよな」
と突然言いだした。

「って言っても、この車は悪くないよ」

「そんならいはわかってるわ。にしてもあれから考えるとかなり穏やかになったな」

自分では自覚はないけど。そうなのだろうか。

「なに？」

「
^
:
:
:
:
?
」

「横谷……お前のことが好——」

「あああああああああああ！！」

皆さんは真似はしないように。

*

それから十数分後、ボコボコになってなにかに目覚めた顔をした工藤を家に送り、家に戻ってきた俺。

「瞳一。おじさんから、ハチロクが途中まで仕上がったって」

ど、やっぱり早く仕上がってるようだ。

それから数日後、工藤のランエボが戻ってきて、セッティングアップ開始である。

元からメカメカしい車ではあるが、AYCのコントロール用の装置など、多少追加されてさらにメカメカしくなっている。

「このボタンで動作量を変えられる。ちなみにこのボタンを押すとAYCはオフになってただのLSDになる」

と頼んでもいないのにボタンを指差しながら解説してる工藤。

「というか、そもそもAYCってなんだっけ？」
と横川。

「そもそもLSDというものの存在を忘れていたよ」
と続く藤原。

みんな、こんな中でも峠を速く走れるんだよ。

工藤は少し呆れたような顔をしながら解説を始めた。

「AYCっつーのはいうのは、左右の駆動差を電子制御してコーナリングをよくするっつーモノで。外側のタイヤにトルクを多めに配分したりして旋回性を上げるようなもんだ。それで、このエボ？にはスーパ－AYCって前のAYCよりもコントロールできるトルクの容量をアップしたのがあって、これにプラスして――」

「工藤、途中で悪いが、あいつら聞いてないぞ」
「なん……だと……？」

と工藤が藤原達を見ると。

「やっぱ新しい車っていいよねー。FCからFZに変えたら燃費よくなったよー」

「えー。でも峠で踏んだらすごいでしょ……？」

「ていうかREで燃費比べるのもアレな気がするよ……」

そんな三人の会話を見た工藤は。

「無視すんなあああああああああああああああ！
！」

そりゃこうなるわな。

工藤の咆哮に大して藤原は。

「聞いてたら何時間かかかると思ってねー」

「俺がそこまで解説してると思ってたのか……！？」

「そんな勢いがあったから」

と言われて撃沈した工藤に代わって俺が簡単に説明する。

「ランエボについてる、AYCというのは、左右の回転差を制御して速いコーナリングをできるようにする装置だよ。それにプラスして前後の駆動を制御するACDっていうものついてさらによくなっただって話だし」

と俺が解説すると横川が。

「じゃさ。GT-RのアテューサETSとはどう違うの？ 直登さんは『前後のトルク配分を調整させて安定させる装置』よか言ってたけど。同じじゃない？」

「いい質問ですねー」

「池上○さんの真似はいいから」

一度やってみただけなのに……。

「アテーサは基本的には0…100のFRで。そこから50…50までの可変なの。ようはコーナリングとかで滑ったときに前輪にトルク配分をするようなもんで。ACDは50…50の配分から制御するものらしいの」

「ようは安定装置と積極的に曲げる装置みたいな差？」

「そんな感じ」

「やっぱり説明は変態じゃなくてタコに聞くべきだねー」と涼宮。

もう許してやれよ、工藤が泣きそうだ。

＊

なんやかんや言っているが、工藤のランエボをセットアップするのが今日の目的だ。

「これでいくか……」

と工藤はAYCコンローラーのスイッチをイジっている。

「コントロールの量を増やしたの？」

「そうそう。これで安定性の代わりに旋回性能が増す」

「じゃ、気を付けてね」

「わかってる」

直4ならではの若干バラけたような音を出しながら出ていく工藤。

＊

工藤のランエボが第一コーナーへ侵入。

予想通り旋回性能が上がっている。

安定性も下がると思っていたが、それほどは下がっていない。
踏み込んでもトラクションはいい。

ストレートだけなら自動車研究部の中でも上のほうの工藤のランエボ。

特にコーナーからの立ち上がりだけでは最速だ。

それは4WDのトラクションもあるし、工藤の走り方もある。

今回工藤が求めているのは旋回性能。

ある程度オーバーステアにセッティングしても大した問題にはならないと踏んでいる工藤。

例えスライドしようがそれを抑えるテクニックがあるから考えられることだ。

（今の感じだと、少しアンダーが強い。下りだけならともかく、上りもあるからこれだとヤベーな……）

と考えつつ、アクセルを抜いてブレーキを踏む。

そして緩やかな右コーナーへ侵入。

工藤はアンダーと言っているが、下りではその辺の後輪駆動車よりも旋回性能は高いレベルにある。

あくまで下りでは。

しかし、上りとなると話は変わる。

下りでは常に前輪に車体の重心、つまり荷重がかかっている。

前輪に荷重がかかっていると、前輪のグリップが確保され、旋回性能が上がる。

逆にいえば、リアの荷重が少なくなりスライドし、スピンする可能性もある。

上りでは、後輪に荷重がかかり、下りとは逆の特性となる。

榛名山は傾斜が大きいので、この差が顕著に表れる。

下りでの安定性を求めてアンダー気味にすれば上りで強いアンダー¹。

上りでの旋回性を求めるてオーバー気味にすると下りで挙動が不安定に。

両立はできないので、ここをうまくバランスを取る必要がある。

今回工藤は若干旋回性を求めるようにしている。

（4WDならある程度挙動が乱れても問題はねえ。ここはアンダーを消すことに集中しよう）

と考えつつゴール地点から180°ターンして再度全速力で上り始める。

29話「セットアップ」(後書き)

なんとか前の話から一カ月以内に投稿できました。

次回からバトルが始まるので、楽しみにしていてください！

30話「ハチロク復帰」

上りに突入した工藤はそこで旋回性、加速性を確認する。

（加速は悪くねえ。問題は……）

ブレーキを踏みこみターンイン。

文句なしの姿勢、だが。

（やっぱりダメだな）

それでも気に入らない模様。

（やっぱりもっとステアにリニアに反応しねえとダメだ）

ヘアピンを立ち上がり、急な榛名山の上りを駆け上がっていくラ
ンエボ。

前にも述べたとおり、上りでは下りよりアンダーステアが強調さ
れる。今はそれが顕著に出ているのだ。

だが、アンダーといっても、スーパーAYCとACDのおかげで
旋回性能は抜群だ、だが。

（旋回中はいい……けど、最初の遅れが気になる……）

工藤はもう少しステアを切ったらすぐに反応する感じが欲しいの
だ。

今のでは反応が遅い。

＊

頂上で待っていると工藤が戻ってきた。

「ダメだあ！ ステアの反応が悪い！」

と言う工藤に俺は。

「少しセッティングをイジるか。とりあえず降りて」

ドアを開けて降りてきた工藤。

「で、なにをイジんだ？」

「とりあえずはトー角でいけるよ」

トー角とは、車を真上に見たとき、タイヤが外側に向けるか、内側に向けるかのセッティングで、変え方によっては走りも変わる。

進行方向に大して内側を向いているのがトーイン、その逆がトーアウト。

「基本的にはフロントをトーイン、リアをトーアウトにすればオーバー気味でステアの反応もよくなるから、それにセッティングしよう」といってランエボをジャッキアップさせる。

少しの間、斉藤と工藤に作業させ、セッティングを変える。

また少し経ち、工藤が出ていく。

「今度はマシになることを祈るよ」

4WDのトラクションを利用したロケットのような加速で出て行った工藤のランエボ。

＊

早速第一コーナーでセッティングの効果を実感する。

（やっぱ横谷……あいつは天才だな）

とつくづく思う工藤。

少し話を聞いてセッティングし直ただけでこの違いだ。

さっきとはまるで別の車、とまではいれないがイメージしてる動きには近づいている。

若干直進安定性が無くなったが、それは許容範囲。

わずかにスライドさせながら旋回するランエボ。

ただこれは調子に乗っているだけである。

本気のバトルなどでは滅多に使わない。

だが、この走りをするということはよほど気に入っているのだ。

（いいねー。この旋回性能がたまらない！）

GT-RのFRのような旋回性はないが、安定性能と旋回性能の塩梅がちょうどいいのだ。

そうこうしているうちに下りきり、ターンして上りへ。

上りでの動きも文句ない。

下りほどの旋回性能ではないが、これで十分だ。
パワーも十分というほどある。

＊

頂上に戻ってきた工藤は。

「最高のマシンになったぞ！」
と言いだした。

「ねえ」

と俺は暴走寸前の工藤を抑える。

「なんだ？ お前の言うとおりにしたら最高になったぜ？」

「工藤は昔から元の状態からよくなるとすぐ最高最高騒ぐ癖があるんだから……少しは頭冷やそうか？」

「元の目のハイライトを消した顔も怖いけど、笑いながら言われるのもかなり怖いんですが……」

「はいはい、わかったから。隣の乗せて」

「はい？」

こいつは耳が悪いのだろうか。

「助手席となりに乗せてって言ってるんだけど」

工藤は数秒フリーズした後。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお！！」

「なにすんだあああああああああああああああああああああああ
ああ！！」

突然お姫様だっこで俺をランエボのほうまで連れて行こうとした。

それを見ていた藤原達は。

「タコが誘拐されたー！」

「早くしないと危ないことされるんじゃない！？」

「きっとここでは言えないことを……！」

「工藤扱い悪すぎ笑えない」

ということで工藤の助手席。

「じゃあ、しっかり踏んでよ」

「お前に踏まれた……ぶおっ！」

顔面にグーを入れつつ。

「とっとと走れ」

「はひ（はい）……」

俺のハチロクでは体験できない加速をしていくランエボ。

減速してターンイン。

限界領域での走りは……？

わずかにフロントが逃げている気がするが、工藤は初期反応の良さに気を取られて気が付いていない。

下りではわずかな感じだけど、上りだとどれだけの影響があるのか……。

工藤はこのように一つのことに気を取られて裏での問題は気付かないことが多い。

ただ、このフロントが逃げるのはトーを調整した弊害ではないだろう、おそらく別の問題。

フロントが固くて荷重が十分に乗ってないが考えられる。

そうこうしていると下りのゴール地点でターン。

——上りだ。

やはり、フロントが逃げている。
流石に工藤も気づいているようだ。

「工藤、気づいてるでしょ？」

「まあな……完全にフロントが逃げようとしてる。こりゃアンダーもでるわな」

「上に戻ったらフロントのダンパーを調整するよ」
「わかった」

＊

そのようにしてセッティングを詰められていく。

セッティングを詰めた日の次の日。
つまり工藤との同乗走行の次の日。

ついに俺のハチロクが復活する。

朝おじさんのショップまで取りに行く。

「じゃあ、これでオーバーホールとかは全部完了だから。セッティングとかはできる？」

「大丈夫です。ありがとうございました！」
と頭を下げ、ハチロクに乗り込む。

キーを捻ると響き渡る4A—GEUの音。

この音だ……F20C改2。2リッターもいいけどやっぱり俺は

こっちだ。

「じゃあ、慣らしは500キロ以上は9000回転以上は回さないようにしてね。それと500キロ走ったら持ってきてね」

「わかりました」

俺はハチロクを発進させる。

勇ましい音とともに加速。

だが、慣らしの最中なので9000回転以上は回せない。

それでも十分なパワーだ。

これまでのハチロクとは違う。

少しの差だけど、下からもパワーが出るようになってる。

その日、遠回りして家に帰って休憩。

「遂に榛名のハチロク復活かー」

と半ば他人事のようにいう藤原。

「でも慣らしがあるからすぐ走れるってわけじゃないけどねー」
と言っておく。

「どのくらい走るの？」

「ざっと500キロくらいかな」

「500キロ……って結構あるよね」

「東京から京都くらいかな」

「長あ！」

「そんなもんだろー」

とかいいつつも、俺も500キロもどうしようかと思っている。

高速を使うにも金にかかるし、やはりここは榛名山をガソリンが無くなるまで走るのが一番だろう。

＊

そして夜、榛名山だ。

「久しぶりに見たなー」

と斉藤。

「なんとなくだけど、音変わった？」

とをリアのほうから横川。

「エキゾースト関係も見直したからね。それなりに変わってるかも」

「早く全開にしたみていねー」

と涼宮。

「その気持ちはわかるけど、まだ慣らしの真っ最中なんだよ」

「そんなに慣らしって重要な？ FDチューンしたときもやれって言われたからやったけど」

と藤原がFDのボンネットに腰かけながら訊いてくる。

「結構大事だね。故障しにくくなるし、うまくすればスムーズなエンジンにもなるし。実はこの車だって本当は何千キロとかやらないといけないのを、ダイナモで初期当たりを付けてくれたから500キロくらいで済むし」

「何千……どんだけの距離なのー……」

「もしかしたら日本一周とかかも」

なんとも言えない顔をする面々。

それはともかくとして、とりあえずは慣らし運転だ。
ノンストップで上り下りを往復する。

＊

それから数分後、何回か往復して、上っている最中。
反対車線から二台ほど絡んで走ってくる。

FDとランエボ？だ。

おそらく工藤と藤原がつるんで走っているのだろう。

ちょうど俺がヘアピンを立ち上がって上り坂を上ろうしたところ
で、逆に降りてきたようだ。

俺はインにより二台へ道をあける。

下りをまるで別次元の車のように下っていく二台。

前が藤原のFD、後ろが工藤のランエボ？のようだ。
あれが下りだったらな俺でも追い付けるのに……。

でも、なんで工藤の藤原はレースしてるんだろ……。

30話「ハチロク復帰」(後書き)

テスト期間なのに投稿できちゃいましたW

とりあえず次回は工藤VS藤原の経緯に、内容。

できたらVSR32の最初のところで書きたいと思います。

31話「工藤VS藤原（前編）」

時は少しだけ遡る。

瞳が走りに行ってから少し経った頃。

「いくら電子制御があっても旋回性能はFDにはかなわないでしょう？」

と言いだした藤原。

「んなことはねーよ。突っ込みで負けても立ち上がりとかはこっちのほうが速いし。全体的にもこっちのほうが上だ」
言い争いに発展していく二人。

「よし、それなら直接バトルして決めない？」

「ああ、いいとも！」

ということでバトルになったのだ。

やれやれという様子でスターターを務める斉藤。

「じゃ、下りと上りの混合で」

「いい練習になるといいなあー。お前がついてこれないかもしれないけど」

「ふん、こっちがちぎるし」

「5，4，3，2，1、GO！！」

横並びの状態で二台がスタートする。

パワーはほぼ同格だが、4WDのトラクションでランエボが前に出る。

しかしそれはノーズの分だけ、イン側のFDはまだ余裕はある。

突っ込みで有利なFDがランエボを抜かす。

ランエボは後ろにピッタリとつく。

いつでも抜ける体勢だ。

後ろからプレッシャーをかけミスを誘う作戦。

だが藤原は動じない。

早速工藤を引き離そうとペースを上げる。

工藤もペースを上げる。

だが、藤原のペースに引っ張られるのではなく、しっかり自分のペースも維持している。

これは走り慣れた榛名山だからできることだ。

別のコースでは、相手のペースに引っ張られ、わざとペースを乱すような走りをされたときに引っかかってしまう。

藤原にはそれをできる技術も十分にあるのだ。

だが、二人とも分かり切っている。

二人それぞれ最速^{レコードライン}ラインを持っている。

だから、かく乱は通用しない。

藤原は自分の最速^{レコードライン}ラインで逃げ切れれば勝ち。

工藤は自分の最速ラインレコードラインで追いかけて、抜けば勝ち。

二台の榛名山での走りの意地をかけた対決である。

基本突っ込みでは軽量かつ旋回性能に優れる藤原のFDのほうが有利だが、全体的な安定性では工藤のランエボのほうが高い。

一見工藤が優勢に見えるが、重量では200kgほど藤原のFDのほうが軽い。

そして、乗用車のランサーをベースにしているランエボと違い、RX-7 FD3Sは純粋なスポーツカー。

ドライバーの腕によっては、ランエボすら凌駕する。

対して工藤のランエボは運動性能の要となるスーパーAYCのセッティングを変え、ノーマルよりもさらに高い次元の旋回性能を手に入れている。

そこに瞳がアドバイスを出し完ぺきとまではいかないがセッティングされた足回り。

日本で最高峰の安定した旋回性能を誇る。

パワーはほぼ互角だが、トラクションはランエボのほうが上。

対してFDは軽量なおかげで藤原のFDはそれほどランエボよりは見劣りしない。

だが、コーナーからの立ち上がりは藤原のFDのほうがシビアであり、ドライバーである藤原への負担は大きい。

ヘアピンへの侵入。

ランエボはブレーキングで遅れるが、工藤にとってこれは想定内。旋回中で追い付ける、そう踏んだ工藤だが――。

（追い付けねえ……）

と悪態をつくほど、藤原の旋回は速い。

だが、加速である程度追いつく。

テール・トゥ・ノーズとまでいかないが、ある程度追い付いた。

（やっぱ、軽さは侮れないな）

と思いつつFDに追い付くための戦術を立てる工藤。

（あんまりここでブレーキを消耗するのも後々きそうだしな。やっぱクレバーに離れないようにしていくか）

＊

藤原も頭をフル回転させ、工藤に勝とうとしている。

（このまま行ってもへばり付かれたままだし、ここで振り切る！）

そこでさきほどのブレーキングからの旋回だったのだ。

上りでは重量の差が消えてしまう、それでブレーキング勝負は愚の骨頂だ。

逆に下りでは重量の差がもろに出る為、それを利用して引き離そうとするのだ。

ただしタイヤに負担はかけられない。

グリップ走行で負担をかけないように旋回していく。

フロントが逃げないように、リアのトラクションが抜けないようにアクセルを慎重に操作する。

（タコは無意識にこれができるんだろうなあ……それを考えるとすごいよ……）

と思いつつコーナーを立ち上がる、やはりあちらのほうがトラクションがいいのか、追い付かれる。

だが、次の突っ込みで離せられる。

ギリギリ、上りでもバトルできるようなところを探りながらブレーキを踏む。

探り、とはいうものの、走り込みのおかげである程度は推測できている。

だから迷いはない。

ブレーキング。

ギリギリのところで踏み込む。

A B Sのおかげで思いっきり踏んでもロックはしない。

そのまま旋回姿勢にうつる。

わずかにアクセルを踏み、車体を安定させる。

工藤のランエボは離れた。

コーナーの立ち上がりでアクセルを丁寧に踏み足していく。

コーナーで工藤のランエボから離れる。

だが、ストレートで追い付かれる。

だが、藤原はそれも想定内。

90°のコーナーが続く。

その先は、榛名山名物の5連続ヘアピン。

ここでいっきに引き離す。

そう考えながら、ハンドルを握り直す。

そして一つ目のヘアピン。

近づいていたランエボが離れる。

（ここで離れないと最後に抜かされる……！）
そう思い、必死に攻める。

工藤のランエボは遠ざかっていく。

＊

一方工藤も慌てていなかった。

（別にコーナーで全部仕掛けろってわけじゃねえ。ストレートで抜いても別にいいんだよ）

高いプライドも持たず、勝つことに集中していく。

このメンタルも、コーナリングが常識外れな瞳と走っていて形成されたもの。

ヘアピンでも離れるだろうが、その先は高速セクション。
上手くすれば下りのうちに抜ける。

そう考え、リラックスする。

アクセルを踏み込む。

（焦らず、家宝は寝て待てってこれのことだな）

と若干の外れなことを考えつつ走らせる。

案の定、5連続ヘアピンでは二台の差が開く。

工藤はヘアピンを立ち上がるごとに、藤原のFDが遠ざかっていくのを感じる。

だが、その差を作るヘアピンはもう一つで終わる。

そしてストレート勝負へ。

加速ではランエボが有利。

先程の差をいつきに詰める。

ノーズを入れる。

だがその直後にコーナー。

FDを捕まえられない。

FDがインを締める。

だが、工藤の顔には焦りはない。

彼は下りで抜けなくても上りで抜けばいいのだ。

さらに、上りではアドバンテージがあるというわけではないが、下りよりもブレーキングでの差が出にくく、立ち上がりでのトラクションでランエボが有利になる。

まもなくUターン。

下りでの最終コーナーを立ち上がり、ゴール地点にあるパイロンを見る。

そこを回転して上りにうつる。

藤原はマシンをスライドさせ、上りにうつる。

ワントempo遅れて入ってきた工藤は停止ギリギリまで減速し、小回りしながら旋回して上りにうつる。

加速勝負。

スライドでトラクションを失った藤原が立ち上がりで若干遅れる。

逆に4WDのトラクションを利用し、ロケットスタートを決めるランエボ。

ここから工藤とランエボの逆襲が始まる。

31話「工藤VS藤原（前編）」（後書き）

投稿遅れて済みませんでした。

思ったより長引きそうだったので、一旦ここで切り、次回でこのバトルは完結させる予定です。

また気長にお待ちください（オイ

32話「工藤VS藤原（後編）」

このまま逃げ切れる、それが藤原の目標だ。

だが、上りではランエボのほうが一枚上手の可能性もある。

ブレーキでもあまり離れず立ち上がりで近づいてくる。

ただ、FDもただ不利になったわけでもない。

リアに荷重がかかりやすくなり、トラクションが増すのだ。

だが、代償としてフロントの荷重が抜け、旋回性能が無くなるのだ。

だが、ランエボは違う。

曲がるセッティングをしても、4WDのおかげでトラクションは抜けにくい。

下りで武器にしていた、FDの軽さという武器は、上りでは通用しにくい。

工藤の白いランエボが迫る。

長いストレートからのブレーキング。

わずかに離れたものの、引き離せるほどではない。

ほぼ同じくらいのパワーのはずだが、トルクが違うのか、ストレートで追い付いてくる。

そしてブレーキング。

ここから5連続ヘアピンだ。

わずかにスライドさせるように旋回させる藤原。

(ここまできて離せないなんて……ッ。ここで離すしか……)

と考えているが、ランエボもランエボでコーナリングは速いのだ。
派手な動きはしていないが、速さは一級品。

地味な走りで遅く見えることがあるがのほうが速かったりするこ
ともあるのだ。

バトルの状況を見て、派手に走るのも、地道に走るか判断できる
のが工藤の特徴。

今は淡々と走り、FDの後ろにつき藤原を精神的に揺さぶる方が
よいと判断したのだ。

その作戦は、わずかながらでも効いてきてると判断する工藤。
走りには大した影響は出てなさそうだが、いずれは破綻しそうな
オーラを感じる。

そして、破綻の時がきた。

五連続ヘアピンのあと、ストレートのあとのヘアピンだ。

侵入は完ぺきだった藤原。

だが、離れない工藤。

いつきにインにマシンをねじ込んでくる。

イン側のラインをふさがれた藤原はアウトギリギリでコーナリング速度を稼ごうとする。

だが無理だった。

計画的に侵入した工藤のほうがりっかりと旋回できたのだ。

藤原のFDは少し体制を崩すようにして立ち上がる。

藤原が加速勝負を、と思ったところでもう遅し、工藤のランエボが前に出る。

（ミスったあ……！ まさかこんなところで……！）

ストレートでランエボが完全に前にでる。

峠で前に出られると、抜くのは困難となる。

だが、藤原は諦めない。

（まだ、どこかでいけるはず……）

だが、今度のバトルに備えてマシンをチューンした工藤は今まで以上の速さだ。

4WDならではの決して壊れることがないように感じる走り。

だが走らせているのは人間。うまくプレッシャーをかければその走りは崩れる、藤原はそう考えた。

コーナーへの侵入。

ブレーキングで無理やりインにマシンを動かし、実際は無理なのだが『抜くぞ』というようなプレッシャーを与えた……はずである。

やはり工藤は動じない。
やはり普段の軽い調子とは全然違う。

煽ることはやめ、後ろにピッタリとついていくことに。

この方法でも、精神的にはボディブローのようじわじわ効いていくのだ。

（この方法なら、最後でチャンスができるかも……ッ！）

と前向きに考える藤原。

＊

そのころ、頂上に戻ってきた俺はかと言えば。

「ランエボとFDを比べたら、どうなるか…かあ」

と横川の質問を復唱していた。

「ぶっちゃければ、ランエボのほうが戦闘力は高いよ。けど工藤のランエボはまだ最後の詰めをできてないから、ほぼ互角ってところかな」

「正直に言っ、どっちが勝つのかわかるか？」

と斉藤。

「俺でもわからないね。あまりにマシンとドライバーが互角だし。……ただ、ランエボに不確定要素があるんだよな」

「不確定要素？」

「車重だよ。FDとランエボには200キロ以上の差があるから、ランエボは終盤でタイヤがタレるかも」

「けどそれくらいは工藤^{あいつ}は予想するだろ」

と斉藤は言ったが。
「どうだろね。あいつはバカだし」

＊

その工藤は後悔していた。

（くそ、タイヤが……）

瞳が予想した通り、工藤のタイヤは熱ダレ——要はグリップ力が低下してきていた。

（同じくらいの重量のGT-Rのことしか考えてなかったから、予想よりも藤原と差がつかねえ……いやそれどころか……）

どう考えても、煽られている。

そのことに気づいてしまい、焦りはじめる工藤。

藤原も工藤の変化に気づいていた。

（ランエボの動きが変わった……？）

さっきまでいつでもぶっちぎるぞ、といった様子だった工藤のランエボだが、明らかにペースダウンしている。

（これはチャンスかも）

仕掛けられるポイントはあと一つだけだ。

残すコーナーはあとわずか。

工藤が推測するに、このあとくる2連続ヘアピンか、最終コーナーあたりで仕掛けてくると予想している。

2連続ヘアピンへ突入。

ブレーキング。

工藤のランエボがわずかに膨らむ。

藤原のFDがインを刺そうとする。

工藤は無理にブロックしようとはせず、加速体制にうつる。

だが、FDは抜きにこなかった。だがノーズはアウト側に入れてある。

これにより工藤は迂闊にアウト側によれなくなる。

（無理を避けたか……？）

だが、コーナーはまだある。

ストレートでは大して離れない。

そして最後のヘアピン。

ここを過ぎればゆるめのコーナーしかない。

工藤がイン、藤原がアウトのままコーナーに侵入する。

藤原は壁際を攻める。

工藤はインベタで攻める。

だが。

（くそ……タイヤがヘタっててグリップしねえ！！）

藤原と並んで立ちあがる、サイドバイサイドだ。

そして2連続ヘアピン直後のゆるい左コーナー。

ここではわずかに藤原が遅れる。

わずかに工藤が先行しながら最終コーナーへ。

＊

藤原は瞳のように考えながら勝負を仕掛けたわけではなかった。
わずかに工藤のラインがズレたところにマシンを突っ込んだだけだった。

（姿勢が崩れてる、これならいける！！）

そのままノーズを突っ込んだままストレートを駆け上がる。

そしてアウトの壁ギリギリからのサイドバイサイド。

加速勝負。

わずかに先行している工藤が有利と思われるが。

（頼む、曲がってくれよ！）

工藤は内心ヒヤヒヤだった。

藤原も藤原で。

（リアタイヤがあやしい……こんなところで）
そしてステアを握り直す。

（だけど、このFDならいける！）

最終コーナー、アウトに工藤、インに藤原。

工藤のランエボはアンダーステアを誘発した、だが許容範囲。

一方藤原のFDは――――

（滑ってる！？ オーバーステアなのか！）

正気の沙汰とは思えない、並走状態でスライドなど下手をすれば
2台とも絡んでスピンをしてしまうかもしれない。

だが工藤には不思議と藤原のFDは無事に立ち上がると思った。

強引にインにマシンを戻した藤原。

二台ともアクセルを踏みこむ。

クラッチを切りシフトアップ。

二台のマシンがアフターファイヤーを吹く。

そして瞳達が見守る中ゴールラインを越えてゴール。

＊

俺達が見守る中、二台が駆けあがってきた。

工藤が微妙にアンダーを出して失速するなか、藤原はオーバース
テアながらも見事にマシンをコントロールしてインベタで立ちあが
ってくる。

完全なサイドバイサイド。

二台がフル加速してくる。

そしてゴールラインとなっている俺の目の前を通り過ぎた。

「同着!？」

と横川。

「そうみたいだな、横谷はどうだ？」

と斉藤が訊いてくる。

「俺から見ても同着だったね」

「まさかの同着かー」

とFDとランエボのほうを見ながら涼宮。

俺もFDとランエボをみていたら、ドライバー二人が飛び降りてきた。

息を切らしながら工藤が。

「どっちだった!？」

ここは真実を伝えなければならない。

「同着だったよ」

「え……」

とつぶやくように言う藤原。

「ここまでやって同着ってなんなのー!!」
知るか。

工藤に至ってはガードレールにもたれかかっている。

＊

そんなこんなで、バトル後にしては異常にテンション低く帰宅である。

「ただいまー」

「ただいまです……」

わかんと思うが、上が俺、下が藤原だ。

「おかえりー♪」

もちろん返事しているのは姉貴だ。

漫画でいうと『ぬっ』といった感じで出てきた姉貴だが……

「なんでネコ耳付けてるんだ？」

「イメチェンよー。最近影薄いしー」

「なんの影が薄いんだよ」

「うふふふ」

変に笑いだす姉貴。

変な人だ。いや、いつもか。

それはともかくとして、今日のバトルについて姉貴に話す。

「ランエボ？になってそんなに速くなったのねー」

と紅茶を飲みながら姉貴。

「正直乗り換えた直後はドン尻同然だったからビックリしたわよ。

流石工藤君もセンスあるわよね」

「まあ、あいつは昔から速かったしなー」

と俺が言うと。

「なんであんなに仲良さそうで付き合わないんだろ……」

と藤原がつぶやくのが聞こえた。

「おい、よく聞こえるぞ」

「え」

「俺があんなのと付き合うと思うのかあああああああああああ

ああああ!!」

「いやああああああああああああ!!」

32話「工藤VS藤原（後編）」（後書き）

お待ちにしていた方待たせてすみませんでした！

ようやく投稿できました（汗

次からはやっとR32とのバトルになると思います。

次回も首を長くしてお待ちしていただけるとありがたいです（オイ

33話「BNR32対ランエボ？」

あの後3人でとっつかみあいとなり、30分ほど時間を消費してからである。

具体的にはポカポカ叩いたりなどなどだ。

そして決着は。

「不毛な争いはダメだね……」
と藤原。

「結局瞳はツンデレじゃないのね……」
と天井を見上げながら姉貴が言う。
「だから俺に恋愛を求めるなと……」

3人でぜえ……ぜえ……と息を整えた後、結論として。

「じゃあ瞳は百合ってことで」

うん、そう俺は百……

「おいこらまでそのロリコンショタコンシスコンビッチ」

「なんて酷いこというの……」

「事実を言ってるだけだ」

と言いながら姉貴をみると涙目でジーンと見てきている。

「同性にやっても変な奴にしか見えないからな」

「私ビッチじゃないのに……!」

「否定するのそこだけかよ……!」

そうすると姉貴は「酷い……酷い……妹が酷い……」と永遠ループしながら体育座りで隅っこに座り込んでしまった。

「言いすぎじゃない……?」

「いや、そのうち復活するから大丈夫だろ」

と言ってみるが、隅っこで体育座りしている姉貴は若干不憫だった。慰める気はないけど。

＊

それから夜。

「で、昨日のバトルでなにかを得たと」

「そう、だからまたセッティングを変えよう」と

と工藤、今更なにをいうんだこいつは。

「具体的には？」

「一発の速さを削ってもっと抑え目でいこうと思う」

「普通に考えればそうなんじゃない？」

「いや、多少キレがあるほうがいけるかと思って」

ダメだこいつ。俺だって最近ハマったりなセッティングにしている。

いくら走ってはいても身体がもたない。

「多少は余裕が必要でしょ。いつまでもキレキレじゃそのうち集中力がキレルよ」

「うまいこと言ったつもり？」

「そんなつもりはないからね」

「クールに返さなくても……」

「俺になにを求めているんだよ」

ここでツンデレ風に返しても誰が得するんだよ、ネット風にいえば誰得。

このまま議論しても仕方ない気もするので工藤なりのセッティングを試してやることに。

ランエボに乗り込みながら訊く。

「どこを変えたの？」

「当たり前ながらサス回りだ、バランスじゃなくて全体的に柔らかくした」

「へー」

「なんだその気のない返事」

「だってどうなるかあんまわからないし」

「走ればわかることだ」

と言いながらランエボを発進させる工藤。

ハチロクとは違う、4WD+2リッターターボの加速。
あつという間に第一コーナー。

一気に減速、少しずつブレーキをゆるめながらそのままターンインしていく。

確かに前のときよりロールが増している感じがする。
その分の余裕もできているかもしれない。

いや、それよりも――――。

「やっぱアクセルオンでアンダー出るなあ」
と工藤。

そういつつも完ぺきなラインでアウトインアウトのライン。
そしてまたフル加速。

そして第二コーナー。
ここは軽めのブレーキで侵入。

突然工藤が軽く笑いながら。

「こりゃ……思ったよりもいい感じに仕上がってる」
そういう、フルスロットル。

次は初めてのヘアピンだ、

フルブレーキング。ABSのおかげでロックしない。

ブレーキをゆるめながらターンイン。

アクセルを入れていく、だが微妙にグリップが抜けていく感触。

だがわずかにクリッピングポイントを外す。

軽く舌打ちする工藤。

マシンの問題というより、工藤がまだ挙動に慣れていないらしい。
同じマシンでもセッティングで動きは変わるからなあ。

次もヘアピン。

こっちは少し道路幅が広がっている。

毎度のことながら、ブレーキングからの侵入。

今回はアクセルオンをこらえているようだ。

慎重にアクセルオン。

だが今回は踏みが足らず、思ったように脱出ができなかった。

「苦戦してる？」

「まあ、まだ俺が慣れてないってとこだな」

「俺が降りたら違うかもよ」

「40弱のウェイトってどこか」

「いや、40強だよ」

「え」

「えって言われても」

「いや、普通は『そんなに重くないし!』とか言われるのかと思っ
て」

「いや流石に30キロ台はないでしょ」

「いやー……でも」

「俺がそんな女々しいことをいうと思うの!」

「いや……うん、もうどっちでも」

走行中に複雑な顔をする工藤。

まったく、俺は生粋の女子ではないんだから。

＊

その日は、俺を下して一人で黙々と走っていた工藤。

なにはともわれ、今日は相手とのバトル当日である。

予定の時間よりも早く今回の相手、杉村がスタート地点にやって
きた。

「じゃ、予定より少し早いけど練習走行をしててくれ」

「わかった、ありがと」

といってマシンに乗り込み走り去っていく。

「さて」

と工藤はランエボに寄りかかる。

「これからどうするの？」

と聞くと工藤はGT-Rが走り去って行った方向を見ながら。

「まあ、特にやることはねえな」

「ここで腰を落ち着けてるって？」

「まあそんなとこだ。走りを見たってどうってわけでもないし、なんかズルい感じだしな」

「工藤らしい」

「そうか？　じゃあ俺と付き合」

ボカツ！

「な……ん……で……腹パン……を……？」

「いやなんとなく」

「なんとなくてされるのかー！！」

「だって」

「バトルする直前の奴にそんなことするのかー！！」

「俺にやられれば喜ぶって聞いたのに……」

「い……いや、そんなリアクションもとれない……」

「なんて貧弱な……」

「そんな問題かー！！」

「まったく、ボケとして成り立ってないぞ」

「そんなキャラになったつもりないからなー！！」

とワイワイやっていたら練習走行は終了。

ついにバトルだ。

＊

二台の4WDターボマシンが並ぶ。

方や2リッターターボのランサーエボリューション？

方や2、6リッターのスカイラインGT-R BNR32

よくよく考えてみれば、二台の成り立ちは少し似ている。
乗用車をベースに、レースで勝つための車をつくる。
そうした生まれたマシンなのだ。

その二台が激突する。

この日は珍しくカウントを瞳がする。

「じゃあいくよ!」

と手を上げ。

「5、4、3、2、1、GO!」

カウントに合わせるように空ぶかししていた二台が、わずかにスキール音をさせながら加速していく。

まるでロケットのように飛び出していく二台。

排気量の差か、GT-Rが前に出る。

そしてコーナーに飛び込んでいく。

イン側にいたGT-Rが一足先に第一コーナーに飛び込んでいく。

工藤が後追いという形になる。

それを一瞬ながら確認でき、藤原が口を開く。

「これは予想通りってところ?」

「まあ、そうだね」

とガードレールに腰をかけながら瞳。

「まあ、年式が新しいランエボのほうがコーナーでは有利だろうけどね」

「ってことは、杉村がリードを守れるか、工藤が抜けるかってところ

ろが勝負だよね」

と二台の音がする方向を見ながら横川。

「ざっくりと言えそうだね、まあ工藤なら大丈夫でしょ」

「ずいぶんと工藤のこと信頼してるね。なんかあったの？」

と涼宮。

「いやなーんにも」

と真顔で返す瞳。

「タコ、そういうときは顔を真っ赤にして『そ、そんなことないもん！』でしょー」

藤原がブーイングのようなものをいいながら言ってくるが瞳は。

「だってホントにそういう関係じゃないし」

「「つまんなーい」」

3人がブーブーとやじを飛ばす。

「あんたらはなにを期待してるんだよ！！」

瞳の叫びが峠に響き渡る。

＊

二台のマシンは一気に下っていく。

コーナーでは今のところは互角である。どちらかが意図的に抑えているという可能性もあるが。

ラインの自由度は工藤のほうが高い。

なにかといって、コースの熟知度が大事なのだ。

先行では抜かされやすいポイントを熟知し、後攻では抜きやすいポイントを知っている。

この点では工藤が凌駕している。

（しかし、相手もうまいもんだ）
と相手の走りを称賛する工藤。

二台の走りには派手というわけではないが、圧倒的な威圧感でギヤラリーを圧倒する。

瞳の非力なマシンを、最低限の減速で駆け抜けるのとは違い、この二台はマシンをなだめるように走らせていく。

下りはなにもなく終了する、そう思った矢先、ヘアピン直前のストレートで杉村が工藤の動きに気付く。

いきなりレイトブレーキでイン側にねじ込むように入ってくる。

アウト側でめいっばい加速し事なきを得る。

そして、わずかながら杉村のペースがあがった。

それを見て、工藤はわずかに笑う。

33話「BNR32対ランエボ？」（後書き）

どうも、お久しぶりです、オロトです。

テストやら修学旅行やらなにやらしてて書けずにいたら、こんなにも○

待ってくださっていた読者のみなさん、本当に申し訳ありませんでした。

とりあえずこのバトルの話を1話か2話ほど書いて、瞳のバトルに戻したいと思っています。

では、できれば次回も気長におまちください（え

34話「BNR32対ランエボ？ 決着」

一気に均衡が崩れ、GT-Rがペースを上げる。

ランエボも追撃する。

ここで振り切れなければ負ける、杉村はそう思う。

わずかながら、工藤のランエボは離れていく。

まさか、と思いつつもペースを上げる。

＊

頂上にていつものメンバーで話しあう。

「工藤は意外と策士なんだよな。まあ車から降りればただのバカだけど」

「前半は知らなかったとして、後半は同意」

とシビックに腰掛けながら横川。いつもの言動からかあんまりいいイメージはないらしい。

「ま、走りなれた工藤が勝つんだろうけどな」

と斎藤。斎藤としても外からきたのに負けて欲しくないという願望もあるのだろう。

「タコとしてはどうなのー？ これって工藤は勝てるの？」

と涼宮がいつもの若干伸びた口調の上に、ニコニコしながらいつてくる。

「さっきも似たようなこといったけど、車の仕上がりは杉村のGT-Rのが上だし、ドラテクも並以上そうだしね。ま、工藤だって並

以上だしコースに慣れてるところが大きいかな」

「てことは5分5分？」

「いや、正直つまらないけど6・4で工藤かな」
ロクヨン

「でも4の文は相手にもチャンスは？」

「あるね。峠ならではの不確定要素もあるし」

＊

二台のマシンが峠を下る。

その後ろを走る工藤はわずかながら、離れていくGTRをにらみながら考える。

（思ったよりも速い、マシン自体もいいみたいだな）

だがほとんどコースは下ってしまったている。

そろそろターンの地点が出てくるはずだ。

本来ならゴール地点目前のコーナーを旋回しながら前の特徴的なテールライトをみつめる工藤。

杉村は多少焦っていた、確かに離れているのだが、決定的な差になっていない。

ペースを上げているつもりでもミラーに写ってくる。

そうこうしていると折り返し地点だ。

パイロンがおりてあり、そこでターンするのだ。

このようなどこでは接触を防ぐためにお互い了解しなくても、本来公道で走る車線の左側から侵入し、反対側に抜けるという暗黙のルールがある。

もちろん二台も従う。

杉村は丁寧で減速しグリップで回る。

そして持ち前のパワーで一気に加速していく。

その2秒、3秒と少し間を開けて侵入してきた工藤は豪快にスライドさせて回った。

まるでWRCに代表されるラリーのような走り。ギャラリーからは歓声が湧く。

そしてほとんどオツリを出さずに加速していく。

これによりわずかに差が縮まる。

それをミラーでわずかながらみていた杉村は寒気を覚える。

(なにか今までの走りとは違う……!)

そう気づいたときにはどんどん近づいてきていた。

(今まで抑えていたのか、しかも俺につかず離れずのペースで)

これはそう容易なことではない、並大抵のテクニック、そしてなにより重要なのはメンタル面だ。

離れていく相手をみて離れまいとペースをあげるのではなく、近づけるのにあえて離れるようにするのだ。

普段の工藤と違うというのは、こういうところなのだ。

追い上げる工藤だが、やはりストレートでは分が悪い。

杉村からすればストレートでしか勝てないというのは屈辱だが、そう考えたところで追いつかれる。

だがランエボも瞳のハチロクなどに比べれば、ストレートは速い。

そして、工藤の走りは今までと同じグリップ走行だが、動きが先ほどがまったく違う。

コーナーへの進入時のブレーキングポイント、一番インにつくクリップの位置。

どう考えても下りの時点ではわざと遅く走っていたようにしか思えない。

（いや違う、工藤くんはタイヤを消費しない程度で走っていたんだ。けどこっちは下りだと思ったよりも消費してる……）

今の工藤はタイヤをフルに使ったアタックをしている。

そうこうしていると高速区間も終わり五連続ヘアピン。

ここでは完全にコーナリングの差が出てしまう。

決して杉村のコーナリングが遅いわけではない、彼でも並以上のテクニックはある。

マシンの性能も合わせても工藤とイーブンだろう。

なにが違うのかといえば、瞳も言っていたことだが、走りこみの差である。

ランエボは完全にGTRを射程圏に置く。

榛名山、上り最速の男の逆襲の始まり。

五連続ヘアピンに侵入、ブレーキングで一気に差を詰めてくる。走りは大して変わらないが、下りのときと比べてスピードは段違いだ。

ギアチェンジをし、アフターファイヤーを吐き出す。

（A Y Cのセッティングを書き換えて正解だ。思ったように曲がる）
比較的『補助的な介入』だったランエボ？のA Y Cのコンピューターを書き換え、『すべてをサポート』するような感じに仕上げたのだ。

もともとそのようなパーツもあったので、簡単にできた。
そしてコーナーの出口。

G T - Rが近づく。

そして二つ目。

ブレーキングで詰める。

（突っ込みなら勝てるが、立ち上がりはあっちか……）
と冷静に分析しながらアクセルを踏み込んでいく。

だが、次ので追いつくと踏んだ。

その読みはあたった。

一気に射程圏内に近づく。

状態としてはテール・トゥ・ノーズ。

そのまま4つ目のコーナーへ。

アウトからいっきに畳み掛ける。

（アウトからくる……？）

と勘ぐる杉村だったが。

（いやインか……！）

工藤は多少タイトな旋回をしインを刺そうとする。
だがノーズを入れるスペースがない。

（このライン、まさか……）

工藤のっているラインは、わずかながらでもアクセルを長く踏めるラインなのだ。

アクセルが長く踏めれば相手よりも加速区間が伸び、パワーが少なくて追いつける可能性ができるのだ。

だが、工藤が稼げたのはほんの数メートル、だがそれでGTRに並ぶことを可能にした。

いつきにアウトからかぶせていくランエボ。

先程まではストレートでのマージンも含めて、抜かれずにいたGT-Rだが、これでは一溜まりもない。

（なんて旋回性能……いや、ドラテク……!）
と工藤を賞賛する杉村。

そして前に躍り出る工藤。

＊

頂上でそれを工藤が抜いたという情報を聞いた俺ら。

「やっぱ工藤だな、あそこでいくとは」

と斎藤は絶賛するが、俺は逆にイライラしていた。

「いや、これは大失敗だよ」

と俺がいうと周りの空気が凍りつく。

だが、俺はそんなことをかまっていられないほど焦り始めていた。

（あんなところで抜くなんて、あいつの頭はわたでも詰まっているのか……?）

＊

工藤は工藤で、当たり前だが瞳が考えていることには気づかず走

っている。

榛名の登りを疾走するランエボ。

だが5連続ヘアピンのあとの直角コーナーを抜けながら。

（G T — R が離れない……？）

先程までのペースなら、今頃はギリギリバックミラーに映る程度だと踏んでいた工藤。

だがテール・トゥ・ノーズとまではいかないが、ピッタリとついてくる。

（まさか、俺の走行ラインを参考して……！？）

そう、杉村は走りなれた工藤のラインを参考にし、追いつがっているのだ。

そして、最終コーナーから先はわずかながらストレート。逆転のチャンスはまだあるのだ。

（くそ、こんなことならもっと終盤で抜いておけばよかったな……）

と後悔する工藤。

＊

またしても頂上。

「てことで、あのアホはまた抜きかえさてる可能性を自分で作っちゃったわけ」

「タコってそこまで考えてたんだ」

と藤原。

「お前はそこも考えてないのかよ……」

「バトル中そこまで頭回らないしー」

「まあそうかもしれないけど……」

そういう戦略も大事だと思うんだけどなあ……。

「なにはともあれ、たぶんこの後は少しデッドヒートになると思うよ」

「瞳は、どこが勝負のポイントになると思ってるの？」

「多分、最後のヘアピンを抜けてからだな……」

＊

（多分あいつがしかけてくるなら、最後のヘアピンの後からだ……その前から油断できないけどな……）

焦る工藤。

後ろから迫るのは日本のスポーツカー史に残る一台、BNR32。

（こうなりや、限界の限界で逃げるしかねえよな!!）

工藤の魂に火がつく。

榛名登り最速の意地という名の魂に。

今までの走りからは想像もできない、スキル音を鳴らしながらの走りをする工藤。

それでもすんでのところでついてくるGTR。

（くそ、やっぱ甘く見すぎていたな……こりゃ負けるか……？ いや余計なことは考えるな）

やはりストレートの終わりではGTRが追いついてくる、だがブレーキングで離れる。

ほぼ一世代前のBNR32をここまで走らせていることを考えれば、杉村のテクに、GT-Rの完成度はかなりのレベルにある。

（ここで離せなければ、ゴールまでもつれて行ってしまうな……）

2連続ヘアピンへ侵入。

工藤はギリギリのレイトブレーキで侵入をする。

そしてわずかにスライドさせながらコーナーから脱出する。俗に言う四輪ドリフトだ。

GT-Rは丁寧なグリップで抜けていく。

ランエボがわずかに離す。

2つ目のコーナー。

ランエボはまたもスライドさせながら侵入。

GT-Rはグリップ走行でクリッピングポイントを奥にとる。

加速重視のコーナリングだ。

直列6気筒の名機、RB26が吠える。

レスポンス重視の400馬力がそのパワーを発揮する。

いくらブーストアップでそこそこチューンしてある工藤のランエボとはいえ350馬力出ていればいいほうである。

そしてGT-Rは直線番長なわけでもない、そうならばここまでついてこれるわけではない。

ヘアピンで稼いだ差などすぐに詰められてしまう。

そしてストレートエンド。

先ほどのレイトブレーキングやスライドさせたコーナリングでコーナリング性能が鈍っているランエボでは離せない。

（タイヤはもうズルズルだ、あとは一か八か……ッ！）

杉村も

（いける、ギリギリだけど最終コーナーで抜ける！）

最後のヘアピンをスライドで抜けるランエボ。

それに食いつくGTR。

そして加速勝負へ。

アウトに膨らむランエボ。

ギリギリのインを通るGTR。

横並びになる。

（こっちもタイヤが……膨らまないで……！）

と祈る杉村。

アクセルを踏みたいのをこらえつつ出口を待つ。

そしてストレート。

いつきに踏むが予定よりほんのわずか遅れたせいか、思ったよりも車速がのびない。

一方先にアクセルを踏めた工藤は予定よりも車速が伸びる。

二台はサイドバイサイドのまま最終コーナーへ。

先ほどと逆向きのコーナーのため、杉村がアウトへ、工藤がインへ。

最終コーナーへ侵入。

工藤はまたまたスライドでアンダーを消す。

杉村はアクセルワークでアンダーを消す。

（このままいけば、ちょうどストレートの方向とちょうどピッタリいく！）

工藤がステアを戻しながらアクセルを踏み込む。

（頼む、曲ってくれ！！）

ゆっくりをアクセルを踏み足す杉村。

二台の4WDのマシンが横並びのままゴールラインに飛び込む。

＊

俺は僅差になることを見越して携帯で映像をとっていた。

予想通り二台のマシンは僅差でゴールラインを通り過ぎた。

「どっちが先だったかわかった！？」

と藤原。

「ちょっと待て待て、これからパソコンにつないで……」

とノートパソコンを取り出す。

「そういえばタコっていつの間にスマートフォンにしたの？」

「いやー、この前この端末だけ安くてつい」

「変なところにお金使ってるのね……」

と呆れる藤原。いいじゃないか、好きでやってるんだし。

このようなときに限って読み込みが長く思える。

「まだなの！」

とバタバタしながら抱きついてくるのは……涼宮だ。

そのときドライバー二人がゴールの少し先で停車させた車から降りるのを視界の端で捉えた、どうやら疲れているらしく、こっちに

歩いてよってくる。

と、読み込みが完了し、映像データをパソコンに転送し早速ロード再生をする。

先にゴールしているのは工藤のランエボだった。

ランエボの前輪がゴールを超えたときに、GT-Rのフロントリッパの部分がゴールラインの真上にきた感じだ。

「工藤、勝ったよ!!」

と俺は工藤のノートパソコンの画面を見せる。

こっちにふらふらっとくる工藤は笑って手を振って、そのあと杉村のほうを向いて、杉村と握手した。

34話「BNR32対ランエボ? 決着」(後書き)

ようやく投稿できました! おまたせしてすみません。

どっちが勝ったかは次回に伸ばすか考えたのですが、こんだけ待たせたので結果も収めましたww
なので今回は少し長めです○

これで工藤の話は終わり、次回は瞳とハチロクの話に戻ります。

35話「今度こそ海だよ！」

二人とも限界での勝負だったのだろう、少し話したと思ったら杉村のほうは帰って行ってしまった。

工藤は俺らの車を駐車しているところに止めた。
過激な走行の後なので、エンジンは切らずにしてある。

「いや、我ながらよく勝てた」
と工藤。

「まったく、ヘアピンの直後抜いたって聞いたときはホント殴るか悩んだよ」

「どちらにせよ、勝てたんだからいいだろ」

「そうだけど、相手が俺の兄貴みたいにチート級なやつだったらどうするつもりだったの？」

「そのときはそのときだ」

そういう工藤に俺は思いっきり言ってみることに。

「工藤は頭に脳みそを詰め込んだら」

「そんなこと言うなよ、俺だってきっちり詰まってるよ」
と反論するも。

「」「嘘つけ」「」

と残りのメンバーに一蹴されるのだった。

＊

早朝、曇り気味なせいで夏なのに少し肌寒い、そんな榛名山に高回転エンジンの音が響き渡る。

瞳のハチロクだ。

アップデートされた足回りもほぼ仕上がリ、前よりも一段と早くなったはずなのだが。

（この前、工藤のランエボの助手席に乗ってからこうだ……今まで完璧に見えたハチロクがここまで遅く感じるとは）

だが瞳は走り始めて最初の1，2年を工藤とだけつるんで走っていただけである。

当時は工藤のランエボも？であり、さらに他に競う相手もほとんどいなかったためこのような不満はでてこなかったが、瞳の中ではある感情がくすぶり始めていた。

（このハチロクじゃ限界なのか……）

直登のNSXに負けてから気づき始めていた事実。

（だけど、俺にこのハチロク意外なにあるっていうんだ！）
と思いながらアクセルを踏み込む瞳。

*

学生の夏休みといえば、課題の存在を気にしつつダラりと過ごすものだ。

ダラリと行っても華の女子高生（おそらく死語）ならばオシャレして出かけてりしそうなもの。

ということだ。

「ねーねー、海いこうよ！」

と藤原がはしゃぐが、俺は。

「えー、潮風で車が錆びそうじゃんー」
ハチロクだって旧車なんだし。

「そんな古いの乗ってるのが悪いんじゃない……」

「対策するの大変なんだよ」

ある意味自分の肌より重大である。

「瞳ー、自分の日焼け止めよりハチロクのワックスを塗ってちゃだ

めよー」

と俺の心を見透かしたように姉貴。

「そ、そんなことするわけないよ」

「そうならいいのよー」

とニコニコしながらいう姉貴。正直怖いです。

部屋に戻って水着を探す。

行くからには楽しみたいのだ。

タンスの引き出しを引っ張り、奥のほうに手を突っ込む。

海にこういう会議をするちよっと前までエアコンをかけて部屋に籠
っていたため、多少ながら衣類が冷えていて気持ちいい。

「あ、あった」

水着を引き出す。

一つ目は紺色が特徴的なスクール水着。

……………。

「こんなの着るか！！！」

確かに中学の頃、学校の水泳で使っていたのだからあっても仕方
ない。

他のを探す。

すぐにそれらしき材質のを見つけ、引っ張り出す。

二つ目も紺色が特徴的な……。

「またか！！」

もう誰に突っ込んでいるのかもわからない。

まあ予備で二枚持っていたしな……おかしくはない……はず。

その後十数分探して見つからず、引き出しを全部引っ張り出して
大搜索した結果、スク水だけが5枚ほど見つかった。

「こんなの絶対おかしいよ」

といいつつ姉貴に俺の水着の場所を訪ねようと姉貴の部屋にいくと。

「……………」

「……………」

俺の水着を嗅いでいる姉貴がいた。

お互い目を合わせ、沈黙したまま時がすぎる。

意を決して声をかける。

「な、なにをしてるの？」

「く、腐ってないか嗅いで確かめてるだけよ、ふふふふ」

「と、ところで、なんで俺たち棒読みなんだろうね」

「さ、さあ。なんででしょうね」

「はははははは」

「ふふふふふ」

「なに人の水着取ってんだこのクソ姉貴いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！」

「な、なんでって、小さいからいらなかなって……」

「まだ着れるはずだああああ！！」

「瞳……そんなに成長を悲観しなくていいのよ……まだ望みは……」

「そんなこと一言も言っとらんわああああああああああああああああああああああああ！！」

「それに、代用でスク水たくさんいれてあったでしょ、それじゃダメなの？」

「余計になー！！」

「じゃあ着れるか試してみてよ」

「よしっ」

姉貴から水着を受け取る。

微妙に生温かいのが生々しい……。

この水着は中2のころ藤原たちに押し付けられ渋々買ったものだ。緑を基調にしたデザインで、一応ビキニタイプ（であってるのか？）のやつだ。

中2でこれって無茶したものだ……子供っぽいデザインだけど。

一応去年も着れたので今年も着れるはずだ。

脱衣シーンはカットさせてもらう。

男子諸君は残念だったな！

さて本題の水着だが……。

「下はいけたけど上が……」

「変わってないように見えて膨らんでいるのね」と俺の胸をじーっと見つめる姉貴。そして。

「フッ」

「今鼻で笑ったよね！？　ねえ！」

「そんなこと……ぷぷぷぷ……ないわよ……ふふふふふ」

「絶対疑ってるよね！？」

「まあ新しいの買わないとねえ……ふふふふふっ」

もうやだ、この姉。

＊

数日後、海に向けて車列を作って走っているいつものメンバー＋姉貴。

ん？　水着買うところ？

あれは大したことなく終わった。、どうせわーきゃー騒いで終わっただけだし。

しかしながら、ハチロクも旧車、エアコンの効きが悪い。というか、エアコン関係のパーツが壊れる寸前なのだ。

この前応急処置で小型の扇風機をつけたのだが、それも壊れてしまっている。

不幸だああああああ、と叫ばして欲しいものだ……。

着替えるのだから面倒だとTシャツの下に水着をそのまま着てきたが……

残りのメンツは……きっと涼しい車内なんだろうなあ……。

いかんいかん、考えにまとまりがなくなってきた。

本気でS2000でくればよかった。ちょっとエアロ派手なのが嫌なのだが。

などとウダウダ考えていたところ、俺の頭に妙案が。

こ、これならこの状況を切り抜けられる……！

フハハハハハハハハ、もうキャラが崩壊しているがどうでもいい、フハハハハハハハハハッ！

＊

その頃、瞳以外のメンツは。

工藤は。

「きっとアイツは暑いんだろうなあー。エス二でくればよかったのに」

斎藤は。

「旧車だとエアコンの効きが悪いんだろうな、想像もしたくない」
横川は。

「いくら気に入っていても実用性がないとねえ……どこまでこだわ

るんだか」

涼宮は。

「タコ、私のFZに同乗したほうがよかった気がするんだけどなあ

……」

藤原は。

「だからS2000にすればよかったのに」

香織は。

「一緒に乗れば別の意味で熱い車内になったのに……」

無事に海に到着。

「タコー？ 死んでないよね？」

と藤原が寄ってきたのとほぼ同時に、若干フラフラしながら車から降りる。

「これならエスニのがよかったよ」

と言いつつ降りると。

「な、ななななにしてるの!？」

「なにつて、水着になったただだよ」

「い、いつのまに着替えたの……？」

「さっき。ちょうど信号待ちのときにTシャツを短パン脱いだけだし」

「近くで信号待ちしてた人びっくりしただろうね……」

「それすら気にならないほど熱くなってたんだよ!」

「威張られても……」

藤原と砂浜に移動して他のメンバーを探す。

男性陣はどうやら場所をとって、早速ビーチにパラソルやらを立てているようだ。

「あれ、姉貴は？」

さすがにシスコンではないが気になる。

＊

ん、姉貴の様子が……。

「はあはあ……瞳の汗が染み込んだTシャツ……はあはあ……」

見なかったことにしよう。

数分後、全員水着姿になった俺ら一行。

そしてすぐ海にきたことを後悔した。

どうせ同じ貧乳でも横川とは違いますよ。あっちはスラっとして身長高くて……俺なんてチビなロリ体型ですよ……。

「瞳ー？」

「タコー？」

わーい、すなのおやまだー。

「大丈夫よ、瞳」

こんどはおしろだー。

「大丈夫だよー、タコにだって胸あるじゃない」
……。

「そんなおっぱいをぷるんぷるんさせながら言ってくるなああああ
あああああああああああああああ!!」

海はつらい。

「大丈夫だぞ、横谷」と工藤。

「うんはいわかったよ」

「おい、まだなにも言っていないぞ」

「どうせ『貧乳な横谷も可愛い!』みたいなこと言うんだろ?」

「そんなことがわかるなんて……そこまで心が通じ合っていたのか……」

「違うわ!!!」

「そんな照れなくてもいいんだぞ」

「お前が単細胞だからなにをいうかわかるだけだからな!!」

「単細胞? ミジンコと同等と言いたいのか……?」

「ミジンコ以下だろ」

斎藤のナイスツッコミ。

「おい斎藤、俺がそこまでボケてるように見えるのか!」

「それ以外はないだろ」

「くそおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

あーあ、どっか行っちゃった。

「ねーねー、バカやってないで手伝ってよー」

と浮き輪などをふくらませている横川。

こいつはマイペースだなあ。

そしてその後、ビーチボールを全力で工藤に投げつけたり、浮き輪を奪って海に突き落したり。

他は、まあ姉貴が抱きついてきたり、藤原と泳ぎで勝負して溺れかけたり、涼宮の胸に突っ込んで泣いたり、ビーチボールで横川に

遊ばれたり、それなりに楽しんだ。
そして日も暮れ、帰ることにしたのだった。

35話「今度こそ海だよ！」（後書き）

なんとか投稿できました。

なぜか書いているうちにこんなネタ&お色気（？）回に。

次回からは次のライバルが出てきますよ。

瞳は貧乳でもムチムチ太ももがいいんだよ！（あ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7362k/>

公道最速少女

2011年11月11日03時18分発行